

目次

序章

第一節 黄禍論…その概念をめぐって

第二節 先行研究と問題の所在

第三節 本研究の構成と概要

第一章 森鷗外と人種・黄禍論

——戦争・文明・衛生学という視点から——

序論

第一節 三国干渉後の人種と黄禍論と日本の対応

第二節 森鷗外における人種・黄禍論

(一) 黄禍論と戦争論

(二) 人種論と文明論

(三) 人種論と衛生学

結び

第二章 田口卯吉における人種論の展開

——内地雑居論から黄禍論まで——

序論

第一節 「人種」不在の文明史

(一) 文明史から人物史論へ

(二) 「内地雑居論」

第二節 人種論の予備…海外殖民論と南洋論

(一) 海外殖民論と南進論

(二) 「南洋通信」に見られる南洋

第三節 日本人種起源論とその展開

- (一) 日清戦争へ
- (二) 「日鮮同祖論」と実証史学
- (三) 人種起源論とその展開

結び

第三章 高山樗牛と人種・黄禍論

——アジア主義への接近——

序論

第一節 高山樗牛と国体論争

- (一) 国体論について
- (二) 「神国思想」と「家族国家観」
- (三) 高山樗牛の日本主義とキリスト教徒の反撃
- (四) 「単一人種構成論」と「多人種構成論」

第二節 「神話」研究と南洋進出

- (一) 「神話」による人種への着目
- (二) 「日本民族南洋起源説」とその展開

第三節 アジア主義と黄禍論

- (一) 『世界文明史』から見た人種闘争
- (二) 黄禍論をめぐる往復書簡

結び

終章

参考文献

序章

第一節 黄禍論…その概念をめぐる

「黄禍論」(Yellow Peril, Yellow Danger, Yellow Terror, Gelbe Gefahr, Péril Jaune)とは何かについては、いろいろな定義がある。

例えば、平凡社の『大百科事典』によると、

(黄禍論とは)「黄色人種がやがて世界に災禍をもたらすであろう、
というヨーロッパで起こった説で、(中略)もっとも早いのはドイツ

¹ 大別すれば、黄禍論に関する先行研究は黄禍論の形成と展開過程を課題としたものと黄禍論に対する対応を課題としたものに分けられる。前者については、ハインツ・ゴルヴィツァー『黄禍論とは何か』(瀬野文教訳、草思社、一九九九年)(Heinz Gollwitzer, *Die gelbe Gefahr: Geschichte eines Schlagworts, Studien zum imperialistischen Denken* Vandenhoeck & Ruprecht 1962)、同書の中国語訳、海因茨・哥尔維策尔『黄禍論』(訳者不明、商務印書館、一九六四年)、橋川文三『黄禍物語』(筑摩書房、一九七六年)、ジャン・ピエール・レーマン「ヨーロッパ人の近代アジア観——日露戦争と黄禍論——」祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』(創文社、一九七七年)、三〇三～三三四頁、Richard Austin Thompson, *The yellow peril, 1890-1924, The Asian experience in North America: Chinese and Japanese*, (Arno Press, 1978)、John Kuo Wei Tchen and Dylan, *Yellow peril: an archive of anti-Asian fear*, (Yeats Verso, 2014)などが挙げられる。

後者については、橋川文三『黄禍物語』(筑摩書房、一九七六年)、松村正義『日露戦争と金子堅太郎…広報外交の研究』(新有堂、一九八〇年)、同『ポーツマスへの道…黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』(原書房、一九八七年)、飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説——』(彩流社、二〇〇四年)、同『黄禍論と日本人…欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』(中央公論新社、二〇一三年)、廣部泉『人種戦争という寓話…黄禍論とアジア主義』(名古屋大学出版会、二〇一七年)などが代表的なものである。

また、ここで本稿に示唆に与えられた中国語先行研究、例えば呂浦・張振鷗『黄禍論歴史資料選輯』(中国社会科学出版社、一九七九年)、周寧『天朝遙遠…西方的中国形像研究』(北京大学、二〇〇六年)、羅福惠『黄禍論:東西文明的対立与対話』(立緒文化出版社、二〇〇七年)、楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅:「西方」視野的中国形像与近代中国国族論述』(政治大学出版社、二〇一〇年)も指摘しておきたい。

皇帝ウイルヘルム二世 (Wilhelm II, 一八五九―一九四一年) で、彼が画家クナックフス (Hermann Knackfuss, 一八四八―一九一五年) にいわゆる「黄禍の図」を描かせ、それをロシア皇帝ニコライ二世 (Nikolai Aleksandrovich Romanov, 一八六八―一九一八年) に送ってから、黄禍論はヨーロッパにおいて問題となった。それとともに日本と中国においても、三国干渉の結果として逆に「白禍」が叫ばれるようになった。(中略) 黄禍論は明治・大正にわたり、日本とアメリカ、イギリスの未来戦争物語に大きく影響し、たとえば、ホーマー・リー (Homer Lea, 一八七六―一九一二年) の『無智の勇氣』(The Valor of Ignorance, 一九〇九年『日米戦争』として訳出) や、千葉秋甫・田中花浪『黄禍白禍未来之大戦』(一九〇七年)、原田政右エ門の『遺恨十年日露未来戦』(一九一二年)、北原鉄雄の『次の一戦』(一九一四年) などの日本未来戦記がおびただしくあらわれ、小寺謙吉(一八七七―一九四九年) の『大亜細亜主義論』(一九一六年) が黄禍論を詳しく描き、徳富蘆花(一八六八―一九二七年) の「勝利の悲哀」(一九〇六年) が一方では有色人種の誇りとともに、他方ではそれが人種の大戦乱のもととなることを予言した。(中略) 日中戦争が始まると東亜共同体論、さらに太平洋戦争とともに大東亜共栄圏論となり、結局、八紘一宇が日本の世界戦争の目標とされた²⁾」

と指摘されている。また、『新版・日本外交史辞典』によると、

「日清戦争も終局に近づいた一八九五年の初め、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が、同戦争における日本の勝利に警戒心を抱いて唱えだしたことに代表される黄色(東洋)人種抑圧論をいう。当時、同皇帝は、日本が東洋で優勢を占めればやがてアジアは統一され、いつで必ずや欧州もそのアジアの結合力のために侵害されるであろう、と想定した。(中略) 日清戦争の末期、ウイルヘルム二世がロシア皇帝ニコライ二

²⁾ 『世界大百科事典』第九巻(平凡社、二〇〇七年改訂)、二九五頁。

世へ、ドイツの画家クナックフスの描いた一幅の油絵「黄禍画」を贈って、「キリスト教国は異教徒たる東洋民族に対して断固として立ち上らなければならない」と説いたことにより、当時ヨーロッパ人の間に著しく宣伝された。その結果、同戦争の後、勝利国日本に対する独露仏の有名な三国干渉が、黄禍論の最初の具体的な形となって行われた。ドイツ皇帝がそのような黄色人種抑圧の思想に執着した背景として、その頃の同国のいわゆる政界政策を考えなければならない。(中略)したがって日露戦争も、ロシア皇帝がそのような黄禍論に唆されたのが原因であったともいわれ、日本としては同戦争時、その黄禍論が欧米諸国に猖獗して世界の全キリスト教文明国が敵側にまわることを極力警戒し、それを阻止するためにも金子堅太郎(一八五三―一九四二年)を米国に、また末松謙澄(一八五五―一九二〇年)を英国へ派遣して対日友好世論の形成に当らしめたほどであった。しかし、そのような黄色人種に対する偏見は、その後も白色人種の一部の国々で踏襲されて、中国人および日本人移民排斥問題を生ぜしめた²⁾。

と指摘されている。以上、見てきたように、日本における百科事典に収録された項目、いわば一般的な理解としての「黄禍論」は、三国干渉以後の外交の事態を強調し、西洋の帝国主義が東アジア進出のために打ち出した外交策として捉えてきた³⁾。しかし、このような理解は一面的であり、国際政治的な要因を重視するあまり、西洋社会における長い人種差別主義の思想史的背景を見落とすおそれがある。

したがって、一般的に読まれている百科辞書の記述と異なり、日本における黄禍論問題の先駆的研究者である橋川文三(一九二二―一九八三年)は、黄禍

²⁾ 外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『新版・日本外交史辞典』(山川出版社、一九九二年)、二七六―二七七頁。

³⁾ ほかの辞書もおおむね同じように定義付けられていた。例えば、『日本国語大辞典・第二版』によると、「日清戦争において勝利を収めた日本を対象に、白人に及ばず黄色人種の禍害を説いた論」だと解する。日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典・第二版』第五卷(小学館、二〇〇一年)、二二四頁。

論を西洋における人種差別主義の枠組で扱われるべきだと主張する。橋川によれば、黄禍論は「白色人種の黄色人種に対する恐怖、嫌悪、不信、蔑視の感情を表現したもので」、「人種的偏見、人種的差別というカテゴリーに属する現象」であり、「その意味ではアメリカにおける黒人問題、ナチスにおけるユダヤ人問題、南ア連邦におけるアパルトヘイト問題などと同種の現象にほかならない」という⁵。そのうえで、橋川は黄禍論の特殊性を次にように述べている。

「黄禍の場合には、恐らくその背景にある歴史と、黄色人口が地球人口の中に占める比率の圧倒的高さとのために、同じ人種差別の観念の中でも、とくにきわだった形姿をとっているということではさきるかもしれない。つまり、人類社会に伝承、形成されてきたさまざまな人間差別の心理的複合体のうち、もつともながい歴史をかけた作り出された膨大な「神話」が黄禍論であるといえそうである。」

言い換えれば、橋川は黄禍論の歴史がただ三国干渉以後から始まった物語だけではないとし、「西欧の黄禍論を説くものたちはその起源を十三世紀（モンゴルの侵入）はおろか、紀元前四―五世紀（フン族の侵攻）の歴史的体験にさかのぼらせるのが通常である」という。さらに「極端な場合には、それを紀元前十世紀以前に求めるものさえある」と、橋川はより早い歴史的起源に求めなければならぬと考えている⁶。橋川によれば、「アジアとヨーロッパとの対立、抗争のすべての歴史を黄色・白色両人種のそれと同一視」したことで、黄禍論の形成は「すべて東方からする西方への圧迫を以て、黄色人種の白色人種への攻撃とみなす心理的なイメージ」と緊密な関係があると主張する⁷。かかる視点によれば、橋川は黄禍論の史的形成を八つの予備の段階にわけた。つまり、（一）フェニキア人の西侵、（二）ペルシアとギリシアの戦い、（三）ポエニ戦争、（四）フン族のヨーロッパ侵入、（五）サラセンのヨーロッパ侵攻、（六）

⁵ 前掲書橋川文三、七頁。

⁶ 同右。

⁷ 同右、七―八頁。

⁸ 同右、八頁。

トルコの脅威、(七) 蒙古の大侵攻、(八) オスマントルコの脅威である。⁹⁾ よって、「ヨーロッパは、有史前から幾度となくアジア人種の侵略に悩まされながら、かろうじてそのキリスト教と文明とを防衛し」、「近代に入ってからの黄禍論は、そうした歴史的回想の上にきずかれた幻影といふべきものにほかならない」と、橋川は考えたのである。¹⁰⁾

橋川の黄禍論の形成における東・西対抗の歴史的な記憶を強調するという考えに異論はないが、しかしその論述においての黄禍論と人種差別主義との関係について、より周到な吟味が求められる。その点については、ヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学の近代政治社会史教授であるハインツ・ゴルヴィツァー (Heinz Gollwitzer, 一九一七～一九九九年) は精密な論述を残した。東・西対抗という史的図式のなかに黄禍論を把握した橋川と異なり、ゴルヴィツァーは黄禍論が近代帝国主義の特有物であると主張する¹¹⁾。ゴルヴィツァーによれば、黄禍論とは一八七〇年代から第一次世界大戦まで一区切りとする帝国主義時代に誕生し、発展した政治的スローガンである。この時期に、経済学、地政学、人種学、人口論、統計学などの進歩により、帝国主義イデオロギーが形成されたが、これらすべてが黄禍論誕生の土壌となった¹²⁾。たとえば、「帝国主義の元祖の一人」とされていたイギリスの経済学者であるマルサス (Thomas Robert Malthus, 一七六六～一八三四年) は、「人間は等比数的に増える傾向にあるが、食糧は等差数的にしか増産できない」と考え、「飢えにかりたてられた人々が食糧を求めて押し寄せ、最後にはなにもかもが食いつくされてしまう」のだと主張する。ゴルヴィツァーによれば、「このような予言的マルサ

⁹⁾ 同右、八～一四頁。

¹⁰⁾ 同右、一四頁。

¹¹⁾ 前掲書『ゴルヴィツァー』、一一頁。氏によれば「黄禍」というひとつのスローガンを手がかりに、帝国主義なるものの本性とその思考方法に迫ってみよう」という。一方、ゴルヴィツァーは黄禍論の形成における東・西の対抗という歴史的要因を否定するのと同様、三五～三九頁を参考。

¹²⁾ 同右、一〇～一三頁。ゴルヴィツァーの黄禍論研究のまとめ方について、堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルトと黄禍論」『上智史学』(第五七号、二〇一二年一月)、一〇～一一頁によるもの。また、ゴルヴィツァー以外、黄禍論をめぐる『新版・日本外交史辞典』、松村正義の研究も同論文、九～一一頁からヒントを頂いた。

ス主義であったからこそ、アジア民族からの圧迫というお題目とびったり息があつてしまった」という¹³⁾。ここでゴルヴィツァーは、黄禍論と帝国主義との不可分の関係を強調している。

ゴルヴィツァーは黄禍論を批判的に検討し、「帝国主義の政治的スローガン¹⁴⁾」と断罪したものの、イギリスの歴史家であるビクター・キアナン (Victor Kiernan, 一九一三～二〇〇九年) は、黄禍論に対して、ある程度の同情的な見方を示した。キアナンによれば、「(ヨーロッパでの) 普通の人々の頭には、黄禍というのは茫漠たる脅威であるといえよう。すでに中国で生活をしている膨大な人口数、加えて数百万以上の世界に進出していた移民たちを考えるたびに、ヨーロッパ人は物怖じを禁じ得ない」。ヨーロッパ人にとって、アジアの人口は氾濫して災害をもたらし、「ヨーロッパ人は技術的に優位に立つことでアジアと対抗しなければならぬ」。もともと中央アジアに往来していた野蛮人を指す「ホルド」(Horde) という言葉をも、現在にはヨーロッパ人はアジア人を貶すために用いている。そのため、ヨーロッパ人に対して、黄禍というのは、経済的にも軍事的でもなく、膨大の人口数の外族人がもたらす脅威による「心理的な恐

¹³⁾ 前掲書ゴルヴィツァー、一三～一四頁。

¹⁴⁾ ゴルヴィツァーは「スローガンが象徴する近代社会の病理」という節に黄禍論を「帝国主義の政治スローガン」として理解した。スローガンの役割について、ゴルヴィツァーは次のように説明する。「政治スローガンがその効力を発揮するためには、まず世論というものが必要であり、さらにその世論が情緒的に反応してくれなければならない。その意味ではスローガンというのは、近代社会の精神状況をよく表わすものであるといえる。(中略) いずれにせよスローガンというのは、簡潔で要を得たものでなくてはならないし、どこで誰が聞いてもすぐ理解できるものでなければならぬ。したがってそれは一般性におおまかで、粗雑で、ものごとを歪めてしまうような性格にならざるをえない。またそれは、人々の心をなぐさめたり、ふるいたせたりして、希望や勇気を呼び起こすことができるのと同時に、恐怖や不安をかきたてることもできる。消えたかと思うと、ある日突然浮かびあがる。でっちあげられ、形をととのえられ、まことしやかにいふらされ、巷に宣伝され、人々の頭のなかにたたきこまれる。そうかと思えば傍若無人なスローガンもある。製御しようとしてもいうことを聞かず、土足で上がりこんできて許可なく居すわってしまう。いつもそうだとはいわないが、時として殴る蹴るなど乱暴狼藉をはたらき、破壊行為にまで及ぶことすらある。いずれにせよ、スローガンをつくり、まき散らす者たちは、ものごとを得意即妙に説明し、解釈し、定義づけしたくてもうざずしているのである。」前掲書ゴルヴィツァー、七～八頁。

慌」であるとキアナンは解する¹⁵。

ここでキアナンが強調しているのは、「ヨーロッパ人の歴史は小さな自由都市と国民国家に源を発し、もともと膨大な人口に対する本能的な脅威を持っていた」ということである。「ヨーロッパ人にとって、アジアのもっとも代表的なものはその膨大な人口である¹⁶」。一九世紀以後、ヨーロッパ人は非ヨーロッパ地域における覇権地位を確立し、「世界の主宰¹⁷」という自己認識をもって世界に進出したときにも、アジアの膨大な人口は相変わらずヨーロッパ人に警戒心を持たせたのである。

かかる意見は、ヨーロッパ人自身の歴史的発展経験に立脚し、黄禍論の形成における合理的要因を見いだそうとするものである。しかし、ここで問題となるのは、黄禍論の形成については、ヨーロッパ人自身の歴史経験の独特性は黄禍論に内包されている侵略主義・人種差別主義・帝国主義などの口実とはならないことである。かえって「ヨーロッパ中心主義」の落とし穴に陥るおそれがある。それと反対に、サイド (Edward Wadie Said, 一九三五～二〇〇三年) は「黄禍」を西洋思想史に貫かれていたオリエンタリズム (Orientalism) という思考様式の枠組に置かせて批判を加えた。周知の如き、サイドはオリエンタリズムを、西洋と東洋という存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式と定義した上で、東洋なるものが、西洋に属するとされる側の文化的覇権主義により、一方的に表象された歴史的産物であると指摘した。すなわち、東洋は進歩的、合理的、民主主義的な西洋に対し、停滞的、非合理的、専制主義的といった属性を帯び、西洋の支配下に置かれるべき存在として表象されてきた。サイドによれば、この図式化されたイメージは、すでに古代ギリシアのオリエント記述からうかがわれるが、文献学のような一つの制度化・組織化された規律となるのは、ナポレオン (Napoléon Bonaparte, 一七六九～一八二一年) のエジプト遠征により現地調査が開始された一八世紀末頃から、西洋帝国主義の東洋支配を正当化するイデオロギーとして機能したという。こうした東洋と西

¹⁵ Victor Kiernan, *The Lords of Human Kind: European Attitudes to Other Cultures in the Imperial Age*, London: Serif, 1995, p179.

¹⁶ 同右。

¹⁷ 同右、二二二～二三〇頁。

洋を分かつ心象地理が、美術や文学など、あらゆる人文科学的テキストに分配され、言説として強力的に作用した。その結果、言説が現在性を獲得し、あたかもそれが事実であるかのようにみなされるにいたったのである¹⁸。サイードによると、このようなオリエンタリズムを支えた西洋人のドグマは四つに分けられたという。

「第一は、合理的ですすんだ、人道的にしてすぐれた西洋と、常軌を逸し、遅れ、劣った東洋とのあいだに絶対的・体系的な相違がある、とするドグマである。第二番目は、オリエントに関する抽象概念、とくに「古典的」オリエント文明を表象する諸文献にもとづいた抽象概念が、現代オリエントの諸現実から直接引き出される証拠などにより常により望ましいものであるとするドグマである。第三は、オリエントが永遠にして画一的であり、自己を定義することができないというもの。したがって、西洋の視点からオリエントを叙述するためには、高度に一般的・体系的な語彙が不可欠であり、学問的に「客観的」できえあるという主張がなされることになる。第四のドグマは、オリエントが本質的に怖るべきもの（黄禍、モンゴル遊牧民、褐色人種の統治）であるか、統御さるべきもの（講和、調査、開発、可能ならば完全占領によつて）であるとする考え方である¹⁹。」

ここでサイードは、西洋人がオリエンタリズムという思考様式的作用下で、オリエントは先天的に「怖るべき」と断じたうえで、「黄禍」というイメージは生まれたのであると考えた。西洋に対するサイードの植民地主義・文化覇権主義の批判はほかの学者の共鳴に受けられた。たとえば、周寧は、黄禍という東洋に対する文化的イメージが、一八世紀から一九世紀にかけてヨーロッパの中国像のシフトという史的文脈に置いて検討しなければならないと指摘

¹⁸ サイードのオリエンタリズム批判のまとめ方について、武藤秀太郎『近代日本の社会科学と東アジア』（藤原書店、二〇〇九年）、九頁によるもの。

¹⁹ エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、平凡社、一九八六年）、三〇五～三〇六頁。（Edward W. Said, *Orientalism* (1978), New York: Georges Borchardt）

する。周寧によれば、啓蒙主義以来、西洋社会は「東方―西方、野蛮―文明、有色人種―白色人種」という対立の図式はだんだん確立しつつあり、この間中国は文明・進歩的なヨーロッパと対照的な関係として理解されてきた²⁰。そのあとに、「極端な種族主義思想はさらに「野蛮的」な中国人像を「黄禍論」に発展させていた。黄禍論という思想の形成は政治・経済・軍事的な原因、そして歴史・文化・心理的な原因も含まれ、さまざまな要因とかわりながら、なかでも最も主要なのは種族主義思想である。「種族主義の文化心理に即して言えば、黄禍とは西洋種族主義者の自虐的な文化想像にすぎないものである」と周は結論づけた²¹。

周の研究は、ヨーロッパにおける中国像の史的転換を手がかりに、黄禍論が帝国主義・種族主義の土壌から生まれて、中国に対する侵略を正当化するイデオ

²⁰ 周寧『天朝遙遠：西方的中国形像研究』（北京大学、二〇〇六年）の第六編第二章「野蛮主義信条下的中国形像」、七二六―七四七頁に詳しい。また、Victor Kieman やサイドの黄禍論に関する見解は、同書、三五五―三五六、七二六頁からヒントを頂いた。そのほか、ここで指摘したいのは、一八世紀から一九世紀にかけて、ヨーロッパにおける中国像の蹉跌は等速的に進んでいたわけではないことである。ヨーロッパが勃興すればするほど、中国に対する軽蔑は加速的に形成されていた。ヨーロッパにおける中国像の蹉跌の過程は、一七世紀の末期から始まり、一八世紀下半葉において加速し、一九世紀のアヘン戦争（一八四〇―一八四二年）と第一世界大戦（一九一四―一九一八年）との間に最低点に至ったのである。それについて、Gregory Blue, *Gobineau on China: Race Theory, the "Yellow Peril," and the Critique of Modernity*. *Journal of World History* Vol. 10, No. 1 (Spring, 1999), p94 に詳しい。それ以外、中国像の転換を

史的に考察するものとしては、Raymond Dawson, *The Chinese chameleon: an analysis of European conceptions of Chinese civilization*, Oxford University Press, 1967 (雷蒙・道森『中国変色龍：対於欧洲中国文明観的分析』（常紹民、明毅訳、中華書局、二〇〇六年））、Jonathan Spence, *To change China: Western advisers in China, 1620-1960*, Penguin Books, 1980 (日本語訳ジヨナサン・スペンス『中国を変えた西洋人顧問』（三石善吉訳、一九七五年、講談社）、前掲書 Victor Kieman (中国語訳維克多・基尔南『人類的主人』（陳正国訳、商務印書館、二〇〇六年）の第五章「遠東」(Chapter 5 "the Far East")、Gregory Blue, "China and Western Social Thought in the Modern Period," in edited by Timothy Brook, *China and Historical Capitalism: Genealogies of Sinological Knowledge*, Cambridge University Press, 2002 (中国語訳格力高利・布魯「[中国]与近代西方社会思想」ト正民編集『中国与歴史資本主義：漢学知識的系譜学』（台湾国立編訳館訳、新星出版社、二〇〇五年）などが挙げられる。

²¹ 前掲書周寧、二六四、七八八頁。

オロギーとして機能していたことを明らかにした。しかしその一方では、楊瑞松は黄禍論の形成と展開は西洋人その片面的「貢献」ではなく、中国人自身の黄禍論に対する受容状況にも深くかかわると指摘する。楊は清末民初の中国における黄禍論と関係する文献を調べて、中国人は西洋人に悪意的に黄禍と言われても平気で受け入れ、さらに「黄禍」になろうという「黄禍英雄像」が誕生していたと考える²³⁰。楊の分析によると、それは当該期における中国の内・外的政治危機と関係するのである。社会進化論の流行、黄白人種戦争という図式の圧力、加えてそもそも黄色は伝統中国には高尚・名誉、そして皇帝と直接的に関係する積極的意味を含んでいることを背景に、西洋人が中国を「黄禍」と見なすのは、中国人自身の能力を強調することとして理解されてきた²³¹。清末の革命家である鄒容（一八八五―一九〇五年）の言葉「尔有黄禍之先兆、尔有種族之勢力」（『革命軍』、一九〇三年）に象徴されるように、中国人自身は黄禍をみずから名乗って、西洋人と対抗しようとする姿を示した²³²。楊は、黄禍の形成と発展は、単に西洋人のオリエンタリズムのみならず、中国人自身のセルフ・オリエンタリズム（self-Orientalism）ともかかわると主張する²³³。

²³⁰ 楊瑞松「尔有黄禍之先兆、尔有種族之勢力…「黄禍」与近代中国国族共同体想像」『国立政治大学歴史学報』（第二六号、二〇〇六年一月）、八四―九六頁。後に『病夫、黄禍与睡獅…「西方」視野的中国形像与近代中国国族論述』（政治大学出版社、二〇一〇年）に収録。引用は論文によるもの。また、先行研究Victor Kiernan、周寧とサイドについて、同論文六九―七二頁からヒントを頂いた。

²³¹ 同右、九七頁。西洋人によれば、「黄色」は劣等人種の表象とされてきたが、中国歴史の伝統における「黄色」は皇室の象徴として理解され、高尚、富有、尊貴といった積極的意味を有する。したがって、中国人は黄色人種というイメージを積極的に利用し、黄帝との関係さえ強調し、自己の民族像を作り出そうとした。その点をめぐるより詳しい研究として、沈松僑「我以血薦軒轅 黄帝神話与晚清的国族建構」『台湾社会研季刊』（第二八号、一九九七年二月）、一―七七頁、孫隆基「清季民族主義与黄帝崇拜的發明」『歴史学家的経線』（広西師範大学出版社、二〇〇四年）、一―二二頁、坂元ひろ子『中国民族主義の神話…人種・身体・ジェンダー』（岩波書店、二〇〇四年）、五九―六八頁などがあげられる。

²³² いわゆる近代中国の「種戦」の思想。前掲論文楊瑞松、七七―八四頁。

²³³ この点について、アメリカの中国研究者アリフ・ダーイク（Arif Dirlik）にも指摘されている。Arif Dirlik, *Chinese History and the Question of Orientalism*, in *History and Theory* 35 (4), 1996, pp95-117. 前掲論文楊瑞松、七二頁。

前述したように、中国学者たちが黄禍論における帝国主義と人種主義の是非・功罪に執着したことと異なり、日本人学者である飯倉章は黄禍論における帝国主義と人種主義に収斂できない部分、つまり黄色人種として唯一列強の隊伍に加入した日本の特殊性に着目してきた。「人種主義と黄禍思想との関係は、実際のところはそれほど単純ではない」と飯倉は指摘し、「人種主義に依拠する見方は、「黄禍」論者に深刻なジレンマを突きつけることにもなった。というのは、「黄禍」と目された日本人や中国人が本当に劣等人種にすぎないのであれば、文明の恩恵に浴することもなく、従って本来は脅威にもなりえない。脅威となるには、少なくともある程度はその能力を評価することが必要だからだ。しかし、そうなると人種によって能力に差異があるという前提に影響が出てくる。また、序列が下とされた黄色人種のなかから日本だけが発展して帝国主義列強となったことは、黄色人種をひとまとめにして論じていては説明できない。そう考えると日本の登場は、まさに人種のヒエラルキーを突き崩すような「事件」であった」という²⁶。よって、飯倉は「日本例外主義」を唱えていた。

飯倉によれば、「人種的に非白人である日本の勃興は、白人に支配された地域の人々の希望となったのは事実であり、そこに日本だけが、この白人対非白人の人種対立が半ばは事実として進行していた時代にあって、非白人の側の特別な使命を担っているという信念（あるいは思い込み）を可能にした。」「帝国主義が世界を覆い尽くすような拡大をした時期に、そのような日本例外主義が人種的な相違を主因として芽生えたこと、そして、「黄禍」という言説やイメージはこの日本を例外とする考えを増幅し、その意味でまさに日本例外主義の源流と言える²⁷。」つまり、西洋人が日本を黄禍とすればするほど、日本例外主義の傍証になる。飯倉は、黄禍論と日本例外主義は相互的な前提として捉えてきたのである。

黄禍論における中国と日本との関係を相対化し、人種差別主義に置かれた日本の特異性、そしてそれを「例外主義」として捉えたことについては、飯倉の

²⁶ 前掲書飯倉章（二〇一三年）、九一―一〇頁。

²⁷ 前掲書飯倉章（二〇〇四年）、四二頁。

研究から大きな示唆を受けられるが、「表舞台に現れた日本例外主義は、やがて大アジア主義へと変貌を遂げ、後には、日本人を指導民族としてアジアを白人の支配から解放するという思想にまで至り、悲惨な結果を生み破綻した⁸⁾」という飯倉の結論には、本研究は賛成しかねる。なぜかという点、黄禍論を検討する際に、日本を西洋人種主義の「例外」としての飯倉の捉え方は、黄・白人種対立という図式から見れば有効になるが、東アジア秩序の再構築に置かれると、日本人が主導的に人種差別というまなざしを同じ黄色人種である周辺国家に向けることは安易に見過ごされてしまうのだからだ。この視点が失われれば、三国干渉直後、急に盛り上がった黄禍論に対抗した日本は、まるでその後大アジア主義を借用し、侵略主義に走ってしまったように考えられる。しかし、本研究が明らかにしたいのは、三国干渉時期における黄禍論に対抗する言論には、日本自体はすでに西洋の人種差別主義思想に浸透されてきたという点である。また、高山樗牛（一八七二―一九〇二年）のような大アジア主義者だけでなく、たとえば当該期における黄禍論について活躍していた「脱亜論」の系譜に置かれた「日本人種アーリア起源説」を唱えた田口卯吉（一八五五―一九〇五年）、また日露戦争期において積極的に西洋の人種・黄禍論を反対した文学者である森鷗外（一八六二―一九二二年）も、すでに人種差別主義の思想に深く浸透されてきた。

以下、その点をめぐる先行研究を辿りながら、問題の所在と本研究の主旨を明らかにしていく。

第二節 先行研究と問題の所在

広い意味での黄禍論が長い時間に渡っているものであるが、本研究は、特に三国干渉から日露戦争までのほぼ一〇年間という時間帯に焦点をあてて、当該期の西洋社会において盛んになりつつあった黄禍論に対して、日本人がどのように対応したのかを考察する。前述したように、そもそも当該期の黄禍論は、人種差別のイデオロギーとして使われ、ドイツ帝国の皇帝ウィルヘルム二世が

三国干渉の機に乗じて、日本帝国の膨張を抑制し、東アジア、とりわけ中国への進出のために打ち出された政治的なスローガンとされていた。かかる状況で、従来三国干渉後の黄禍論をめぐる先行研究は、国民国家形成期に日本がいかに外圧を受けながら独立国家として維持されたかという問題に着目し³⁶、日本知識人の黄禍論への対応を——濃淡の差はあれ——「反人種主義」という思想史的意義として捉えてきた。

たとえば、橋川文三は、当該期に黄禍論に対して積極的に発言していた森鷗外、田口卯吉、高山樗牛などの人物を取り上げ、彼らの言説を分析し、「オリジナルな研究の立場」、「上昇期ブルジョアジーの開明的傾向」、「なんらかの意味で偏狭的な民族優越感を持つものではない」もの、「冷然人種哲学の空想性と粗雑さを批判した」ものといったポジティブな評価を与えた³⁶。

また、山室信一は田口卯吉の黄禍論の対抗策として打ち出された「日本人アリア人種起源説」について、その「推論や結論には著しい飛躍があるとしても、それまで「アジア人種」、黄色人種というカテゴリーでなんの疑問もなしに括られてきた日本人を世界の多くの民族と比較対照して位置づけ直すという作業に着手したことによって、アジアを人種と相即的にみて境域化する通念を批判の俎上にのせたことは否定できない³⁷」と評する。つまり、田口が西洋人種分類論の規範を突破したという点に、山室は肯定的な評価を与えた。そして、日露戦争の直前に、『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』の二つの講演によって西洋人に人種・黄禍論を厳しく批判した森鷗外について、山室も同様に、「ヨーロッパの人種論や黄禍論をひとまずその論理に沿って紹介し、冷徹な批判」を行い、「皮肉」と「憤懣」を交えた反論をしたと、「反人種主義」の鷗外像として理解してきた³⁸。

³⁶ ここの問題提起として、水野守「越境」と明治ナショナリズム——一八八九年条約改正問題における政教社の思想——『大阪大学日本学報』（第二二号、二〇〇三年三月）、三九頁からヒントを頂いた。

³⁷ 前掲書橋川文三、三四、四四、四六頁。

³⁸ 山室信一『思想課題としてのアジア…基軸・連鎖・投企』（岩波書店、二〇〇一年）、七一頁。

³⁹ 同右、七一〜七二頁。

しかしながら、三国干渉後の黄禍論への対応に関しては、「反人種主義」の思想と矛盾する混乱が生じていた。例えば、今まで黄禍論研究の到達点ともいえる飯倉章の研究は、鷗外の講演について、「白人にたいする対抗意識とともに、同じ黄色人種にたいする「優越意識」が見える」としたうえで、「鷗外は確かに白人の「黄禍」論にたいして怒っていたが、同時に日本人が中国人などの他の黄色人種と同等に扱われたことにたいしても、ひどく怒っていた」と、西洋人の日本人に対する差別意識を、鷗外はそのままに中国に転嫁させたという指摘がある³³。しかも飯倉は当時の読売新聞主筆である高田早苗（一八六〇～一九三八年）を取り上げ、黄禍論という圧力下で、日本が帝国主義を採用する緊迫性を説明していた。飯倉によれば、「帝国主義の文明化の論理とその欺瞞性」を自覚したが、高田は「帝国主義の善悪の問題」を別にして、「帝国主義が今日世界多数人士の賛成」を受け、日本が「現実主義的」な路線に歩むべきだと訴えたという³⁴。

また、黄禍論が高揚していく気運に乗せて、西洋人に対抗するため、黄色人種の団結を強調する大アジア主義も一時盛んになった。しかもアジア主義は当時日本の外交策の一つの選択肢として考えられていたように見える³⁵。しかし、こうした黄禍論と連動していた大アジア主義は、「アジアを指導教化し、ついには侵略をも顧みずその目的に向かって突進」してきたと、日本の「黄禍論」への反抗が侵略的な性格を帯びる「大アジア主義」に拍車をかける役割を果たしたと中村尚美は指摘する³⁶。

以上から見てきたように、当該期に黄禍論をめぐる言説は極めて多岐にわたっており、決して「人種主義」と「反人種主義」という対立的な二元論で語れるほど単純な問題ではない。実際には、日清・日露両役の勝利、加えて義和団

³³ 前掲書飯倉章（二〇〇四年）、一〇六～一〇七頁。

³⁴ 同右、二四頁。

³⁵ 当該期における黄禍論とアジア主義の関係については、前掲書廣部泉の第一章「日清戦争と日露戦争…日本脅威論の形成」、二二～二五頁、前掲書山室信一（二〇〇一年）、六四～六六頁、前掲書飯倉章（二〇〇四年）、一〇一～一〇四頁に詳しい。

³⁶ 中村尚美「日本帝国主義と黄禍論」『社会科学討究』（第四一巻第三号、一九九六年三月）、二八九頁。

鎮庄による八ヶ国同盟への加入および日英同盟の成立、さらに北海道の開拓、琉球・台湾植民地の領有などのインパクト的な一連的事件を通して、日本は「国民国家」から「帝国主義」へと転向するという運動的な軌道が見られる³⁸⁾。かかる視座によると、「人種主義」という概念は明治日本に対内・対外の二重の役割を果たしていた³⁹⁾。

³⁸⁾ 国民国家の成立については、西川長夫の諸研究は参考となる。特に『国境の越え方…比較文化論序説』(平凡社、二〇〇一年)、『国民国家論の射程…あるいは「国民」という怪物について』(増補版、柏書房、二〇一二年)に詳しい。国民国家と帝国意識との関係については、桂島宣弘「一国思想史学の成立——帝国日本の形成と日本思想史の「発見」——」渡辺公三、西川長夫編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』(柏書房、一九九九年)、一〇三―一二六頁、川村湊「近代日本における帝国意識」北川勝彦、平田雅博編『帝国意識の解剖学』(世界思想社、一九九九年)、一六七―一九四頁などが参考となる。また、当該期における国粹派の言動を考えれば、その国民国家から帝国への転換の姿はより明白である。近年にはそれと関する研究も多く重ねてきた。それについて、山辺春彦「陸羯南の交際論と政治像(上・下)」『東京立大学法学会雑誌』(第四三巻第二号、二〇〇三年一月)、三七五―四二二頁、(第四四巻第一号、二〇〇三年七月)、二九七―三五五頁、平塚健太郎「陸羯南と南アフリカ戦争——「帝国主義」からの転換の契機として——」『現代史研究』(第四八号)、二〇〇二年)、一九頁などが挙げられる。国粹派の以外、民友社の言論も同調を示した宇野田尚哉「成立期帝日本国の政治思想——民友社系知識人の場合を中心に——」『比較文明』(第一九号、二〇〇三年)、一五―三三頁などが挙げられる。

³⁹⁾ 国民国家日本から帝国日本への転向、そしてそのなかで「人種主義」から見えた思想史的意義については、世紀転換期における国粹派に関する水野守の諸研究からヒントを頂いた。水野は、従来「当該期のナショナリズムを「健全」から「特殊」への転位として論じてきた「ナショナリズム」論」について、「国民国家の「健全性」を描きかねない」とする一方、「帝国の記憶を忘却させ」、「且つ残存する帝国の暴力を見過」する恐れもあると指摘する。かかる視点をもって、水野は志賀重昂の南洋巡行を追いながら、早期明治日本の帝国意識を掘り出す作業を行った。水野守「志賀重昂「南洋」巡航と『南洋時事』のあいだ——世紀転換期日本の「帝国意識」——」『大阪大学日本学報』(第二〇号、二〇〇一年三月)、八九―一二頁。本稿も当該期における黄禍論言論空間での人種意識に着目し、先行研究における「反人種主義」を強調しすぎること、明治日本の帝国意識を希薄化するおそれがあると指摘したい。

また、水野守は志賀重昂だけではなく、三宅雪嶺(一八六〇―一九四五年)、長沢別天(一八六八―一八九九年)などの国粹主義的知識人を取り上げ、「国粹主義」の形成が当初から当該期の東アジア秩序と人種間対立への関心に起因し、「この人種間対立が白人種対黄色人種という図式だけでなく、黄色人種間の対立」もあったことを論じた。水野守「政教社「国粹主義」

一方では、国民国家の成立の要求に応じて、日本国内では人類学者の人種測定作業が始まるとともに、様々な日本人種起源の仮説が賑やかになりつつあった。この時期にこそ、いわゆる「日本人種論」⁸⁶が成立していた。富山一郎が指摘する通り、当該期の「日本人種論」（帝国大学の人類学に表象されるもの）は教育、医療・衛生、治安にかかわる諸「知」とともに、「日本人」という国民を作り上げるテクノロジーとしての人種論は、西洋人への人種的劣等意識が自国のアイヌをはじめとする少数民族への優越意識を増幅させていた一方、その自国少数民族の「未開」性を「日本人種」全体の中に指示していくおそれも存在する。この矛盾を解決するため、「日本人種」自体の中に測定された「未開」性は、「未開」性の改善という実践へと移行していた⁸⁷。高橋義雄（一八六一〜一九三七年）が執筆し、福沢諭吉（一八三五〜一九〇一年）の序文が添えられた『日本人種改良論』（一八八四年）は、かかる知的コンテクストに生まれていたのである⁸⁸。

他方では、国際舞台上で、優勝劣敗・弱肉強食の社会進化論を背景に、国力の展開——「人種主義」との関わりについて——『移民研究年報』（第二二号、二〇〇六年三月）、二三二〜二四〇頁。それより詳しい論考、前掲論文水野守（二〇〇三年）、同「長沢別天の人種競争論——一八九一〜九三年の在米経験を手がかりに——」『歴史評論』（第七一七号、二〇一〇年一月）、七九〜九四頁が挙げられる。

⁸⁶ 「日本人種論」を総括する作業は、今まで幾度も行われてきた。例えば、歴史学・人類学・考古学を総合的に検討した工藤雅樹『日本人種論』（吉川弘文館、一九七九年）、小熊英二『単一民族神話の起源……日本人』の自画像の系譜』（新曜社、一九九五年）、そして人類学の形成過程を重点に置かれた寺田和夫『日本の人類学』（思索社、一九七五年）、吉岡郁夫『日本人種論争の幕あけ……モースと大森貝塚』（共立出版、一九八七年）、坂野徹『帝国日本と人類学者……一八八四〜一九五二年』（勁草書房、二〇〇五年）などが挙げられる。また、本稿に参考となる、「人種」概念の受容過程を明らかにした與那覇潤「近代日本における「人種」概念の変容——坪井正五郎の「人類学」との関わりを中心に——」『民族学研究』（第六八巻第一号、二〇〇三年）、八五〜九七頁もここで指摘しておきたい。

⁸⁷ 富山一郎「国民の誕生と「日本人種」『思想』（第八四五号、一九九四年四月）、五〇〜五一頁。

⁸⁸ 高橋義雄『日本人種改良論』（出版者……石川半次郎、一八八四年）。

の強弱が人種の優劣として解釈されていた⁴⁵⁾。それとともに、帝国主義が世界を支配する正当性のイデオロギーとして機能していた「白人優越論」は、野蛮人は無知蒙昧でという天賦の資源を開発する能力がないので文明人が代わってこれを開発するとか、劣等人種は優等人種の支配を受ける運命にあり、たとえ暴力を用いても劣等人種を文明に導かなければならないと唱えている⁴⁶⁾。中国の遼東半島をめぐる日本とドイツの競争のなかで、ドイツ人が「黄禍論」を打ち出したのは、こうした「白人優越論」のまなざしがあったのである⁴⁷⁾。実際には、「白人種優越論」と「黄禍論」は、西洋人の自他認識として、人種差別主義の表裏一体のものともいえる。だから、明治末期における黄禍論の研究に入る前に、日本の人種差別主義の受容の経緯を整理しておかないと、黄禍論への対抗の実態を解明することができない。

前述したように、黄禍論をめぐる言説に提示される「反人種主義」の性格に對して、ある程度の懐疑的態度が現れていたが、具体的な分析は乏しい。また、

⁴⁵⁾ 雨田英一は福沢諭吉の人種改良論を論じる時に、次のように説明していた。「当時、欧米列強との緊張関係と対立がますます深まり、日本国家の劣勢が憂慮されるなかで、その劣勢のそもその原因は日本人が人種として劣等であるということにある。」雨田英一「福沢諭吉の「丸裸の競争」と「人種改良」の思想」『東洋文化研究』(第二号、二〇〇〇年三月)、三九七頁。しかし、『日本人種改良論』にも、福沢は同じ持論を以って遺伝の決定的側面を重視した一方、獲得形質の遺伝、文化資本の伝承の力をきわめて重視し、人為的努力の方向を見出そうとしていた。前掲論文雨田英一、四二一頁、また、鈴木善次『日本の優生学…その思想と運動の軌跡』(三共出版、一九八三年)、二七―三一頁を参考。

⁴⁶⁾ 前掲書飯倉章(二〇〇四年)、二四頁。

⁴⁷⁾ ドイツ皇帝と黄禍論との関係は多くの研究を重ねてきた。前掲書飯倉章(二〇〇四年)の第二章「ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世と「黄禍」の起源」、四五―七六頁、同(二〇一三年)の第二章「黄禍の誕生…三国干渉とドイツ皇帝」、四一―六〇頁、前掲書ゴルヴィッツァーの第五章「黄禍論をめぐるドイツでの議論」、一七二―二三六頁以外、金森誠也「カイザー・ヴィルヘルム二世の反日黄禍論」『国際文化表現研究』(第八号、二〇一二年)、一一三―一二四頁、平川祐弘「ロシアにこだました「黄禍論」——独帝ウイリーから露帝ニツキーへあてた書簡について——」『西欧の衝撃と日本 人類文化史・六』(講談社、一九七四年)、二二七―二六六頁、ジップル・リチャード「ヴィルヘルム二世の対東アジア外交におけるヨーロッパ観についての一考察」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』(第七号、二〇〇一年)、四七―六六頁もよい参考となる。

そのような言説は先行研究においてほぼ例外として扱われて、「反人種主義」のあるべき姿が前提とされるように思われる。実際に、こうした矛盾は日本の人種論の受容の状況に根ざしている。すでに指摘された通り、人種概念の使用が日本人の対外的認識だけでなく、日本人の自己認識とも深く関わっている。白色人種イコール文明、黄色人種イコール非文明といった、生物学的な人種区分と文明開化の度合とが相関する人種優劣説の浸透によって、白色人種への劣等感と他の黄色人種に対する優越感が表れたとする。また、アジア情勢についても、白色人種との対抗以上に朝鮮をめぐる日清間の対立が切実な課題となり、清国人に対する同人種ゆえの脅威と恐怖の念が蔑視と差別感情に転化した⁵⁶⁾。そもそも黄禍論に対抗する大アジア主義が、日本の侵略主義に加担するイデオロギーに墜ってしまったのは、このような状況のなかで確認しなければならぬ。

本研究では、上記の論点を踏まえつつ、「反人種主義」より、明治期における「黄禍論」批判に隠された「人種主義」に共謀する思想を掘り出そうとする。また、従来先行研究において三国干渉や義和団事件や日英同盟などの刺激的な外交事件に焦点をあて、黄禍論に対する抗争の物語として論じられてきたことと異なり、本稿は当該期に「黄禍論」に関する活躍していた森鷗外、田口卯吉、高山樗牛三人を考察対象とし、それぞれをケース・スタディーという形で展開させ、彼らの人種論言説に隠された人種主義を究明する。視点としては、三国干渉後、一時的な感情的な把握を乗り越え、彼らの黄禍論に対する認識を各自の生涯的なスパンに渡る人種論のコンテキストのなかに置いて検討する。かかる作業を通して、三国干渉後、新興帝国日本の膨張に抑制を目指す黄禍論に提示される研究対象の自他認識について、共鳴であれ対立であれ、「人種主義」の根底を共有していることを明らかにする。また、従来明治末期における黄禍論をめぐる諸言説について、ヨーロッパと東アジアとの対立を重点に置かれた議論と異なり、本稿は日本人が黄禍論を借用して、東アジア秩序の再構築を行うにしようとする点を強調する。その上で、黄禍論の言説空間に、白人種対黄

⁵⁶⁾ 前掲書山室信一（二〇〇一年）、八〇―一二、五四―六五、一三六―一四二頁。山室信一の

意見のまとめ方は、前掲論文水野守（二〇一〇年）、八〇頁によるもの。

色人種という図式だけではなく、黄色人種間の対立としても示されたという点も論じる⁴⁰⁾。

本稿はケース・スタディーという形で議論を展開させるといえども、研究対象の三人、つまり森鷗外、田口卯吉、高山樗牛は無関係な存在とは言えない。例えば、鷗外の二つの講演『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』には、田口卯吉と高山樗牛に対する直接的な批判が含まれた。また、黄禍論への対応について、「日本人アーリア人種起源説」を唱える田口卯吉と「大アジア主義」（日本人黄色人種の盟主論）を掲げる高山樗牛も対極的に位置づけられていた。かかる意味では、上記三者の言論は、当該期における黄禍論をめぐる言論空間の一環として構成してきたともいえる。こうした黄禍論をめぐる三人の言論を考察し、「黄禍論」における近代日本人種論思想史上の一側面を描き出すのが、本稿の目的である。

第三節 本研究の構成と概要⁴¹⁾

本研究は明治末期、具体的に言えば三国干渉から日露戦争にかけての時期に黄禍論をめぐる日本知識人である森鷗外、田口卯吉、高山樗牛の言説を検討し、日本における黄禍論と人種差別主義との関係を政治・思想的意義に即して考察するものである。従来、先行研究では黄禍論の研究を三国干渉・義和団事件・日露戦争などの外交事件の順に追って、各時期における黄禍論に関する言説を蒐集し分析し、いわば「横」の視点で議論を展開させ、「反人種主義」の思想的意義を強調した。一方で、本研究は個々の知識人たち自身の生涯を追いながら、黄禍論をめぐる言説を知識人たち自身の人種認識という知的文脈に置き

⁴⁰⁾ 前掲論文水野守（二〇〇六年）、一三一頁。「人種主義」を東アジア内部の秩序に置かれて考察し、日本人の人種的優越意識の形成過程を明らかにするのは、本研究と水野守の国粹主義に関する諸研究（二〇〇一年）、（二〇〇三年）、（二〇〇六年）、（二〇一〇年）は共有することである。ただし、「越境」、「移民」、「探検」などの、明治知識人の内在的に捉えられた歴史経験を研究対象としたことと異なり、本研究は、黄禍論という外圧の下、明治知識人の反応を研究対象とした。

⁴¹⁾ 本節の論点や参考文献について、各章を参考。

て考察し、いわば「縦」の視点を以て、日本知識人たちにおける人種差別主義の受容状況に着目し、黄禍論という圧力下、日本における「反人種主義」を再評価する。

上記の問題意識を念頭に置いて、本研究は序章「明治末期における黄禍論空間への一考察——「反人種主義」の逆説——」と終章ならび本論三章、つまり第一章「森鷗外と人種・黄禍論——戦争・文明・衛生学という視点から——」、第二章「田口卯吉における人種論の展開——内地雑居論から黄禍論まで——」そして第三章「高山樗牛と人種・黄禍論——大アジア主義への接近——」を展開させる形を取る。

序章においては、まずは黄禍論その概念の研究史に対する整理をする。つぎに、本研究の考察対象を設定した上で、それと関する先行研究を概観しながら、それらの問題点を指摘する一方、本研究の立場と方法論を示す。具体的にいえば、黄禍論への対抗を日本における西洋の人種主義受容史という文脈に位置付けけることを試みる。

第一章においては、日露戦争直前に『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』の二つの講演を行い、西洋人の人種差別主義と黄禍論に対する厳しい批判的態度をとった文学者・軍医である森鷗外を取り上げ、先行研究における鷗外の人種論に反映された重層的な関心点を見落とされてきたことを明らかにした上で、鷗外の人種認識を全面的に検討する。まず、日清・日露戦争期間、日本の対外戦争成功と期を一にする黄禍論の同時代文脈をたどり、黄禍論に対する当時のリアクションを「黄色人種同盟」、「文明開化」、「日本人種アーリア人種属」という「三つの対応ルート」を焦点化したことで、鷗外の人種論の座標を定位している。つぎには、義和団時期にあたった講演「北清事変の一面の観察」における鷗外の白人種に対する視線を追いながら、日本の近代化の過程で範とした西洋人種に比肩するようになった黄色人種としての日本人のまなざしと、ヨーロッパ中心主義の象徴とも言える黄禍という時代の見方に対して、鷗外の講演『黄禍論梗概』に提示される一側面と合わせて考察し、鷗外の人種差別主義に対する憤懣を明らかにする。また、鷗外のもう一つ講演である『人種哲学梗概』における人種論批判と「人種主義の父」と呼ばれているゴビノーの『人種不平

等論』のあわいを考察し、鷗外が西洋帝国主義は人種差別を以て東アジアを侵略することを批判したことを踏まえて、鷗外自身における新興帝国である日本に対する矜持を吟味する。最後に、鷗外の人種論を定位した上で、彼の『衛生新篇』における論文「人種」を取り上げ、前編『人種哲学梗概』の論旨と比較しながら、「衛生学」の視点から彼の人種論を照射する。鷗外は生理学の論拠によりつつ、白色人種と黄色人種とともに「優勝分族」として論じた一方、黒色人種を劣等人種と断定していた。鷗外衛生学の文脈に辿ることで、鷗外の人種優劣観を提示する。

第二章で取り上げたのは、明治期に生涯を送った自由主義論者として、文明史論者として名高かった田口卯吉である。先行研究は日露戦争期における田口の「日本人種アーリア人種起源説」だけに注目し、彼の人種起源論をその学問（言語学・歴史学・経済学）の興味として扱ったが、本稿は田口の全生涯を通して、彼の人種論の展開過程に着目する。視点としては、田口の人種論が置かれた時代の風潮を意識しながら、その学問的基盤をも検討する。まず、若き田口の歴史学として名著である『日本開化小史』の人種意識の希薄の状況を、同時期の「自由主義経済論」を田口思想根底になされている政治論「内地雑居論」に提示されている人種間の平等意識に起因することを明らかにする。その後、焦点を一八九〇年の田口の南洋行の経験にあてて、南洋に向かった田口の航跡を追いながら、彼の殖民論と南洋論との関わりを検討することで、南洋土人に対する差別意識と彼自身の人種意識を明らかにする。この時期にこそ、彼の人種意識が「平等的」関係から「競争的」関係へと転換したことを示す。最後に、日清戦争前後の田口の対清認識を検討することで、田口の大陸領土に対する野心を究明する。また、時代背景としては、同時期に帝国大学の国史科の成立をきっかけに、重野安繹（一八二七～一九一〇年）、久米邦武（一八三九～一九三一年）と星野恒（一八三九～一九一七年）などの歴史家を中心とする近代日本の実証史学学派が発足した。その上で、「実証史学」の論拠により、朝鮮半島進出を背景に「日鮮同祖論」は盛んになりつつあった。この時期こそ、田口が文明史論から実証史学へと傾斜し、『史海』雑誌を創刊し、文明史論をあきらめ、人物中心史論を唱えはじめた時期である。それから、田口の日本人

種起源論は三つの段階、各時期の政治的状況にそくして言えば、朝鮮半島の拡張を目指す「日鮮同祖論」、中国東北地方領土割譲を提案する「日本人種匈奴起源説」、そして黄禍論という外交圧力下に生じた「日本人種アーリア人種起源説」に分けられる。それらを通して、田口の人種論の射程と、大日本帝国膨張の軌道そして世紀転換期における新しい自己認識との内在的関係性を明らかにする。

第三章は「高山樗牛と人種・黄禍論——大アジア主義への接近——」である。本章は日清・日露戦争間に活躍した評論家・思想家である高山樗牛を取り上げ、彼の生涯にわたる人種認識を、それをめぐる同時代の論争と対照しながら論じるものである。従来の国家主義研究やナショナリズム研究では、樗牛の人種論を日本対外認識の一環として強調されてきたが、実に樗牛の人種論はまず「国体」をめぐるキリスト教徒との論争のなかに展開した。日本主義を掲げる樗牛は国体観念に生じた権力意識を以て台湾という新領土を支配しようとしたが、明治政府はそれ以上の新領土の獲得を予想しており、樗牛と反対に教育と司法における同化政策を採用した。そして「北守南進」論は明治政府の指導部に優位に傾くと同時に、そもそも血統の純潔性を強調する樗牛も、政府との歩調を合わせて、「故郷への帰還」という形で日本人種南洋起源説を唱えはじめた一方、世界文明史の研究に着手しており、人種闘争を軸として世界史と国際情勢と照らしながら、「同人種同盟論」によるアジア主義へと急速に接近した。

第一章

森鷗外と人種・黄禍論

——戦争、文明、衛生学の視点から——

序論

一九〇三年、日露戦争の直前、第二軍軍医部長として、中国戦場に赴く森鷗外は二度、人種問題に関わる講演を行った。『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』である。それによつて、当時盛んになりつつある人種・黄禍論に対して、鷗外自身の関心が示されたとともに、人種論がすでに「時代趨勢の喫緊の問題⁴⁸⁾」になったことも窺えるだろう。人種・黄禍問題に対する鷗外自身の関心は、ドイツ留学時代の被差別体験⁴⁹⁾、医師という職業に由来するもの⁵⁰⁾、そして当時話題になっていた田口卯吉の「日本人アーリア人種起源説」と姉崎正治（一八七四～一九四九年）の「洋行無用論⁵¹⁾」に対する批判から生じている。「時代趨勢の喫緊の問題」というのは、日本兵士が北清事変において初めて白人の同盟軍としての経験をし、日露戦争において黄白人種間の大戦争を経験したという歴史的な転換のことである⁵²⁾。この間に、人種差別に基づいた黄禍論は、戦

⁴⁸⁾ 森鷗外「人種哲学梗概広告文」『鷗外全集』第三八卷（岩波書店、一九七四年）、六二五頁。以下は『鷗外全集』と略する。

⁴⁹⁾ 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（東京大学出版会、一九六九年）の第二部第二章「ナウマン博士との論争」、一八五～二九三頁に詳しい。

⁵⁰⁾ 鷗外と医学との関係について、丸山博『森鷗外と衛生学』（勁草書房、一九八四年）、伊達一男『医師としての森鷗外』（續文堂出版、一九八一年）、同『続医師としての森鷗外』（續文堂出版、一九八九年）を参考。

⁵¹⁾ 姉崎正治に対する鷗外の批判について、平川祐弘『和魂洋才の系譜…内と外からの明治日本』（河出書房新社、一九七一年）、八七～一〇七頁、林正子「日清・日露両戦役間の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面——総合雑誌『太陽』掲載の樗牛・嘲風・鷗外の言説を中心に——」『日本研究』（第一五号、一九九六年十二月）、一七四～一七七頁、同「総合雑誌『太陽』掲載の高山樗牛と姉崎嘲風の文明評論——二十世紀初年の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面とその意義——」『岐阜大学国語国文学』（第二五号、一九九八年三月）、二四～二六頁に詳しい。

⁵²⁾ 日露戦争と人種問題に関する論述について、山室信一『日露戦争の世紀——連鎖視点から見る日本と世界——』（岩波新書、二〇〇五年）、一三七～一五四頁、前掲書飯倉章（二〇一三

争のイデオロギーとして、日露戦争期の日本政府の資金調達、戦後の条約改正などの諸問題にも関係している⁵³。

黄禍論に関する先行研究は多くあるが、明治期に有数の西洋知の持ち主であった森鷗外と人種・黄禍論との関係は十分に検討されてこなかったように思われる。管見の限り、それを最も早く注目したのは平川祐弘である。氏は、鷗外を「知的誠実をもつて『黄禍論』に対処した明治日本の代表的知識人」と位置づけようと述べている。その上で、氏は、鷗外の黄禍論批判が「歴史的相対性へ着目」しており、「現実主義的改良主義」であると評する。氏は、鷗外の黄禍論批判を主に東西間の文化的問題とした⁵⁴。

つぎに、鷗外と黄禍との関係を論じたのは、戦後の歴史家橋川文三である。氏は、鷗外を「『黄禍論』の歴史を見る場合には欠かせない人物として、鷗外が『冷然人種哲学の空想性と粗雑さ』を『人種哲学梗概』のなかで指摘している一方、他方では『黄禍論梗概』のなかでは、黄禍論に対して『感情論を以て応酬』しているだけであると評している⁵⁵。それとは反対に、野村幸一郎は、鷗外の黄禍論批判を「リアル・ポリテクスの視点」を以て、「徹底して形而下の問題」としている。氏によれば、「形而下領域のみに徹底して立脚するよ

年)の第六章「黄色人種と白種の戦い…日露戦争」、一一五―一四四頁、前掲書廣部泉、三二―四一頁、前掲書ゴルヴィツァー、一一九―一二二頁を参考。

⁵³ 日露戦争期における資金調達をめぐる研究としては、板谷敏彦『日露戦争、資金調達の戦い…高橋是清と欧米バンカーたち』(新潮社、二〇一二年)、井上琢智「添田寿一と日清・日露戦争」『Economic Journal』宛公開書簡等に見る外債募集と黄禍論』『甲南会計研究』(第九号、二〇一五年三月)、一―一七頁、そして当該期日本銀行の総長である高橋是清(一八五四―一九三六年)の伝記、大島清『高橋是清…政治家の教奇な生涯』(中公新書、一九九九年)、五三―五七頁、山室信一(二〇〇五年)、一四五―一四八頁を参考。

⁵⁴ 前掲書平川祐弘(一九七一年)、一三七、一五四頁。平川祐弘は、森鷗外の人種・黄禍論を論じる前に、まず「伝統的社会は西洋文明と接触することによって急激に変化するのだが、その出会いから生ずるさまざまな問題は、西洋と非西洋が文明圏を異にするところから、比較文化的(intercultural)な諸問題であるといえるだろう。これは西洋文明の担い手と他の文明の担い手が人種を異にするところから、西洋と非西洋の出会いの際には人種間関係(interracial relation)が生じた」という前提を設定した。同書、一三七頁。

⁵⁵ 前掲書橋川文三、二八、三四、三七頁。

うな鷗外の視点からすれば、人種という表象は、軍事力・経済力の総体である」という³⁶。橋川氏と野村氏は、鷗外の人種・黄禍論講演に対する評価が異なっているものの、それが列強との経済的・政治的な問題であるとした点では一致している。

また、廖育卿はドイツに対する「葛藤による心理要素」および田口卯吉との「人間関係」のため、鷗外の人種・黄禍論講演に「個人的な見解はほとんど見受けられない」と述べていた³⁷。廖氏の意見は、鷗外の人種・黄禍論講演を「梗概」系列の作品とし、外国書の翻訳と紹介だけにとどまり、鷗外自身の批判を控えたものであると考えた。

最後は、鷗外の伝記の中に散見され、鷗外の人種・黄禍論講演を彼の生涯の一エピソードとし、日露戦争の直前の戦意高揚の雰囲気なかで、軍人である鷗外のナショナリズムという側面を強調したものもある³⁸。

以上の論者たちは、いずれも鷗外の人種・黄禍論講演を一側面だけを強調し、鷗外の人種論に反映された重層的な関心を見落としていることが指摘できる。しかし、人種という概念は、従来科学、政治、文化、精神などの多義性を含むものである³⁹。したがって、鷗外の人種・黄禍論の一側面だけを強調し、断片

³⁶ 野村幸一郎「アジアへのまなざし——鷗外・天心の黄禍論批判——」『文学』（第八卷第二号、二〇〇七年三月）、一〇四、一〇九、一一一頁。

³⁷ 廖育卿「明治期の〈黄禍論〉言説に見た森鷗外——講演「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」を中心に——」『熊本大学社会文化研究』（第七号、二〇〇九年三月）、一三四、二四六頁。

³⁸ 例えば小堀桂一郎『森鷗外…日本はまだ普請中だ』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）、二八六～二八九頁、山崎國紀『評伝森鷗外』（大修館書店、二〇〇七年）、二四〇～二四二頁、延芳晴『鷗外と日清・日露戦争』（平凡社、二〇〇八年）、一五一～一五三頁、小林一夫『森鷗外論…現象と精神』（星雲社、二〇〇九年）、二〇～二二頁などが挙げられる。

³⁹ 「人種」の定義をめぐって、一般的な理解に即して言えば、アルベール・メンシ『人種差別』（菊地昌実、白井成雄訳、法政大学出版局、一九九六年）、寺田和夫『人種とは何か』（岩波書店、一九六七年）などに詳しい。日本語「人種」概念の特殊性を指摘する論者は、家坂和子『日本人の人種観』（弘文堂、一九八〇年）、前掲書山室信一（二〇〇一年）の第一部第三章「思想基軸としての人種」、五四～七七頁、前掲論文與那覇潤などを参考。

的にとらえることは、鷗外自身の人種・黄禍論の視野を縮めるおそれがある¹⁸⁾。

本稿では、先行研究を踏まえながら、鷗外の各時期に人種に関する言説を検討し、鷗外の問題意識と関心の所在をそれぞれ明らかにする。第一節では、三国干渉後盛んになっていた人種・黄禍論と、それをめぐる日本での三つの対応ルートを概観する。第二節では、鷗外の人種・黄禍論に関する文献を検討する。まずは、『黄禍論梗概』を、三国干渉、義和団事件、日露戦争といった歴史的文脈に置かせて、鷗外の黄禍論への関心と「戦争」との関わりを考察したい。つぎに、『人種哲学梗概』における人種と文明との関係を整理し、「アリア人種優越論」と鷗外の日本の文明開化に対する評価を合わせて考えてみたい。最後に、先行研究で見落とされた『衛生新篇』の「種族」という論文を取り上げ、衛生学者としての鷗外は、「種族衛生学」の中心問題、つまり人種の退化にどのように対処するのかを明らかにする。

第一節 三国干渉後の人種・黄禍論と日本の対応

明治維新以来、「文明開化」というスローガンを掲げ、西洋諸国を模範とする近代日本は、日清戦争に勝利を収め、列強と同じ文明国として認められることを求めた¹⁹⁾。しかし、西洋列強は、日本の勝利ゆえに、日本を文明国として認めるのではなく、もともと中国に対して使われていた黄禍という悪名を今度日本に被せようとした²⁰⁾。膨張する日本に対する警戒から、ドイツ、ロシア、フランスは、下関条約に基づき日本に割譲された遼東半島を清国に返還することを要求した。いわゆる三国干渉であった。

黄禍という言葉は、一八九五年の秋にドイツ皇帝ウイルヘルム二世が宮廷画

¹⁸⁾ 磯貝英夫によれば、啓蒙期に活躍していた百科全書式思想家としての鷗外は、思想構造上に医学、文学、公生涯（より原理的に言えば「科学、芸術、政治」）という「三極」の構造に分けられる。磯貝英夫『森鷗外・明治二十年代を中心に』（明治書院、一九七九年）、三―四頁。鷗外の人種に関する論説は、各分野の論説に分けるが、鷗外思想上の構造の多数の要因は働いていることは明らかである。

¹⁹⁾ 前掲論文中村尚美、二六一頁。

²⁰⁾ 前掲書山室信一（二〇〇一年）、六六頁、前掲書山室信一（二〇〇五年）、五五頁。

家ヘルマン・クナツクフスに『黄禍の図』を描かせてロシア皇帝ニコライ二世に送ってからヨーロッパに広まった。日本では、遅くとも年末ごろに議論は出て、翌年三月に文部省大臣西園寺公望（一八四九―一九四〇年）の上奏で、明治天皇にも伝わった⁶³。

戦後の流行語「臥薪嘗胆⁶⁴」に象徴されるように、日本帝国は、復讐するために耐えることを選択した⁶⁵。そのため、当時最も大きな問題であった、いかに西洋側による日本膨張に対する黄禍という悪名を解消するかをめぐって、主に三つの対応ルート、即ち「黄色人種同盟」、「文明開化」、そして「日本人種アーリア人種属」があった⁶⁶。

⁶³ 『黄禍の図』の流布について、前掲書飯倉章（二〇〇四年）の第四章第二節「カイザーの寓意画の日本への紹介」、九五―九八頁、同（二〇一三年）の第三章「黄禍の図」のパロディと国際関係」、六二―七四頁、前掲書ゴルヴィツァー、二二〇―二二二頁を参考。

⁶⁴ 一八九五年五月一五・二七日に雑誌『日本』に掲載された三宅雪嶺の時論「臥薪嘗胆」という文章をきっかけにして、流行るようになった。大谷正『日清戦争…近代日本初の対外戦争の実像』（中央公論、二〇一四年）、二二二頁を参考。

⁶⁵ 当時日本の枢密院議長である伊藤博文の明治初期に御雇外国人として来日したドイツの医学教授ベルツ (Erwin von Bälz, 一八四九―一九一三年) に対する話は意味深い。「以前は、われわれもドイツに大変好感をいだいていて、種々の点でドイツを手本とし、先生としたものです。ところが、われわれは日清戦争の大勝利の後で、われわれの感違いをしてこの友邦がロシア・フランスと力を併せて、われわれの手から苦心惨たんして得た勝利の贈物を奪い去る——という目に遇わねばなりませんでした。(中略)けれども、われわれの態度に何の罪科もないドイツのこの敵対行為は、われわれにとつて実にひどい、全く挑戦的な屈辱であり、われわれ独自の事件への不当極まる干渉であるとしてしか観えなかつたのです。日本はこの出来事を、ロシアがベルリン会議でのドイツの態度を忘れてしまった程、そう早く、そうすつぱりと忘れ去ることはできません。おまけに、間もなく偶然のことから、ドイツ政府があゝの行動に出たのは、単に政治上の原因によつて操られたばかりではなく、われわれ日本人に対する個人的、しかも堂々と誇示された反感もまた重要な役割を演じていたことが判つたのです。」トク・ベルツ「日本における反獨感情とその誘因」『ベルツ日記・下』（菅沼竜太郎訳、岩波書店、一九七四年）、一八六―一八七頁。また、前掲論文中村尚美、二六五頁。

⁶⁶ 野村幸一郎によれば、黄禍論への対応は、「支那保全論」を指すアジア主義と、アジア諸国との連帯を極めて警戒する明治政府という二つのルートがあったという。前掲論文野村幸一郎、一〇三―一〇四頁。しかし、それ以外、やや異色のだったが、田口卯吉の「日本人アーリア人種起源説」も一つの対応であると考えられる。また、それについて、前掲書山室信一（二

まずは「黄色人種同盟」である。つまり「黄禍」を「白禍」に逆転し、「黄人種団結」を強調し、白人と対抗するというものである。⁹⁰ 例えば当時東邦協会の副会頭である近衛篤磨（一八六三―一九〇四年）は西洋列強による「支那分割」を危惧し、「支那保全論」を打ち出した。一八九八年一月に雑誌『太陽』に掲載された「同人種同盟・附支那問題の研究の必要」では、「東洋の前途は終わりに人種競争の舞台となるを免かれじ、最後の運命は黄白同人種の競争にして、此競争の下には支那人も日本人も、共に白人種の仇敵として認められる地位に立たむ」と予感し、「総べての黄色人種国は大に同人種保護の策を講ぜざる可からず」と呼びかけている。⁹⁸

しかし、政府は、「黄色人種同盟」という論調が、逆に黄禍論を助長するとして、拒否の態度を明白に表した。⁹⁹ 一九〇三年二月三〇日の内閣閣議では、「恐黄熱ノ再発ヲ防ク」と決まり、「日清兩國相合シテ露国ト戦フニ於テハ或ハ之レカ動機トナリテ再ヒ恐黄熱ヲ熾ンナラシメ其結果遂ニ独仏等ノ諸国ヲシテ干渉ヲ敢テセシムルノ恐レ¹⁰⁰」とした。ここで「日清兩國相合」は政府の懸念となった。

政府は国内と海外の二つの方面から、黄禍論を抑制する努力を行った。国内では、新聞自由と宗教自由を強調し、在日外国人、特にロシア人の安全を確保し、文明国家のイメージを宣伝した¹⁰¹。海外では、末松謙澄、金子堅太郎らを欧米に送って、外国新聞紙を操縦し、日本に対して同情と友好を求めて、有利

〇〇一年）、六六―七一頁を参考。

⁹⁰ 前掲論文野村幸一郎、一〇三頁、前掲書山室信一（二〇〇一年）、六四―六六頁、前掲書廣部泉、二二―二五頁。

⁹⁸ 近衛篤磨「同人種同盟・附支那問題の研究の必要」『太陽』（第四卷第一号）、一八九八年一月、一―三頁。

⁹⁹ 前掲論文中村尚美、二六六―二六九頁、前掲論文野村幸一郎、一〇三―一〇四頁、前掲書山室信一（二〇〇一年）、六七―七〇頁。

¹⁰⁰ 「対露交渉決裂の際日本の採るべき対清韓方針」外務省編『日本外交年表並主要文書・上』（原書房、一九六五年）、二一九頁。前掲論文中村尚美、二六八―二六九頁。

¹⁰¹ 前掲書山室信一（二〇〇五年）、一五五―一五九頁、前掲書飯倉章（二〇一三年）、一三〇―一三二頁に詳しい。

な報道を誘導させた⁷²。政府は、黄禍論が高まることで、日露戦争の資金調達に悪影響を及ぼすことを懸念したのである⁷³。日本の戦費は、戦前では一般会計最大二億九〇〇〇万円規模であったが、戦費の実際支出は一九億八六一二万円に達した、外債借用は戦争に対して決定的な影響を与えた⁷⁴。したがって、政府はいかに黄禍論が高まっても、人種競争論を控えなければならぬという一貫した態度をとった⁷⁵。

こうした状況で、日露戦争中に第二軍軍医部長としての鷗外の黄禍論批判は、「主観的にはどうであれ」、「明治政府の内部に身を置く以上、それはアジアを他者として突き放し、列強の側に身を寄せるような脱亜論の路線に従う」しかないという意見がある⁷⁶。所論は鷗外の言論活動に対する客観的制限を強調しており、参考となるが、鷗外が「脱亜論の路線に従うかどうかを、後に再検討したい。

そして、最後の黄禍論への対応ルートは、田口卯吉の言語学の立論に基づいた「日本人種アリア起源説」である。彼の「国語より観察したる人種の初代」によれば、「文法に於いて」サンスクリットをはじめとする印欧語族は「ヨウロッパ諸國との間に此の如き相違あり」、「アリヤン語族の根本」は「我が日本

⁷² その点について、松村正義は多くの研究を行った。単著としては前掲書（一九八〇年）、前掲書（一九八七年）、『新版・国際交流史…近現代日本の広報文化外交と民間交流』（地人館、二〇〇二年）の第四章「黄禍論との闘い」、一九九一―一八三頁などが挙げられる。また、論文としては、「黄禍論と日露戦争」『国際政治…日本外交の思想』（第七一号、一九八二年）、三八―五八頁、「日清戦争と黄禍論」東アジア近代史学会編集『日清戦争と東アジア世界の変容・下巻』（まゆに書房、一九九七年）、二九九―三一九頁、「広報外交における日露の闘争」日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』（成文社、二〇〇五年）、一八〇―二〇二頁などが挙げられる。

⁷³ 当時イギリスで外債募集に命じられた日本銀行副総裁である高橋是清（一八五四―一九三六年）はロシアがユダヤ人を迫害すると宣伝し、イギリスでのユダヤ人金融家の支持を得た。具体の活動は前掲書大島清（一九九九年）、五三―五七頁を参考。また、前掲書山室信一（二〇〇五年）、一四五―一四八頁を参考。

⁷⁴ 前掲書山室信一（二〇〇五年）、一二五頁。

⁷⁵ 前掲書飯倉章（二〇〇四年）、一一九―一二三頁、前掲書山室信一（二〇〇一年）、六九―七〇頁。

⁷⁶ 前掲論文野村幸一郎、一〇五頁。

の文法に類」し、日本人種を「アリア人種」とすべきだと唱えた。逆に、田口は、西洋の言語学者が「我々祖先を横取りして、我々を末家筋に貶す」と不満を表した⁷⁴。

しかし、田口の説は多くの批判を浴びた。例えば、言語学者である新村出（一八七六～一九六七年）は「科学上寸毫の価値なく、又学問上の徳義に於て欠ける」とし、さらに「其誤謬は根底からの誤謬、全体の誤謬であつて、少々どころの誤謬ではない」という酷評を下している⁷⁵。元総理大臣大隈重信（一八三八～一九二二）も「アリアンは左程有難いものか、吾々は疑う。何というても我々の血はアリアンとは違う⁷⁶」と田口の説を否定した。もともと、田口を東西両洋文化に通じる「二本の足」の学者として高く評価した鷗外も、「日本人がアリア人種だと云ふ論断がしてある、そしてその理由として挙げてある言語学上の事実が、間口ばかり広くて手薄である、学者はあんな軽卒な論断をしては困るぢやないか⁷⁸」と厳しく批判した。

右述したように、三国干渉後盛んになっていた人種・黄禍論に対して、日本では、民間の「黄色人種同盟」、政府側の「文明開化」および田口の「日本人種アリア人種属」という三つの対応ルートがあった。鷗外は田口の説を「軽卒な論断」としたと同時に、主観的はどうであれ、第二軍軍医部長の高官であるという職務的な立場からすれば、「黄色人種同盟」を支持することはできなかった⁸¹。一見すれば、鷗外の選択肢は政府側と同調し、西洋を模範とする「文

⁷⁴ 鼎軒田口卯吉全集刊行会編輯『鼎軒田口卯吉全集』第二卷（復刻版、吉川弘文館、一九九〇年）に収録。以下は『田口全集』と略する。『田口全集』第二卷、四一六頁、四二二頁。田口卯吉の「日本人アリア人種起源説」の具体的な論述について、本論の第二章第三節を参考。

⁷⁵ 新村出「田口博士の言語に関する所論を読む」『新村出全集』第一卷（筑摩書房、一九七一年）、一〇四頁。初出は『言語学雑誌』（第二卷第四号、一九〇一年七月）、三三七～三五四頁。

⁷⁶ 大隈重信「東亜の平和を論ずる」『大隈伯演説集』（早稲田大学出版部、一九〇七年）、一一頁。

⁷⁸ 森鷗外「鼎軒先生」『鼎軒田口博士七回忌記念号』『東京経済雑誌』（第六三卷第一五九一号）、一九一一年四月二二日、七〇三～七〇五頁。『鷗外全集』第二六卷、四二二頁。引用は『鷗外全集』によるもの。

⁸¹ 前掲論文野村幸一郎、一〇四～一〇五頁。

明開化」路線しかなかったかのようだが、実は鷗外の人種・黄禍論への対応は、かなり揺らぎと躊躇を経たものである⁸²。

第二節 森鷗外における人種・黄禍論

(一) 黄禍論と戦争論

第一節に確認したように、日清戦争後、清国の国力が弱体だという事実が世界に対して露わになり、黄禍の矛先は新興帝国日本にむけられた⁸³。そして、三国干渉、義和団事件などを経て、西洋列強の日本に対する警戒感は一層強化され、日露戦争前夜、頂点に達した⁸⁴。鷗外の『黄禍論梗概』講演は、まさにこの時期であった。

しかし、講演の冒頭で黄禍論を「絶えず研究し」、「十年前当りから、種々の著述を蒐集⁸⁵」してきたといったように、鷗外は日露戦争の「十年前当りから」、具体的に言えば、三国干渉の時期から黄禍論に対する関心を持つようになった。よって、鷗外の黄禍論への認識も、三国干渉以来一連の歴史事件と繋げて考察する必要がある。このなかで、最も注目すべきなのは、義和団を鎮圧するために、名誉白人として八カ国同盟軍に加入する日本軍の体験である⁸⁶。

一九〇〇年に、義和団を鎮圧するために、日本人は八カ国同盟軍に加入した。

⁸² ドイツから帰国直後、鷗外はすでに人種差別への警戒を呼びかけていた。この時期、鷗外の人種主義への憂いは、主に当時の外相大隈重信の各国と個別交渉を方針とする条約改正が難航したことと関わっている。森鷗外「西人ノ虚辞、我ヲ誣詆ス」、「報知記者の人種相忌の説」『鷗外全集』第二二巻、二三一―二六頁、二五一―二五二頁。

⁸³ 前掲論文廖育卿、二三―三五頁。

⁸⁴ 日露戦争期、人種戦争の緊張感について、前掲書飯倉章（二〇一三年）、一一五―一四四頁、前掲書ゴルヴィツァー、一一九―一二二頁、前掲論文ジャン・ピエール・レーマンに詳しい。

⁸⁵ 森鷗外『黄禍論梗概』『鷗外全集』第二五巻、五三九頁。

⁸⁶ 鷗外の黄禍論の考察にあたって、最初に義和団事件（北清事変）の重要性を強調したのは、平川祐弘である。森鷗外の「北清事件の一面の観察」を『黄禍論梗概』の文脈と合わせて考えられたのは、前掲書平川祐弘（一九七一年）、一三八―一四三頁からヒントを頂いた。

このことは、通常西洋人への不信感を次第に解消させるはずであるが、鷗外の西洋人に対する警戒感は一層強くなっていった。それについては、義和団事変後、鷗外の講演「北清事件の一面の観察」（一九〇二年）から窺えるだろう。

鷗外によれば、明治維新以来、日本兵は主に、書籍、洋教官、留学生、旅行者を通して、欧州兵と間接的に接触してきた。しかし、今回の北清事変に関して、鷗外が強調したのは、「上将官より下兵卒に至る」まで「直接に相触」したことである。鷗外は、戦場で「敗徳汚行甚し」の西洋軍に対して、日本軍は「尊重すること甚だ過ぎ」であり、欧州兵に対する「買被り」を今「打破するは至当」だと唱えた⁸⁷⁾。

周知のごとく、当時八カ国同盟軍、特にロシア軍とドイツ軍は、北京戦場で大規模的な暴行を行ったが、日本政府は、西洋列強との同盟を「開辟以来今日ヲ以テ始メ」とする重大事件とし、「野蛮ノ所業ニシテ大ニ国威ニ関シ」、「果敢奮闘以テ好模範ヲ各国ノ軍隊ニ示シ」、「身以テ事ニ当リ軍紀風紀ヲ嚴守シ」と、軍紀を繰り返し強調した⁸⁸⁾。

結局、北清事変においてみずからの目で西洋人兵士の暴行を目撃した日本人は、西洋人への見方を変えた。それまでの日本人が抱いていた理想化された西洋人のイメージは崩れた⁸⁹⁾。その上、日本国内でも、戦場西洋軍の暴行は広く報道され、特にロシア軍の恐るべき虐殺と略奪は、当時の新聞や雑誌、公式記録には無分量といってよいほど掲載され、野蛮で恐るべきロシア人像が日本人の中に形成されていった⁹⁰⁾。例えば、当時病に伏せていた中江兆民（一八四七―一九〇一年）は「新聞紙上しばしば恐露病てふ文字を見る」と記し、「政府の過度露を懼る」と批判し、「薩長政府は久しく恐外病に罹れり」と嘲笑した。彼は、西洋の「物質の学の術」は「真に人をして驚嘆」させるが、西洋人の「義理」に対して「畏るべき」ではなく、「大いに我れに劣る」と断じた⁹¹⁾。鷗外

⁸⁷⁾ 森鷗外「北清事件の一面の観察」（一九〇一年二月二三日に小倉偕行社での講演）『鷗外全集』三四卷、二二七―二二八頁。

⁸⁸⁾ 小林一美『義和団戦争と明治国家（増補）』（汲古書院、二〇〇八年）、二二二頁。

⁸⁹⁾ その点について、前掲書平川祐弘（一九七一年）、一四一頁を参考。

⁹⁰⁾ 前掲書小林一美、三五七頁。

⁹¹⁾ 中江兆民「恐外病と侮外病」『一年有半 続一年有半』（岩波書店、一九五五年）、八九―

も同様に『黄禍論梗概』において、まず西洋人の「義理」に対して疑問を呈する。

「青眼もて白人を視、白眼もて黄人を視る。乃ち新語を造り出して黄禍と云ふ。安ぞ知らん、北のかた愛瑣に五千の清人を駆りて、黒龍江水に赴きて死せしめ、南のかた旅大を蚕食して、陽に租借と称するは、人道に逆ひ、国際法を破ること、殆ど人の意料の外に出づるを⁹²。」

鷗外は「人道」、「国際法」など西洋の論理を逆手にとって、ロシア人の清国人に対する残酷行為を批判し、白人であるロシア人が道徳的に優越しているというイメージを打破する⁹³。その上、鷗外は当時盛んであった黄禍論を次のように捉えた。

「戦争が我に不利」であれば、白人は「黄禍の一部分を未萌に厭伏し」、我が「凱歌を唱へ」たら、「我戦勝の結果を、成るべく縮小」しようとする⁹⁴。しかも鷗外は、このような「黄禍」をめぐる西洋人の二重基準を、詩文の中で「勝たば黄禍、負けば野蛮」と表現した。これは一言で黄禍の内実を喝破したとも言えるだろう。従って、ここで鷗外は、黄禍が戦争の勝敗を問わず、日露戦争後、外交上で日本抑制のイデオロギーとして機能すると洞察した⁹⁵。このような戦争の緊迫感があったからこそ、鷗外は黄禍論への警戒を呼びかけ、ドイツの歴史家ヒンメルスチエルナ(Hermann von Sanson-Himmelsjerna、一八二六―一九〇八年)の著述『道德問題としての黄禍論』(Die Gelbe Gefahr als

九一頁。「恐外病と侮外病」について、前掲書平川祐弘(一九七一年)、一四〇頁にも触れていた。

⁹² 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五三七頁。

⁹³ 前掲論文野村幸一郎、一〇六頁。

⁹⁴ 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五四〇頁。

⁹⁵ 一九〇四年八月一七日、旅順口閉塞作戦が終わり、鷗外は中国東北の戦場張家園子で「黄禍」という詩歌を作った。森鷗外「黄禍」『うた日記』『鷗外全集』第一九卷、一六一頁。また、黄禍論を日露戦争のイデオロギーとして機能するのは、前掲先行研究小堀桂一郎、山崎國紀、延芳晴、小林一夫らも強調した。

Moralproblem, 一九〇二年)を例として、西洋に流行っている黄禍論を日本の読者に紹介した。鷗外によれば、「読者は略ぼ此に依りて黄禍論の何物たるを窺ふことを得べし⁹⁶」という。

ヒンメルスチエルナのいう黄禍論は、「平和的黄禍」と「戦争的黄禍」に分けられる。「平和的黄禍」とは、「商業や工業の競争の上から、黄色人が白人に迷惑をさせる」ことである。「戦争的黄禍」とは、「早晚此兩人種の間には戦争が起」ることである⁹⁷。しかし、鷗外はいずれにも反論を加えた。なぜならば、鷗外は「論者の所謂黄禍の平和的方面は、西洋人が道徳の根本を誤つて社会問題を生じて、商業工業の上で競争が出来ない」からだ。それで、「戦争的黄禍」は「西洋人が妄に支那に利益圏を作つて、不正な政策を行つて」、早晚「利益圏から逐ひ出され」たのである。この二点について、鷗外はいずれも「罪は彼に在ります」と断言した⁹⁸。言い換えれば、鷗外は「平和的黄禍」であれ「戦争的黄禍」であれ、西洋人自身の誤りを、黄色人種に被せるものであると考えた。

ここで注意すべきなのは、黄禍論の二つの方面について、ヒンメルスチエルナと鷗外の強調することが異なるという点である。ヒンメルスチエルナは、「戦争的黄禍」より「平和的黄禍」を強調したように見える。なぜならば、「麵麩の嫉にすぎない⁹⁹」(ヒンメルスチエルナの用語)の言葉に象徴されるように、「欧羅巴人は東亜細亜を自分の国の商品の決場¹⁰⁰」所としたためである。しかし、日本帝国が膨張するにつれて、中国をめぐる西洋と日本との競争が白熱しつつあり、特に日露戦争の直前という時期に、帝国軍医としての鷗外が、黄禍の経済の面より、戦争の面を重視したのは明らかである。この点は、日本、中国、西洋の三者の関係に対するヒンメルスチエルナと鷗外の異なる態度を見ればいっそう明らかになる。

⁹⁶ 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五三七頁。

⁹⁷ 同右、五四〇頁。

⁹⁸ 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五六七頁。また、「平和的黄禍」と「戦争的黄禍」について、前掲論文野村幸一郎、一〇七―一〇九頁にも詳しい。

⁹⁹ 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五六四頁。前掲論文野村幸一郎、一〇九頁。

¹⁰⁰ 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五四四頁。前掲論文野村幸一郎、一一〇頁。

鷗外によれば、『道德問題としての黄禍論』の主な内容は、精神、道德、宗教といった方面から中国と日本との比較からなり、中国を賛美し、日本を非難するのが一貫した態度であるという。例えば、日本人は「思量の力」、「抽象的能力」が「全然無い」に対して、中国人は「沈着」、特に高等官吏が「深遠で、単純で、論理上明白」である。日本人は「悪い意味で云ふ唯物家」であり、反対に、中国人は「教を立て」、「古を尚み、祖先を崇拜」する。日本の「商人の信用」は低いと反対に、中国の「商業精神に富んで」いる¹⁰¹。

ヒンメルスチエルナは意図的に「黄色人の中で支那人と日本人とを別けて」、そして「支那人を揚げ日本人を抑へる」ようにした。それに対して、鷗外によれば、西洋人が「支那に心酔して日本を憎悪する」理由は、西洋人にとって、中国より「日本が当面の敵」だからである。鷗外によれば、日本が「往々白人等と塵を並べて進んで」、「却つて他の黄色種族と争い」、「現に英国と同盟し」ても、「一般の白人種は我国人と他の黄色人とを一くるめに」し、「一種の厭悪若くは猜疑の念」があつた。ここで鷗外は、明白に日本人の名誉白人という自己陶醉を斥け、白人との闘争が避けられないと結論した。なぜならば、白人が日本人と他の黄色人種とを一括りしても、黄色人種の中で中国人と日本人を分けても、日本は終始「当面の敵」であるからだ。この点を深く認識したがゆえに、鷗外は「吾人は嫌でも白人と反対に立つ運命」を持つと覚悟しなければならぬと、当時の日本人の読者に伝えた¹⁰²。言い換えれば、このように三国干渉以来一連の戦争・国際情勢を観察したうえで、鷗外の黄禍論への対応は、簡単に「黄色人種同盟」でもなく、「文明開化」路線でもなく、白人と対抗することを選んだ。

(二) 文明論と人種論

三国干渉後一連の現実的な政治・戦争事件に関する『黄禍論梗概』と反対に、

¹⁰¹ 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五四九〜五五一、五五九頁。前掲論文野村幸一郎、一〇七〜一〇八頁。

¹⁰² 前掲書森鷗外、『黄禍論梗概』、五三九、五六七頁。

森鷗外のもう一つの講演『人種哲学梗概』における人種論批判は、主に論理的・哲学的な内容を備えている。『人種哲学梗概』の内容は、主にフランス人の外交官であるゴビノー (Joseph Arthur, Comte de Gobineau, 一八一六―一八八二年) の著述『人種不平等論』 (*Essai sur l'inégalité des races humaines*) をめぐる紹介と批判である¹⁰³。それによつて、同じ人種差別問題に対して、鷗外は『黄禍論梗概』と異なる関心を示したのである。

一八五三―一八五五年の間に完成したゴビノーの『人種不平等論』は、全六部からなり、第一部は「予備的考察 社会的世界を支配する自然法則の定義・探究・説明」で、第二部以下は世界文明史の説明である¹⁰⁴。そもそも、フランス大革命から生じた社会混乱に失望したゴビノーの『人種不平等論』が扱う主題は、人種と諸文明の崩壊との関係であるが、ドイツ人の歪曲と改竄のため、「アーリア人種優越論」と「反ユダヤ人主義」に逆転した¹⁰⁵。したがって、ドイツを経由したゴビノーの人種哲学を読んだ鷗外が、最も懸念したことは、社会秩序の崩壊でも、反ユダヤ主義でもなく、その「白人跋扈の思想¹⁰⁶」である。鷗外自身の言葉を借りれば、『人種不平等論』における「最も重大なものは、ARIA 人種が唯一の能化の民。他を開化する力を備へた民だといふ一事に在る

¹⁰³ 本節に、森鷗外の『人種哲学梗概』以外、『人種不平等論』の英訳 Arthur de Gobineau, translated by Adrian Collins, *The inequality of human races* (London: W. Heinemann, 1915) をも参考した。また、ゴビノー人種論に関する見解は、長谷川一年「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学(一)——『人種不平等論』を中心に——」『同志社法学』(第五二巻第四号、二〇〇〇年一月)、一〇九―一六八頁、ジエームズ・W・シーザー『反米の系譜学…近代思想の中のアメリカ』(村田晃嗣など訳、ミネルヴァ書房、二〇一〇年)の第四章「人種的シンボルとしてのアメリカ——アルチュール・ド・ゴビノーの『新しい歴史』——」、九一―一〇九頁によるものが多い。

¹⁰⁴ 前掲論文長谷川一年、一二二頁。

¹⁰⁵ それに「*Paul A. Fortier, Gobineau and German Racism, Comparative Literature Vol. 19, No. 4 (Autumn, 1967), pp. 341-350*」 伍碧雯「古比諾『人種不平等之探源』——十九世紀末德國種族理論——」『成大西洋史集刊』(第一二二号、二〇〇四年六月)、九一―一二六頁に詳しい。

¹⁰⁶ 前掲論文森鷗外「人種哲学梗概広告文」、六二五頁。また、鷗外がドイツ語訳の『人種不平等論』を読んでゴビノー思想の「シシズム(悲観主義)」を見過ごした。その点について、アメリカ研究者 Richard John Bowring, *Mori Ogai and the modernization of Japanese culture*, New

York: Cambridge University Press, 1979, p.144 を参考。

107」のである。

以下、鷗外の懸念を念頭におきつつ、『人種不平等論』における人種と文明との関係を整理した上で、鷗外の批評をまとめ、鷗外に関心の所在を明らかにしたい。

人種を文明の要因とする考え方は、ゴビノー以前にも存在した¹⁰⁸。しかし、ゴビノー以前に「時と場所とを問わず文明の興亡を決定づけるただ一つの理由、ただ一つの力を見つけようなどと、考えもしなかった¹⁰⁹。」ゴビノーは、従来の歴史学者が論じた文明の崩壊の理由、例えば宗教上の熱衷、奢侈、風俗の類敗、不信仰、政治の退歩などを斥けた上で、真の文明の崩壊の理由は人種の退化だと主張する。人種の退化とは、人種の血管の中にもはや同一の血が流れておらず、相次ぐ混血によって徐々に人種的価値が変化したことを指す。ここでいわゆる「血」とは、物質と精神の両方の意味がある。一方では、いろいろな人種の血はそれぞれの価値がある。他方では、混血によってその価値を互いに与えられる。世界史を一つの最終的な原理としてまとめようとするゴビノーは、異人種間の混血から文明の興亡を述べている¹¹⁰。

ゴビノーの考えでは、あらゆる文明は、征服人種と被征服人種の弁証法に従って進んで行く。征服人種は、被征服人種を支配したが、次第に、異人種との混血が始まり、征服人種自身の血の純粋性を失い、退化をもたらす。そして、被征服人種は逆に、征服人種の血を受け入れるため、文明化する。これがゴビノーの論じる弁証法的な歴史法則のである¹¹¹。

このような歴史法則に基づいて、ゴビノーは世界の人種の分類の作業に着手する。ゴビノーは、まず肌の色によって、すべての人種を白人種、黄色人種、

¹⁰⁷ 森鷗外『人種哲学梗概』『鷗外全集』第二五巻、五二九頁。

¹⁰⁸ 前掲論文長谷川一年、一二三―一二四頁。

¹⁰⁹ Hannah Arendt, *The origins of totalitarianism*, New York: Meridian Books, 1958, p171. 前掲書ジエームズ・M・シーザー、九七頁。

¹¹⁰ ゴビノーの「混血」論について、前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五一四―五一七頁、前掲論文長谷川一年、一二三―一二八頁、前掲書ジエームズ・M・シーザー、九七―九八頁を参考。

¹¹¹ 前掲書ジエームズ・M・シーザー、九八頁。

黒色人種という三大人種に分け、それぞれの価値とその差異を論じた^{二二}。

黒人は最底辺の地位に位置し、獸性を満たし、知力がない状態で、一度も偉大な文明を形成しなかった。彼らはわずかな知性しか持っておらず、良悪の区別に概して無関心、奴隷化されやすい。

序列の二番目に位置付けられるのは黄色人種である。彼らは体力も欲求も弱く、無気力の傾向を示し、物質的享受だけに耽る。また、彼らは独創性を欠くが、他の人種が発見したものを模倣するのは優れる。

そして最後の白人種は諸人種の頂点に立つ。彼らは、身体的にも精神的にも最も美しく、創造力を備える唯一の人種である。黄色人種の場合よりも広く、高尚で、勇敢な、理想的な意味においてである。生への愛着においても際立っているが、名誉のために、命を捨ててもかまわない。

シーザーが指摘するように、研究方法の点からすると、ゴビノーは、様々な民族の身体的性質を科学的に観察するよりも、歴史的文献の分析によって諸人種の性質を推論しているように見える。にもかかわらず、ゴビノーは、人種間に永久不変の生物的差異が存在するという仮定に完全に依拠していた^{二三}。このように、ゴビノーは白人種、黄色人種、黒人種間の人種不平等のヒエラルヒーを構築した。しかし、白人種、黄色人種、黒色人種という三つの人種の集団は、ゴビノーの歴史理論全体を説明するものではない。ゴビノーの世界史の説明の主な内容には、白人種の中で、さらに細分化された様々な「人種」の関係、なかでも、白人種の中で最も高貴、そして純血を守ったアーリア人種と文明との関係に焦点が当てられている^{二四}。『人種不平等論』におけるいわゆる「十大文明」、つまり、旧世界のインド文明、エジプト文明、アッシリア文明、ギリシア文明、中国文明、古代ローマ文明、ゲルマン文明、そしてアメリカ大陸のアレガン文明、メキシコ文明、ペルー文明は、全てアーリア人種との混血があつ

^{二二} 三人種の特徴としては、前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五二五～五二六、前掲書ジェームズ・M・シーザー、九九～一〇〇頁、前掲論文長谷川一年、一三三～一三四頁を参考。

^{二三} 前掲書ジェームズ・M・シーザー、一〇〇頁。

^{二四} 前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五二六頁。前掲書ジェームズ・M・シーザー、九九～一〇〇頁。

たからである¹¹⁵⁾。アーリア人種の血がなければ、文明化ができないということが、ゴビノーの世界史の結論である¹¹⁶⁾。

鷗外はゴビノーの『人種不平等論』の要点を掴んで紹介しつつも¹¹⁷⁾、この「人種哲学の性質は、白人跋扈の思想を助長」するにあるのだと看破し、その勢力の発展を止めさせなければならぬと呼びかけている¹¹⁸⁾。しかも鷗外自身は三つの方面から、ゴビノーの人種哲学に反論を加える。

まず、鷗外はゴビノーの人種哲学を「我田引水」と「身勝手の思想」とし、「初め地球中心のであった天体論が倒れて、次いで人類中心のであった創世記が潰れたやうに、ARIA人種中心的人種論も、まだ出来たての中に、早くも撼き出しはしますまいか」といったように、人種哲学が歴史上一次的に流行っている思想にすぎないと考えた¹¹⁹⁾。つまり、このような「白人跋扈」の人種哲学は、時間が流れるにつれていつか潰れると、鷗外は主張した。

つぎに、鷗外は、日本の文明開化の成就を事例として、ゴビノーの人種哲学の虚妄性を指摘する。もともと日本と西洋は同じ「能動の地位に立¹²⁰⁾」つと考えた鷗外にとつて、日本の「文明開化」の成就是西洋人と人種上の違いによつて否定できない事実である。この点は、鷗外がとくにゴビノーの共和国のハイチに対する評価を批判したことから窺える。ゴビノーは共和国のハイチを例として挙げ、政治制度と文明との関係を否定した。ゴビノーによれば、共和制度を採用したハイチはやはり人種の問題のため、文明化しえなかった。このような人種決定論に縛られているハイチ人に対するゴビノーの評価に、鷗外は日本の現状を繋げて考えた。なぜならば、ゴビノーの論理からすれば、既に君主立

¹¹⁵ 前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五二六～五二八頁。前掲論文長谷川一年、一四〇頁。ただし、ここでアッシリア人種とアーリア人種との関係は曖昧だと考えられる。

¹¹⁶ 前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五二六頁。前掲論文長谷川一年、一四〇～一四二頁を参考。

¹¹⁷ 前掲書 Richard John Bowring, p144.

¹¹⁸ 前掲論文森鷗外、「人種哲学梗概広告文」、六二五頁。

¹¹⁹ 前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五二九～五三〇頁。

¹²⁰ 森鷗外「洋学の盛衰を論ず」(一九〇二年三月二四日に小倉偕行社での講演)『鷗外全集』第三四卷、二二二頁。

憲制度をとった日本も、ハイチ共和国のように、「似而非開化」に属するからだ。鷗外は、もしゴビノーが「もつと長生をしたら」、「我国の維新後の政治を見たならば」、「日本人種にARIA人種の血がはいって居るといふ証拠を尋ね」なければならぬと反論を加えた¹²⁰。言い換えれば、鷗外は日本と西洋が同等の文明国だと考え、アーリア人種と文明化との必然的結びつきを否定した。ハイチの例は、鷗外の短い講演の中に、二回強調されたこともあり、鷗外の強い関心が窺えるだろう。

最後に、鷗外の人種決定論への批判は、ただゴビノーをはじめとする西洋人の「アーリア人種優越論」だけではなく、日本人の学者も疑問なく「アーリア人種優越論」をそのまま受容することを含む。例えば、田口卯吉に対して、「間口ばかり広くて手薄で」、「軽率な論断」と直接な厳しい批判は、そのためである。

「人種哲学の祖父」と呼ばれているゴビノーの「人種哲学」に対する日露戦争の直前の鷗外の紹介と批判は、いうまでもなく重大な意義がある。三国干渉以来の人種・黄禍論に対して、鷗外自身はまず本格的に十年にわたって西洋の人種論の書物を研究しており、当時一般的な人種論者に比べると、珍しい存在である。鷗外はさらに『人種哲学梗概』にて日本の文明開化を例としてあげ、西洋の「アーリア人種優越論」を厳しく批判し、しかも日本人も西洋諸国と同じ文明国としての誇りがあることも同時に示していた。

(三) 人種論と衛生学

従来、鷗外の人種・黄禍論は以上の二つの講演だけによって議論されてきたが、衛生学者としての鷗外の人種への認識は見落とされた¹²¹。本節が、『衛生

¹²⁰ ゴビノーの共和国のハイチに対する評価について、前掲書森鷗外、『人種哲学梗概』、五一八、五二九〜五三〇頁を参考。

¹²¹ 廖育卿は『衛生新篇』の「種族」という一章であるが、この一篇はどちらかというと、生物学的視点からの考察と言ってよい。この「種族」においては、主として繁殖と遺伝、及び淘汰と進化を説いているのである。(中略)軍医として衛生学の研究を主としていた鷗外にとって、「人種」についての研究をする可能性が皆無であったとは言えないが、「人種」の進化や

新篇』に収められた論文「種族」を取り上げ、鷗外における衛生学と人種との関係を考察してみたい。

周知のごとく、『衛生新篇』は、『陸軍衛生教程』（一八八九年）、『衛生学大意』（一九〇七年）と共に、鷗外の衛生学の三部作だと言われる。しかし、三部作の中に、繰り返し訂正し再版したのは、『衛生新篇』しかなかった。一八九六年に初版の『衛生新篇』が出版されて以来、第二版が一八九九年、第三版が一九〇四年、第四版が一九〇八年、そして最終の版となる第五版が一九一四年に公刊され、のべ十八年にわたり修正された¹²³。本稿で扱う「種族」という論文は、第五版の改稿の時に加えられたものである。

ここで注意しておくべきなのは、第五版の『衛生新篇』における「種族」が、鷗外の衛生学への理解と関わる重要な概念という点である。従来、衛生学の歴史と定義は各版の『衛生新篇』の「総論」に説明されている通り、「延年術」、「予防医学」を一般的な概念としていた。第五版の段階において、鷗外はドイツの優生学者プレッツ(Alfred Ploetz, 一八六〇～一九四〇年)の「人種衛生」(Rassenhygiene)という新しい定義を加えた。このような「人種衛生」の目的は、人種の「退化ヲ研究シ之ヲ防遏スル」にあるのである¹²⁴。したがって、人種競争を背景に、白人種はどのように競争に優位を守るのか、あるいはどのように人種の退化を防止するのかが衛生学者が研究する核心的の問題となっていたのである¹²⁵。

分類といった本質的研究にまで手が届いていないようである」と評する。ここで鷗外の論文「種族」の重要性について、廖は見落とした。前掲論文廖育卿、二四四頁。

¹²³ 鷗外の衛生学の三部作、そして『衛生新篇』の増補について、石田頼房「森鷗外の都市計画論：衛生新篇の都市、家屋の章について」『総合都市研究』（第六三号、一九九七年九月）、一〇三頁を参考。

¹²⁴ 森鷗外『衛生新篇・上』『鷗外全集』第三一巻、一〇～一一頁。

¹²⁵ 当時、社会衛生学、優生学、人種衛生学などの新科学の発展について、川越修「世紀転換期ドイツの社会衛生学——A・グロートヤーンの言説を手がかりに——」『歴史学研究』（七〇三号、一九九七年一〇月）、一一七～一二三頁、シーラ・フェイト・フェイス「ドイツにおける「民族衛生学」運動——1904-1945年——」マーク・B・アダムズ編著『比較「優生学」史…独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開』（佐藤雅彦訳、現代書館、一九九八年）、二四～一四九頁を参考。

ドイツ「人種衛生学」の影響を受けた鷗外の論文「種族」も、同じ方法論で論説を展開した。この論文は、「種族」、「来歴」、「繁殖及遺伝」、「非選択的及選択的除外」、「淘汰及進化」、「人ノ種族ノ単複」、「西欧産数ノ減少」、「人ノ遺伝」、「人ノ除外」、「反淘汰」、「人ノ進化退化」、「退化ノ予防」、「日本ノ人口静態」という十三節からなり、いずれも社会性と生物性の二つの角度から「人種」を絞って議論を進め、人種の退化の予防を中心的な問題としていた。

鷗外によれば、「人種」は二つの意義があり、一つは「形体学上ニ部門ヲ設ケテ種」、もう一つは「祖先ノ相親近セル数多個人ノ集団」である。鷗外が取り上げたのは後者、つまり「個人ハ死シ親戚ハ死ス」が、「種族独り能ク存ジ繁殖シ遺伝シ」、「新ナル個人ヲ継続出生セシム」という社会有機体的色を帯びる「人種」である。こうした人種は、「外境ノ勢力ニ対シテ相似タル反応ヲナシ其ノ外力ニ克服」し、「特有ノ生活状態ヲ継続スル傾向」を示す¹²⁶。

前述したように、衛生学者としての鷗外に対して、「人種」は生物学的な意義を持ちながら、社会性の意義もあり、表裏一体のものである。たとえば、「淘汰及進化」という節において、「能変性ノ上昇傾向ヲ有スルヤ外境ノ変化ニ遭遇シテ能ク種族ノ進化ヲ致シ形体的新典型ヲ生ズ 外境ノ変化ニハ移転アリ或ハ全種族其棲息スル所ノ地ヲ易ヘ或ハ其一部隣境ニ侵入ス又種族ニ新シキ敵ヲ生ジ若クハ従来ノ敵其勢ヲ加フルコトアリ」といったように、鷗外は「従来ノ敵」、「外境ノ変化」、「隣境ニ侵入」などの外境の要因を重視している。それと反対に、各人種の「生活作用」の目的に対して、鷗外は、それが「個物ノ数ノ存続」と「個物ノ質ノ存続」であり、それぞれ「生殖」と「遺伝」によるものであると考えた。ここでの「遺伝」は、さらに「折衷的遺伝」と「隔世遺伝」に分けられる。各種族の「生活作用」にたいして、鷗外は生物学の視点から論じていた¹²⁷。

以上の二つの視点に基づき、人種の退化の防止に対して、鷗外は主に「数ノ存続」と「質ノ存続」という二つの方面に分けて論じていた¹²⁸。

¹²⁶ 森鷗外「種族」『衛生新篇・下』『鷗外全集』第三二巻、八八頁。

¹²⁷ 同右、九〇〜九二頁。

¹²⁸ ハ)で鷗外は「除外及反淘汰」と「進化ノ継続」の内容にも触れていた。しかし、「除外及反淘汰」と「進化ノ継続」はそれぞれ「不生産」や「避妊」、または「個体体器ノ進化」な

まずは、「数ノ存続」である。鷗外は「人類全数ハ既ニ大ナリ之ヲ増殖スルコトヲ要セズ宜シク優勝分族（白人、黄人）ノ為ニ死数ヲ減ジ産数ヲ増シ且弱者ノ繁殖ヲ防遏スベキノミ¹²⁹」と考える。

ここで鷗外は、「適者生存・優勝劣敗」の社会進化論に基づき、個人であれ人種であれ、優勝の方のみ存続の権益を与えると主張する。このような社会進化論は、帝国主義国による侵略や植民地化を正当化する論理になるとされ¹³⁰、もともと黄色人種と黒人を差別対象としたが、鷗外は黄人と白人を同じ「優勝分族」としたことによって、その矛盾を解消した。

次に、「質ノ存続」である。鷗外は「遺伝ノ下降傾向ヲ防止スベシ」と考え、「男子五十五歳以上、女子四十歳以上ノ産児数ヲ小ニシ」といったように、出産期のコントロールを主張した。ここで鷗外は「避妊、不婚、不産」による産数の減少をも言及していた。また、鷗外は「前後産間二年ヲ下ラザラシメ酒癖ヲ禁ジ」と提唱し、「禁酒」を人種の「質」を確保するための手段としてあげた。しかし、ここで最も注目すべきなのは、鷗外が異人種間の混血の禁止をも人種退化の防止策としていたということである。鷗外は「白人輩ハ著々之ガ手段ヲ施セリ独逸人ハ東阿弗利加ニ於イテ独逸人ト土人ト婚嫁ヲ禁ジ」という植民地の政策を参考した上で、「混血ハ之ヲ避クルヲ要ス」と考えたのである¹³¹。

前節で述べたように、文明論者の鷗外はゴビノーの『人種不平等論』に論じられた混血による人種の退化に対する反対の立場をとった。一方、衛生学者としての鷗外は、異人種間の混血による人種退化を信じていた。ただし、「東阿弗利加ニ於イテ独逸人ト土人ト婚嫁」は白人と黒人との混血である。同じ「優勝分族」である白人と黄人との混血は、この事例に属さない。鷗外によれば、

どの内容を備えている。人種差別との直接な関係が弱いと考えられる。前掲論文森鷗外、「種族」、九七頁。

¹²⁹ 同右、九七頁。

¹³⁰ 社会進化論と帝国主義との関係について、Rutledge M. Dennis, *Social Darwinism, Scientific Racism, and the Metaphysics of Race*, *The Journal of Negro Education* (Vol. 64, No. 3), Myths and Realities: African Americans and the Measurement of Human Abilities (Summer, 1995), pp. 243-252 を参考。

¹³¹ 前掲書森鷗外、『衛生新篇・下』、九七頁。

「白人ト黒人トノ混血児ハ靈智黒人ニ優ルト雖、繁殖力微ナルガ如シ白人ト銅色人トノ混血児モ亦同シ白人ト黄人トノ混血児ハ結果未詳¹³²」である。ここで鷗外は黒人種を劣等人種としたばかりではなく、その科学的な根拠をも以下にあげた。「人ノ進化退化」という節に、鷗外はつぎのように述べている。

「白人ト黄人トハ漸ク地盤ヲ得、黒人等ハ漸ク之ヲ失フ、分族ノ高下ハ天才ヲ出ス多寡、獼猴ヲ去ル遠近、血清組成ノ単複ヲ以テ辨ズ可シ¹³³」

「獼猴ヲ去ル遠近」、「血清組成ノ単複」といった西洋の生理学の基準は、鷗外の人種の優劣観の基礎となった。ここにこそ、鷗外の西洋人種論批判の限界が見える。つまり、鷗外は黄色人種に対する人種差別を反対するが、その人種差別を支えた生理学・生物学といった科学的な根拠に対して、鷗外は根本的な疑問を抱かなかつた。

ここまで見てきたように、鷗外にとって、「人種」は二つの黄禍・人種梗概の講演によって終わってはいない。衛生学者の素養からすれば、鷗外は「種族衛生学」に対しても大きな興味を持っていたことがわかる。ある意味では、「種族」という論文は、鷗外の人種への認識を最も客観的に反映されると言えよう。なぜならば、黄白人種大戦と見なされている日露戦争を背景に、一般読者向けに行われた講演『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』、そしてその中にそこかしこに見られる人種についての感情的な表現あるいは政治的なスローガンと異なり、『衛生新篇』に収められた論文「種族」は、日露戦争後の緊張感が解除された時、鷗外は冷静な科学者として、衛生学専攻者向けに書いた論文であるからだ。

論文「種族」を通して、鷗外は積極的に「種族衛生学」をヨーロッパの衛生学の最新成果として日本に導入した努力が窺える¹³⁴。しかし、「種族」におい

¹³² 同右、九五頁。

¹³³ 同右、九六頁。

¹³⁴ 森鷗外のドイツ留学時代の医学研究について、武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』（思文閣出版、二〇一四年）を参考。鷗外の医学生涯について、前掲書丸山博、前掲書伊達一男（一九八一年）、（一九八九年）に詳しい。

て、鷗外は敢えて白人種と黄人種を「優勝分族」としたのは、黄人種として「種族衛生学」に隠された人種差別に対する危機感を示したとともに、「人種優劣論」という前提を認めたとと言える。

結び

『人種哲学梗概』の出版後、鷗外は「梗概博士」と揶揄された。しかし、鷗外は「哲学史家の功は哲學家の功と共に承認せらる。而して哲学史の体たる、梗概の範圍を出でずと。予は未来に於いても、此種の梗概を続刊して、世人の嘲を甘んじ受けんことを期す」といったように、このような西洋書物に対する紹介と批判からなる「梗概」作品を「哲學者の功と共に承認」されるものとし、大きな価値を有し、また出版するつもりだと考えた¹³⁵。その意味では、『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』は、鷗外にとって極めて重要な意義がある。鷗外は日露戦争前後の人種・黄禍論に対して、一方では日本に置かれた国際情勢を鋭く観察し、「吾人は嫌でも白人と反對に立つ運命」を持つと結論づけた。他方では、鷗外は三十年にわたった日本の文明開化の努力が、すでに西洋人に劣らない成就を得、その点が西洋人と人種的差異によって否定できない事実だと考えた。

上述の鷗外の二篇人種・黄禍「梗概」によって、ここまで反人種差別主義の鷗外像は形成されていたが、衛生学者としての鷗外は、生理・衛生学の論拠によりつつ、白人種と黄色人種が同様な文明的な人種と主張する一方、黒人に対する差別を保留していた。鷗外の人種・黄禍論については、黄色人種を代表する日本の人種間平等への訴求も反映されていたとともに、彼が衛生学者の思想に固執した人種差別主義も確認できると考えられる。

第二章

田口卯吉における人種論の展開

——内地雑居論から黄禍論まで——

序論

田口卯吉は、明治期において活躍していた歴史家と経済学者として知られており、明治期の思想・文化・政治・経済・外交といった幅広い領域に大きな影響を与えた人物である。その同時代人である森鷗外は、田口の文明史論の功績に対して、東西両洋文化に通じる「二本の足」の学者と評し、さらに福沢諭吉に比べて、「鼎軒先生の勝つていられる処がある」と考えた¹³⁶。一九二七年において田口の後輩である経済学者福田徳三（一八七四～一九三〇年）は『鼎軒田口卯吉全集』（全八巻）の初版の際に、田口卯吉を福沢諭吉と天野為之（一八六一～一九三八年）とともに、明治期三大経済学者としてあげた¹³⁷。また、政治学者吉野作造（一八七八～一九三三年）は自由主義の立場から、田口の政論が「最も正しい最も適切な意見を代表」し、「時代を動かした主要潮流の重要な分子」で、「明治の初め三四十年を支配した政治思想の主なる底流」であると高く評価している¹³⁸。このような多様な分野にまたがる評論からすれば、

¹³⁶ 前掲論文森鷗外「鼎軒先生」、四二二頁。

¹³⁷ 福田徳三「田口全集の刊行に際して」『福田徳三著作集』第一九卷（信山社、二〇一七年）、四六五頁。

¹³⁸ 吉野作造「解説」『田口全集』第五巻、五頁。

田口のいった時代において存在感が大きかったことが窺えるだろう¹³⁰。

近年以来、田口をめぐる研究も多く重ねてきたように見える。その生涯をたどったものとして、嘉治隆¹³¹、杉原四郎¹³²、松野尾裕¹³³、田口親¹³⁴、河野有理¹³⁵などの研究が存在している。しかし、これらの先行研究には、彼の文明史論と自由主義経済論に関わるものが大きな比重を占めており、田口の思想の重要な一環である人種論については、十分に重視されていなかった。例えば、田

¹²⁹ ここで注意してほしいのは、田口はその生涯には影響力は大きかったが、その死後の影響力は急速に失ってしまったことである。その原因については、河野有理は福沢諭吉と比較しながら述べていた。河野有理によれば、「(田口は)福沢のように大学を経営し、弟子を養成し、各地にいわゆる「山脈」をつくることはしなかったという事情はもちろんあるう。だがそれだけではあるまい。彼の活動の多様性も一因なのであるう。「革命後の社会は百事草創に属す、一事に専らなる能はざる」を座右の銘としたというその活動は事実多岐を極めた。彼は東京府会、東京市会また衆議院にそれぞれ議席を有していた。彼は歴史家(といってもそれは現在でいう人類学や考古学をも含む広いもの)であり、また『日本社会事彙』、『大日本人名辞書』の編集者であり、『国史大系』、『群書類従』、『徳川実紀』の刊行者でもあった。経済学者であり、同時に起業家、実業家、経営者だった(両毛鉄道、東京株式取引所)。ジャーナリストであり雑誌経営者(『東京経済雑誌』『史海』)だった。発明家、そして時には冒険家さえであった。理論の人であり、同時に実践の人だったのである。こうした活動の多彩さは、それ自体が同世代中においても群を抜く、彼の際立った特徴と言える。にもかかわらずそれはともすれば「啓蒙」期におなじみのある「百科全書」的な特質として、彼が冷笑される原因にもなった。彼の死後、専門分化した各学問領域が、それらの分野が当時相互に有していた関連や、理論と実践の統合を背景で支えていた強烈な価値意識を捨象した上で、彼が各分野であげたそれぞれの業績に、各学問の枠組みにそった学史的な位置づけを与えることに腐心してきたという事情が、そこには働いていたのだろう。こうした努力が、田口を言ってみれば学史上の祭壇における体のいい藁人形にしまったのである。彼の著作の平易な文体、その主張の一見した明晰さも、こうした印象、つまり彼の議論は結局「大づかみ」(長谷川如是閑)なアマチュアリズムにすぎないとの印象を助長することになった」という。河野有理『田口卯吉の夢』(慶應義塾大学出版会、二〇一三年)、八〜九頁。

¹³⁰ 嘉治隆一『明治以後の五大記者 兆民・鼎軒・雪嶺・如是閑・竹虎』(朝日新聞社、一九七三年)、七五〜一一八頁。

¹³¹ 杉原四郎、岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』(日本経済評論社、一九九五年)。

¹³² 松野尾裕『田口卯吉と経済学協会・啓蒙時代の経済学』(日本経済評論社、一九九六年)。

¹³³ 田口親『田口卯吉』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

¹³⁴ 前掲書河野有理。

口の「日本人アリア人種起源説」に対して、先行研究は「老耄の域にたつした¹⁴⁵⁾」もの、「学問的妥当性を欠いたイデオロギー的な対外硬論¹⁴⁶⁾」、「白人には劣等感をいじめていた¹⁴⁷⁾」、「微笑を禁じえなかった¹⁴⁸⁾」ことにすぎないと、本格的に論じたものではなかった。

管見の限り、田口の人種論を最初に重要な課題としたのは、戦後の歴史家橋川文三である。氏は、田口の人種論が「いち早く日本人が自己の本源的性格について屈折した関心を抱かざるを得なくされた」状況において生じ、「オリジナルな研究の立場から議論を展開」したうえで、「上昇期ブルジョアジーの開明的傾向に貫かれたものであり、なんらかの意味で偏狭な民族的優越感」を持つものではないと評する¹⁴⁹⁾。氏は、「自己の本源的性格」への探求という点から、田口の人種論に対して積極的な評価を与えていた。

つぎに、田口の人種論を論じたのは、工藤雅樹である。氏によれば、田口は、「はじめ『記』『紀』の研究の自由を主張し、「神は人」という観点から古代史を考えようとし」、「早くから「日鮮同祖論」的主張に同調し、後には日本人アリア人種説をたて、日本人はヨーロッパ人と同系統だから優秀だとして、アジアにおいてヨーロッパ諸国と同様な行動をとることの必然性を説くに至った」と解する。そして、氏は田口の人種論に「日本人を他のアジア人よりも一等すぐれたものであって、欧米人と同等の素質を有」したことを強調するといふ点から、田口の人種論を「脱亜論」の延長線に置かせるべきだと考える¹⁵⁰⁾。また、小熊英二も同様に、田口を「脱亜入欧にとどまらず、日本民族を人種的にも白人として認めてもらいたかったのである。田口は一連の人種論でも洋服着用を奨励し、日本が周辺の黄色人種国とちがいヨーロッパ風の立憲政治に急

¹⁴⁵⁾ 大島清、加藤俊彦、大内力著『明治のイデオログ 人物・日本資本主義(四)』(東京大学出版会、一九八三年)、一六九頁。

¹⁴⁶⁾ 御厨貴「田口卯吉」三谷太一郎編『言論は日本を動かす(二)』(講談社、一九八六年)、六四頁。

¹⁴⁷⁾ 井上章一『法隆寺への精神史』(弘文堂、一九九四年)、九四頁。

¹⁴⁸⁾ 馬場啓之助「田口卯吉論」『一橋論叢』(第五七巻第四号、一九六七年四月)、四二―三頁。

¹⁴⁹⁾ 前掲書橋川文三、四四、四六、五〇頁。

¹⁵⁰⁾ 前掲書工藤雅樹、一六〇―一六一頁。

速に開化したことを人種的優秀の証としてあげており、その意味で開化論者としての尾をのこしていた」と評する¹⁵¹⁾。

そして近年重要な研究として武藤秀太郎の論考が挙げられる。氏は田口の人種論を彼の中国認識に合わせて考察した。そして田口は「日本人の起源に関する純粋な学問的関心があった一方で、最終的にアーリアン人種説へと至る主張には、その時々々の中国大陸をめぐる状況認識が、強く反映されていた」と結論づけた。また、日露戦争を背景に生じた田口の「日本人アーリア人種起源説」について、氏は「ロシア人との人種的差別化を図ると共に、アーリア人」「世界の先祖」との同定により国民の「自負心」を高める意図が存在した」と考えた¹⁵²⁾。

前述したように、人種論の研究史の中で田口が取り上げられることはあるが、その人種論の形成過程とその展開に着目することは、従来あまり多くなかった。武藤の研究はその点に注目したが、田口における人種意識はあたかも厳然と存在するかのように見える。若き田口の文明史論に「人種」という言葉がなぜなかったのか、初めての海外の経験である南洋行と彼の人種認識との関係、彼の「内地雑居論」における人種意識の変化とその原因、そして彼の人種起源論と実証史学との関係などの問題は先行研究において従来問われてこなかったものである。

本稿では、前述の先行研究を踏まえながら、田口の人種論を時系列的に整理する。その際、田口の人種論が置かれた時代の風潮を意識しながら、その学問的基盤をも検討する。まず、若き田口の歴史学として名著である『日本開化小

¹⁵¹⁾ 前掲書小英二(一九九五年)、一七六頁。

¹⁵²⁾ 武藤秀太郎「田口卯吉の日本人種起源論——その変遷と中国認識——」『日本経済思想史研究』(第三号、二〇〇三年三月)、六〇頁。田口卯吉の人種論について、武藤秀太郎は優れる研究を残し、良い参考となる。本論の論旨と武藤との区別は主に以下の四点である。一、田口の人種論と文明史論との関係性が薄い。二、南洋行の実体験は田口の人種論の形成に決定的な影響を持つ。三、田口の「日本人アーリア人種論」は黄禍論による圧力のものである。四、田口の人種論は新興帝国日本のセルフ・アイデンティティと関わる。以上の四点は武藤の論文には論じなかったまたは十分に重視されなかったことである。また、先行研究大島清、御厨貴のまとめ方について、同論文、四八頁からヒントを頂いた。

史』と政治論である「内地雜居論」における人種意識を考察したい。その後、焦点を一八九〇年の田口の南洋行の経験にあてて、彼の殖民論と南進論との関わりを検討することで、南洋「土人」に対する差別意識と彼自身の人種意識を明らかにしていく。最後に、田口が日清戦争前後、朝鮮半島進出を背景に盛んになった「日鮮同祖論」から受けた影響を明らかにした上で、彼の人種起源論およびその変遷を考察する。

第一節 「人種」不在の文明史

(一) 文明史論から人物史論へ

一八五五年、田口卯吉は幕臣田口樞郎・町子の子として、江戸目白石徒士屋敷に生まれた¹⁵³。彼の曾祖父は江戸時代の有名な儒者佐藤一斎（一七七二～一八五九年）である。彼は幼少の頃より書物に親しむ環境にあつた。「余は十二歳の時に四書五経を読了り、御吟味とて聖堂にて試験を受け、其年より御徒見習勤めとて西丸御本丸に出勤し、又、銃隊に入りてゲベル銃の習業を為¹⁵⁴」¹⁵⁴といったように、少年期の田口の生活の主な内容は「四書五経」と「ゲベル銃」である。一般的に言えば、儒学者と武士は田口に用意された進路であるはずだったが、十四歳で迎えた明治維新は、徹底的に田口の生涯を変えた。明治初期、旧幕臣として、田口一家は混乱により横浜に移住することを余儀なくされた。伊藤彌彦が指摘するように、田口一家は貧困に追い込まれたが、それは「不平士族」に転化したとは意味しない。却って、この時初めて形骸化し鬱結していた社会制度からの自由を得えたといえよう。一八七三年に田口は大蔵省翻訳局の上等生徒として明治新政権に帰順し、「修学」を目指した野心的青年として

¹⁵³ 田口卯吉の生い立ちについて、前掲書田口親、一八～三二頁、前掲書河野有理、三三～三七頁、前掲書松野尾裕、一四～二〇頁、前掲書嘉治隆一、七八～八一頁、川崎勝「田口卯吉の「私利心」——最初の著作『自由交易日本経済論』と『日本開化小史』を中心に——」『社会と倫理』（第二五号、二〇一一年）、一六三～一六五頁などを参考。

¹⁵⁴ 田口卯吉「自述伝」『田口全集』第八卷、八四頁。

の田口像が浮き上がった¹⁵⁵⁾。そこでこそ、日本歴史学と経済学において画期的『日本開化小史』（一八八二年、以下『小史』と略する）と『自由交易・日本経済論』（一八七八年）の出版によって、弱冠二十三歳の田口は一挙に有名になっていった¹⁵⁶⁾。

『小史』は福沢諭吉の『文明論之概略』とともに、日本文明史論の最初の代表作であった。この史学史的意義について、多くの論説が残された¹⁵⁷⁾。また、田口の出世作として、彼自身の思想形成において、欠かせない手がかりともされている¹⁵⁸⁾。本稿が扱う人種論も、従来は彼の文明史論との関連で考えられてきた。例えば、田口の人種論について、田口親は「様々な「科学的」証拠も挙げているが、結局のところ、神話など根拠の乏しいさまさまの歴史的伝承と、若干の根拠のある言語研究・歴史研究の成果とを恣意的につなぎ合わせたもの」という印象は否定できない」と評した一方、「卯吉の思想の性格を理解する上で重要な手掛かり」として、「卯吉の史論、文明論全体との関係について考える必要」があると指摘する¹⁵⁹⁾。また、武藤秀太郎も田口親の論点を踏襲し、さ

¹⁵⁵⁾ 田口卯吉と幕府体制そしてそれを転覆した明治維新とは複雑な関係を持っている。伊藤彌彦「田口卯吉の政治思想・上」『同志社法学』（第二六卷第二号、一九七四年九月）、一三一頁。

¹⁵⁶⁾ 両書の完成背景と当時の評価について、前掲書田口親、七五～八九頁、前掲書松野尾裕、二九～六五頁、前掲論文川崎勝、一六三～一八六頁、前掲論文伊藤彌彦、一三二～一五八頁に詳しい。

¹⁵⁷⁾ 例えば小沢栄一『近代日本史学史の研究…一九世紀日本啓蒙史学の研究』（吉川弘文館、一九六八年）、一九〇～二四八頁、永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』『永原慶二著作選集』第九卷（吉川弘文館、二〇〇八年）、三二二～三三三頁、岩井忠熊「日本近代史学の形成」『岩波講座 日本歴史・二二 別巻一』（岩波書店、一九六三年）、七〇～七二頁、大久保利謙「明治史学成立の過程」『大久保利謙歴史著作集・七・日本近代史学の成立』（吉川弘文館、一九八八年）一〇九～一一三頁などがあげられる。

¹⁵⁸⁾ 前掲書田口親、七五～八一頁、前掲書河野有理、五九～八〇頁、前掲書松野尾裕、四五～六五頁、前掲論文川崎勝、一六三～一八六頁、前掲論文伊藤彌彦、一二三～一五八頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、四八～五〇頁、武藤秀太郎「田口卯吉における文明史論の転回と「中国の衝撃」——日本的オリエンタリズム再考——」『社会思想史研究』（第二八号、二〇〇四年）、一三五～一三六頁を参考。

¹⁵⁹⁾ 前掲書田口親、二九八～二九九頁。

らに「人種は田口思想全体を貫くキーコンセプト¹⁶³⁾」に至ったものであると考えた。

しかし、本稿が強調したいのは、『小史』を執筆する時期に、若き田口は「人種」という概念を十分に重視していなかったことである。例えば、『小史』全篇では、田口は「人種」という言葉ないし概念を用いなかった。それどころか、「神話」の色を帯びる人種論に対して、田口は『小史』の冒頭でそれを厳しく拒否した。

「神話」は「口より口に伝へて、益々轉訛したる言伝」であり、「時代に威力ありし宗家の事のみを言伝へたれば、夫の神聖の思を做さるゝ人の子孫は自ら貴種なりとの想像を起す」と、田口は「神話」を「轉訛」とし、それによる「貴種」が「想像」したものにすぎないと断じ、最初から排斥すべきだと主張していた¹⁶⁴⁾。歴史の道理が「人の天性に於てしかく導くもの」であり、「人は生まれながらにして神威を解するものにあらず、宗教を信ずるものにあらず」と、ここで田口の批判の矛先が国学者・神道論者に向かい、明らかに『記』『紀』神話伝説に基づいた歴史叙述に反対する¹⁶⁵⁾。

他方で、田口は江戸時代に正統史観とされている儒家史学が唱えた「勸善懲悪」と「大義名分」の歴史観をも批判した¹⁶⁶⁾。「一生を快樂ならしめんが為めならずや、各々自ら其利を計りて劳作し、害を他に及ぼさざれば其事已まのみ、素より国を立てば、何ぞ報国を要せん、素より君臣なし、何ぞ忠義を知らん、素より君統なし、何ぞ神権を用ひん、人々善を為さず、人々悪を為さず、善悪邪正の教長く跡を人間社会に絶たん、人間社会たるもの宜しく此の如くなるべし」と、田口は道徳という要因を歴史学から排斥し、西洋式の個人的自由

¹⁶³⁾ 文明史論以外、武藤秀太郎は田口卯吉の人種論が「殖民論や内地雑居論など多くの主張は、彼独自の人種観を基礎に展開される」と指摘する。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、四八頁。

¹⁶⁴⁾ 田口卯吉『日本開化小史』『田口全集』第二巻、一〇頁。

¹⁶⁵⁾ 同右、八頁。田口の国学、神道史観批判について、前掲書工藤雅樹、一五七頁、前掲書永原慶二、三三二頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一三五頁、前掲書小沢栄一、一九三頁。「神教政府」批判について、前掲書松野尾裕、五〇～五三頁を参考。

¹⁶⁶⁾ 儒家史学の歴史観について、前掲書河野有理、六四頁を参考。

主義と功利主義を強調する¹⁶⁴⁾。

以上のように、二つの既存の歴史観を斥けた上で、田口は一種斬新な歴史観を求めようとした。いわゆる「文明史論」である¹⁶⁵⁾。

田口によれば、文明史論とは「物質的即ち有形的現象」と「心理的即ち無形的現象」の変遷および相互作用を考察するものだという¹⁶⁶⁾。具体的にいえば、「凡そ人心の分野は、貨財を得るの難易と相俟て離れざるものならん。貨財に富みて人心野なるの地なく、人心文にして貨財乏きの国なし¹⁶⁷⁾」、「貨財の有様進歩するや、人心の内部同時に進歩す、人心の内部進まずして貨財の有様独り進むを得ず、貨財の有様退かずして人心独り退くを得ず¹⁶⁸⁾」。つまり、田口は歴史の開化過程が、経済的発達と不可離の関係にあると考えたのである。よって、田口の文明史論を素朴な唯物論的経済決定論として捉えた見方もある¹⁶⁹⁾。こうした経済的な要因を歴史学に積極的に導入したことに伴い、田口は「人

¹⁶⁴⁾ 前掲書田口卯吉『日本開化小史』五四頁。『小史』における自由主義と功利主義について、前掲書小沢栄一、二〇三―二〇四頁を参考。

¹⁶⁵⁾ 前掲書田口親、七九頁、前掲書大久保利謙、一〇九―一一三頁、前掲書永原慶二、三二二―三二三頁。

¹⁶⁶⁾ 田口卯吉によれば、「物質的の現象が斯く進歩したるが故に、心理的の現象が斯く進歩したり、心理的の現象が斯く進歩したり、心理的の現象が斯く退歩したるが故に、物質的の現象が斯く退歩したり」。田口卯吉「自序」『史海』『田口全集』第一巻、六六―六七頁。ここで注意してほしいのは、田口は「史癖は佳癖」という講演を『史海』の「自序」として収録したということである。「史癖は佳癖」は一八九一年六月に史学会で行われた講演である。その機縁で文科大学史誌編纂掛の重野安繹・久米邦武と親交を深めた。前掲書田口親、一七六頁、前掲書小沢栄一、五〇六―五〇七頁。「史癖は佳癖」をめぐる議論、前掲書河野有理、一二一―一二二頁、前掲論文武藤秀太郎(二〇〇三年)、四八頁、前掲書小沢栄一、二〇七―二〇八頁を参考。

¹⁶⁷⁾ 前掲書田口卯吉『日本開化小史』、八―九頁。

¹⁶⁸⁾ 同右、八三頁。

¹⁶⁹⁾ それについて、先行研究は大体強調していた。例えば、前掲書小沢栄一、一九三、二〇四―二〇五頁、前掲論文武藤秀太郎(二〇〇三年)、四八―四九頁、前掲書松野尾裕、四九頁。また、『日本開化小史』の歴史観を唯物史観としたのは、前掲書小沢栄一、二〇四―二〇六頁、前掲論文伊藤彌彦、一三九頁などが挙げられる。より系統的な説明として、家永三郎「田口の社会学」『近代精神とその限界』(角川選書、一九五〇年)、二〇七―二三四頁を参考。

種」より、粗雑的な意味で言えば「階級・階層」のほうを重視しているように思われる。例えば、日本史の起点を神武天皇に求める田口は、「天皇東征の頃には、土民に猶ほ穴居巢棲のものありしかど、代々の天皇皆な耕作養蚕の道を好み給ひて、頻りに之を土民に伝へ給ひしかば、國中一般農民となれり¹⁶⁰。」と述べている。ここに挙げられた「土民」の身分が変わりうるという点からみれば、「土民」は一つの「階級・階層」のみを意味するのである。また、田口は歴史全体の進歩を「貴族的の開化」から「平民的の開化」への転換として捉えたことも、同じ「階級・階層」という視点に基づいている¹⁷⁰。そのほか、『小史』にしばしば「支那人民」または「三韓人民」と書いたように、田口は日本と「支那」、「三韓」との人種的差異を強調しなかったようにも見える。

田口の歴史学における「人種」の本格的な適用は、一八九〇年に南洋行から帰国、歴史雑誌『史海』の創刊を待たなければならぬ¹⁷²。例えば、同じ日本史の起点に対する記述であるものの、『史海』に載せた「上代」（一八九二年七月）に、田口は冒頭で「我日本人種の歴史は彼が勇敢敏警にして能く為すあることを証せり」と記しており、「此の如き人種は如何にして此国に生産したりしか」という設問から、「其血脈の源流蓋し三種あり、曰く蝦夷人種、曰く天孫人種、曰く外国人種是なり」とし、さらに「我邦太古の歴史は実に天降人

¹⁶⁰ 前掲書田口卯吉『日本開化小史』、一一頁。

¹⁷¹ 田口卯吉によれば「国の開化に二種の区別あり」、「古来東洋諸国と雖も一時隆盛に赴き」、「其文化の燦爛たるや、実に人目を驚かすに足るものなり。然れども是れ皆貴族の導きし所なり」とする一方、「歐洲現時の開化は之に異なり、其開化は自由通商の発する所なり、即ち平民の発する所なり」と指摘する。田口卯吉「日本開化之性質」『田口全集』第二巻、一一八―一二〇頁。「平民の開化」について、武藤は「東西思想の様々な影響の下、構築された社会観」の反映として論じた。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五〇頁。また、田口親は「平民が社会主人公になるという近代西欧の政治史の中に見い出そうとし」、「近代市民社会に至る西欧史を描いたギゾーなどの文明史から学んだものに他ならない」と評する。前掲書田口親、八〇頁。

¹⁷² 武藤の論に『小史』でもちいられなかった「日本人種」という概念が、『史海』に至って全面的に押し出されている」と書いた。そしてその理由について、武藤は「久米邦武など東京帝国大学派史学からの影響」があると指摘するが、田口と久米邦武をはじめとする東京帝国大学国史科との具体的な関係を論じなかった。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五六頁。

種の歴史なり」と強調した。「上代」において田口は、『小史』における「土人」を「蝦夷人種」と書き換え、彼らを「蠢愚にして歴史」のない人種としながら、「天降人種其優等人種たることを疑はざる」と述べていた¹⁷³。「上代」に記された「人種」は全篇にわたって鍵となる概念であった。

また、『史海』に載せた「坂上田村麿」（一八九二年六月）では、田口は古代に「外国人種」が日本に貢献したことがあったことを論じていた。「武神」と呼ばれている坂上田村麿は「支那渡来人」とされているが、彼は「蝦夷人種」を鎮圧し、日本の勢力を東北地方までに拡大した。田口はその功績を引用し、日本人に同化された「外国人種」は、日本に貢献できると主張する。「坂上田村麿の系伝を記する事は、少なくとも現地内地雑居に反対する所の論者をして顰縮せしむるの価値あるべし」というように、田口の論旨は日本人種の純潔性を強調する反内地雑居論者に反対するのである¹⁷⁴。

多くの論者が指摘するとおり、『史海』によって、田口の歴史学は大きな転換を迎えた¹⁷⁵。いわゆる「文明史論」から「人物史論」への転換であった。それについて、田口自身は一八九三年の講演「史癖は佳癖」で説明をしている。ここで田口は「完全なる歴史の体裁」は「切干体」と「輪截体」があるとする。「切干体」とは、「物質的即ち有形的現象」と「心理的即ち無形的現象」との相互作用として描く、つまり文明史論の論法である。「輪截体」とは、「一人物を中心にして、此を相手にして政治なり文学なり、其他万般の事情を述べ、つまり「人物史論」の論法である¹⁷⁶。田口は、「切干体」をやめ、「輪截体」が「我邦に流行せむことを望む」と述べる¹⁷⁷。また、数ヶ月後『早稲田文学』

¹⁷³ 田口卯吉「上代」『田口全集』第一巻、三八六～三八七頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五六頁。前掲書工藤雅樹、一五七～一五八頁。

¹⁷⁴ 田口卯吉「坂上田村麿」『田口全集』第一巻、二二一頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五六頁。前掲書小熊英二（一九九五年）、四六～四七頁。

¹⁷⁵ 塚谷晃弘「田口卯吉」永原慶二、鹿野政直編『日本の歴史家』（日本評論社、一九七六年）、二四～二五頁。前掲書河野有理二〇～二四頁。前掲書小沢栄一、五〇五～五〇八頁。前掲論文岩井忠熊、七一～七二頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五六頁。

¹⁷⁶ 前掲論文田口卯吉、「史癖は佳癖」『史海』、六六～六八頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五六頁。

¹⁷⁷ 前掲論文田口卯吉、「史癖は佳癖」『史海』、六八頁。前掲書小沢栄一、五〇七頁。

創刊号への寄稿である「早稲田文学の史論を読む」では、田口はさらに「国史略及び十八史略に劣る」と、文明史派の余弊を批判し、「輪切体を以て局所の草葉を掃ふ」と述べる¹⁷⁸⁾。

このような「切干体」から「輪截体」への転換について、「啓蒙史学の変質¹⁷⁹⁾」や「史観の保守的な転回¹⁸⁰⁾」などと指摘されることがあるが、ここで強調したいのは、文明史論は田口の生涯に貫かれたものではなかったことである。それどころか、一八九五年の稿「歴史は科学に非らず」を見るならば、田口はさらに歴史と科学との関係を否定し、歴史学の普遍性を認めず、「唯だ事実を書現して何処の国にはどう云ふ事実があつた、と斯う云ふ丈けのもので宜しい」と述べる¹⁸¹⁾。従来「社会普通の理を推して其興廃存亡の跡を解説」し、「之を他の諸国に徴し、人間社会普通の理なり」というような文明史論が主張する普遍性は、この時の田口からは完全に失われていた¹⁸²⁾。そしてこの時期こそ、田口は「日本人匈奴人種起源説」を唱えはじめていたのである。さらに数年後、彼は前者を改め「日本人アリア人種起源説」を唱え、日本社会に大きな波紋を呼んだ。田口が人種論を積極的に論じた時期は、すでに文明史論と無縁になった時期であつた。

¹⁷⁸⁾ 田口卯吉「早稲田文学の史論を読む」『田口全集』第一卷、二二～二四頁。前掲書河野有理一二二頁、前掲書小沢栄一、五〇七頁。

¹⁷⁹⁾ 小沢栄一は、帝国大学アカデミズム歴史家の国史科の成立を、それまでの福沢諭吉をはじめとする「啓蒙史学の変質」とし、その影響を受けた田口卯吉も文明史論をやめ、「実証史学」への傾斜になったと指摘する。前掲書小沢栄一、第五章『啓蒙史学の変質』、四三〇～四五二頁、五〇五～五一六を参考。

¹⁸⁰⁾ 前掲論文塚谷晃弘、二五頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五六頁。

¹⁸¹⁾ 田口卯吉「歴史は科学に非らず」『田口全集』第一卷、一五頁。前掲書河野有理、一二二～一二三頁、前掲論文岩井忠熊、七二頁、前掲書永原慶二、三三三頁。

¹⁸²⁾ 田口卯吉「再び肅堂居士に答ふ」『田口全集』第三卷、二二二頁。河野有理は、「開化史」の理解が、田口の「学知全体に対する見通しとも関係していた」と考えた。氏によれば、一八八五年の頃「経済学の定義を巡る論争」の中で、田口は「歴史」と「社会学」の類似性を主張していた。田口は「社会普通の理を推して其興廃存亡の跡を解説」するのは「歴史（開化史）」であり、「その興廃存亡の理一同に行はゞを見て、之を他の諸国に徴し、人間社会普通の理なりとして論ず」るのが「社会学」だとする。両者の区別は結局、「書体」の違いに過ぎない」という。前掲書河野有理、一二二頁。

(一) 「内地雑居論」

「人種」という言葉は初期の文明史論に現れなかったとはいえ、田口は「内地雑居論」に関する一連の政論では繰り返し使っていた¹⁸⁰。著名な自由主義経済論者として、田口は早くから内地開放・居留地撤廃を唱えた¹⁸¹。

一八七九年の論説「内地雑居論」に、田口は居留地制度が行われる限り、「内外人民の葛藤決して断絶するの期なき」とした上で、「人類の相和し相親むものは其利害を同ふするの一点にあり、決して人種の同一なるにあらざるなり。又決して貧富賢愚の差なきに因るにあらざるなり。若し其れ人種の同一なるに存すと云はゞ日本人民と雖ども決して同一の人種同一の血統より成る者にあらず。古代にありては三韓支那の帰化あり、近代にありては和蘭波爾士瓦の遺

¹⁸⁰ 田口卯吉の歴史学に関する著述には、人種という言葉はなかったが、彼の『自由交易日本経済論』には、人種を世界規模的貿易の単位として扱ったように見える。当該書によれば、「夫れ現に亜墨利加印度人種は白哲人種増殖の勢に圧倒せられ、北海道アイノ人種は日本人種増殖の勢に圧倒せられ、漸々跡を地上に絶たんとするの勢あるを見るべし。故に強者の弱者を圧倒するは有機世界の通勢にして禽獣草木に至る迄悉く然らざるなし。見よ彼の牛羊は虎狼に死し、印度人は白人に死するを。故に余は慨然として世運の此の如きを嘆じ遍く同種類をして地上に蕃殖せしめんと欲す其蕃殖せしむるを欲する者を以て余は義務と認むるなり。」田口卯吉『自由交易日本経済論』『田口全集』第三卷、一八頁。それによって、武藤秀太郎は田口卯吉が社会進化論に影響されたと考えた。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、四九頁。

一方、ここで田口が挙げられた「人種」の概念については、明治初期に混乱する状況を反映し、まだ英語の「Race」という語義に定着してなかったことも考えられる。その点をめぐって、與那覇潤の研究は良い参考となる。氏によれば、明治初期の日本語における「人種」という言葉は、「民族」、「地域住民」、「階級」、「階層」などを包括した一般的な語彙としてのみであるという。「人種」の「Race」化したの、坪井正五郎が一八八四年の最初の東京人類学会の成立を待たなければならぬものである。前掲論文與那覇潤、八六頁。

¹⁸¹ 田口卯吉と内地雑居論について参考となる先行研究として、前掲書小熊英二（一九九五年）の第二章「内地雑居論」、三三〜四八頁、前掲書河野有理、一七二〜一七四頁、前掲書田口親、一五八〜一五九頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五二〜五三、五六頁、小峰和夫「田口卯吉の描いた開放経済国家日本の進路」杉原四郎、岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』（日本経済評論社、一九九五年）、二〇四〜二〇九頁が挙げられる。

子あり¹⁸⁵⁾」と考える。

ここで二つのことに注目していきたい。一つは、田口は経済学の視点から、人間の「相和相親」が「人種の同一」や「貧富賢愚の差」などでなく、万事「其利害を同ふするの一点」に帰着することである。もう一つは、田口は歴史学の視点から、古代の「三韓支那」あるいは幕府時代の「和蘭波爾土瓦」（オランダとポルトガル）を例としてあげ、日本単一人種説を否定し、外国人の受け入れが国に有益になることを論じたことである。

すでに指摘されているが、この二点は田口の社会の統合観をよく表している¹⁸⁶⁾。ここで田口は「居留地の制」を徳川武士における「藩邸を分割の制」と合わせて考えたのである。「農商」を抑圧した武士は各自の「藩邸の中に棲居」し、互いに「誇視」し「鬭争」していた。しかし、「廃藩置県」によって雑居になれば、「県名方言大に相異なるものと雖も終に相親睦」するようになった。それは「利害同一」のためであった。つまり田口は、徳川時代の「階級」を内地雑居論の「人種」とし、「利害」を重視する視点を一貫させていた¹⁸⁷⁾。

また、一八八四年に、西洋人とともに、「支那人」も廉価労働者としての日本への流入問題が一時話題となっていた。「支那人」の「賃銀低廉なるを以て我国の労役者の為に厭倒せられて職を失」うという憂いに対して、田口は「一理なきに非ず」といいながら、自由主義経済論の視点から、「賃銀低廉」の「支那労役者」を排斥すると、「利息低廉なる外国資本を移入する」ことの妨げとなり、むしろ「我国の財主に不利なり」に至るため、田口は「支那労役者」の流入を歓迎する。ここで田口は、西洋人であれ「支那人」であれ、「人種」とわず、利益だけを注目する自由主義経済学者の考えを一貫させていた¹⁸⁸⁾。

一八八七年の論説「内地雑居の杞憂」において、田口は再び「同胞の内には三韓支那は勿論其他の人種の子孫」も含まれていると強調し、彼らは「相親睦」

¹⁸⁵⁾ 田口卯吉「内地雑居論」『田口全集』第五巻、八〇頁。前掲書小熊英二（一九九五年）、三六～三七頁。

¹⁸⁶⁾ 前掲書河野有理、一七三～一七四頁、前掲書小熊英二（一九九五年）、三五～三六頁。

¹⁸⁷⁾ 前掲論文田口卯吉、「内地雑居論」、八二～八三頁、前掲書河野有理、一七三～一七四頁。

¹⁸⁸⁾ 田口卯吉「内地雑居を論ずる・第二」『東京経済雑誌』第二〇五号、（一八八四年三月十五日）、三〇七～三〇八頁。また、前掲書小熊英二（一九九五年）、三七頁。

している「忠愛なる同胞」であるので、「区々たる血脈の異同」を論じるべきではないと考えた¹⁸⁹⁾。

以上からわかるように、一八八〇年代の内地雑居論争において、田口は早くから人間の交際は「利害を同ふするの一点にあり、決して人種の同一」ではないという論点を出し、自由主義経済論の立場を徹底し、内地雑居を支持した。従って、利益を優先するという視点から、田口は特に人種問題を論じなかった。しかし、一八九〇年の南洋行以後、「天降人種」、「天孫人種」、「蝦夷人種」などの言葉に象徴されるように、田口の文献における人種概念は優劣・貴賤の意味を帯び始めてきた。それでは、「南洋」という地域は、田口に対してどういう意味を持っていたのであろうか。

第二節 人種論の予備…海外殖民論と南洋行

(一) 海外殖民論と南進論

一八九〇年五月から十二月までの約七カ月間にわたった田口卯吉の南洋行は、個人的な理由と時代的な背景の二つの方面から考えられる¹⁹⁰⁾。

個人的な理由とは、当時東京府知事高崎五六（一八三六～一八九六年）から委託を受けていた東京府士族授産金問題であった。そもそも士族授産金は明治維新後、秩禄処分などで困窮した士族に対する救済策の一つであったが、東京府は、その士族授産金を使って小笠原島水産事業を企図していた¹⁹¹⁾。そのため、

¹⁸⁹⁾ 田口卯吉「内地雑居の杞憂」『東京経済雑誌』第四七八号、（一八八七年七月一三日）、三九頁。また、前掲書小熊英二（一九九五年）、三八頁。

¹⁹⁰⁾ 田口の南洋行について参考となる先行研究は、森久男「田口卯吉の植民論」小島麗逸編『日本帝国主義と東アジア』（アジア経済研究所、一九七九年）、二〇～二五頁、矢野暢『「南進」の系譜…日本の南洋史観』（千倉書房、二〇〇九年）、一八九～一九二頁、前掲書田口親、一六三～一七五頁、前掲書河野有理、一〇～一二頁、二九～三三、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五四～五六頁などが挙げられる。

¹⁹¹⁾ 『世界大百科事典』第二卷（平凡社、二〇〇七年改訂）、三二四頁。また、植民思想の転換と士族授産金問題との関係について、前掲書矢野暢、一七九～一八〇頁を参考。

知事高崎は田口に南洋調査を依頼した。すでに南洋に興味を持っていた田口は、それをきっかけに、授産金を引き受け、南洋に向かった¹⁹²⁰。

時代的な背景とは、明治二十年代以降、日本の移住思想は、従来の北海道を中心とする国内移住論から海外移住論へと転換していた¹⁹³⁰。その要因は、主に日本の人口過剰問題であるが、この時期においての積極的な海外殖民の時代精神の影響もある¹⁹⁴⁰。こうした歴史的転換期において、田口の主張はむしろ好例としてあげられる¹⁹⁵⁰。

一八八一年、北海道開拓使官有物払下げ事件をきっかけに、田口は六回にわたり「北海道開拓論」を連載し、「北海道現時の急務は物産を蕃殖し人民を移住せしむる」と、早くから北海道殖民計画を唱えていた¹⁹⁶⁰。そして、数年後、経済不況のため、「人口既に内地に充実して、賃銀下落を極め之を外国に洩すにあらざれば人々相呑噬せざるべからざる」という危機感を抱き、田口はまた七回にわたり「殖民制」（一八八三年）を起草し、海外殖民計画の必要性を訴えた。「海軍を拡張せんには邦人の殖民を南洋、北米及び亜細亞大陸に建てよう」と、田口は海軍の拡張と殖民の計画とともに施行する必要があると考え、「南洋」を最優先の目標としていた¹⁹⁷⁰。

もちろん、それは十九世紀末期において、特に志賀重昂（一八六三～一九二七年）の『南洋時事』（一八七八年）の刊行後の「南進論」ブームと関わり、

¹⁹² 田口の南洋行の出発前の言動について、前掲書河野有理、三〇～三三頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五四～五五頁、前掲書田口親、一六三～一六八頁、前掲書矢野暢、一九〇～一九一頁に詳しく。

¹⁹³ 丹野勲「明治日本の海外移民、移住・殖民政策と南進論・南洋、南方アジアを中心として」『国際経営フォーラム』（第二六号、二〇一五年十二月）、八六頁、前掲書矢野暢、五二頁、前掲論文森久男、二〇頁。

¹⁹⁴ 前掲論文丹野勲、八六頁。

¹⁹⁵ 前掲書矢野暢、五二頁。

¹⁹⁶ 田口卯吉「北海道開拓論・第五」『田口全集』第四卷、四七頁。田口卯吉の北海道開拓政策への批判について、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五一頁、前掲論文森久男、一一～一八頁に詳しい。また、田口卯吉は北海道視察にもいった。前掲書田口親、一八六～一八八頁を参考。

¹⁹⁷ 田口卯吉「殖民制」『田口全集』第四卷、九七頁。

時代の思潮の影響が指摘される¹⁹⁸。この時期の「南進論」とは、主に志賀重昂、菅沼貞風（一八六五～一八八九年）、福本日南（一八五七～一九二一年）などの民間の論客が提唱し、同時期において朝鮮半島と中国大陸の政治情勢に対する強い関心と膨張主義的な姿勢を示す「北進論」者と対抗するために打ち出されたものである。武力進出を唱える「北進論」と異なり、このような「南進論」の特徴は、商業的利益を重視している¹⁹⁹。田口の著名な政論「南洋経略論」（一八九〇年）において、「軍艦」ではなく、「商業艦隊」を主張するのは、まさにこのような視点に従ったためである²⁰⁰。

田口の南洋に関する諸論説に、「南洋経略論」は最も田口の南洋思想を反映していたともいえる。その冒頭で田口は「我日本人種の孤島の内に閉居したるや久し²⁰¹」と、海外殖民の緊迫感を示した一方、「我日本人種をして太平洋の大王たらしむるの端を開く」という期待をも抱いていた²⁰²。ここで田口の「内地雑居論」に利益による人種間の平等な関係が、南洋の殖民論では人種間の競争関係へと転換していた。田口によれば、「南洋諸島は名称上に於ては大約既に歐洲諸国の属国」であるが、「其実に至りては毫も其人民の移住するものなくして土民は実に其酋長の支配を受くるものなり」。日本人は土地の購入、殖民の勃興、通商貿易などは実は自由であり、制限はない。田口が強調したのは、「欧州諸国」ではなく、南洋の「土民」と競争することであった²⁰³。

明治期の南進論の名篇として、田口の「南洋経略論」は従来重視されてきた²⁰⁴。しかし、本稿が強調したいのは、「南洋経略論」は田口の南洋行前の政論

¹⁹⁸ ハ)で河野有理は田口の南洋行の決意は、志賀重昂の南進論ブームと関わると考えた。前掲書河野有理、三二頁。その時期、志賀重昂の話題となった作品は『南洋時事』『志賀重昂田口全集』第三卷（志賀重昂田口全集刊行会、一九二七年）である。

¹⁹⁹ 前掲書河野有理、三二頁、前掲書矢野暢、四三～四四頁。

²⁰⁰ 前掲書河野有理、三二頁、田口卯吉「南洋経略論」『田口全集』第四卷、三七三頁。

²⁰¹ 前掲論文田口卯吉、「南洋経略論」、三七二頁。

²⁰² 田口卯吉「別に望み意中を表す」『田口全集』第八卷、三〇一頁。

²⁰³ 前掲論文田口卯吉、「南洋経略論」、三七三頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五四～五五頁。

²⁰⁴ 前掲書矢野暢、一七七～一七八頁、前掲論文森久男、一三三頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五四～五五頁、前掲書河野有理、三二頁、前掲論文丹野勲、九一～九五頁。

だけであり、時代の影響があつた一方、田口自身の想像も多く含まれていたことである。その意味では、田口の南洋行の実体験の記録としての「南洋通信」（全四篇）は一層重視されるべきである。つぎに、田口の「南洋通信」の記述を通して、その南洋経験を説明していく。

(二) 「南洋通信」に見られる「南洋」

一八九〇年五月一日、田口は帆船天祐丸に乗り込み、横浜から出航、小笠原島、グアム、パラオ、ポネビなどの南洋群島を巡行した²⁰⁵。この間、田口は南洋の見聞を通信の形で国内の新聞紙に載せて、読者に南洋の実情を紹介しようとした。

例えば、南洋行以前より小笠原島が「餘程有利の地なる様」であると思つていた田口は、「実際は大に之に異な」ることがわかつた。当地は「瘠地」だけではなく、且つ「坂多く平地甚だ稀なれ」である。気候の理由のため、内地にない商品、例えば「パイナップル」、「バナナ」、「マニラ」、「タコノ木」などはあるが、田口は「決して望みあるとを覚えず」と嘆いている²⁰⁶。

しかし経済的にあまり有利とはいえないと言いつつも、小笠原島が「政事上に於ても決して放置すべからざる要港」だと田口は考えていた。「米国の漁船は年々此地に碇泊し」、加えて、数日前に「大乱暴を働きたる様子」があり、「海軍省の如きは殊に注意」すべきだと田口は呼びかけている²⁰⁷。実は、該当期に「南洋」を帝国日本の「自由貿易」の舞台とした田口は、小笠原群島を南進論の拠点とし、経済的面にも政治的面にも大きな意味があると考えた²⁰⁸。帰国後、小笠原島を南洋艦隊の基地とする田口の提唱は、それと緊密に係る

²⁰⁵ 田口卯吉の南洋出航について、前掲書田口親、一六三～一七五頁、前掲書河野有理、一〇～一一、二九～三三頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五四～五六頁、前掲書矢野暢、一八九～一九二頁を参考。

²⁰⁶ 田口卯吉「小笠原島より」『田口全集』第八卷、五二〇～五二二頁。

²⁰⁷ 同右、五二二頁。

²⁰⁸ 田口卯吉の自由貿易思想と南進論について、石原俊『近代日本と小笠原諸島…移動民の島々と帝国』（平凡社、二〇〇七年）、三一六～三二八頁を参考。

と考えられる²⁰⁹。

また、田口は当地の島民の生活についての記録を残した。田口によれば、彼らは米国の帰化人で「カナカ人種」といい、「皆な徒跣にて土上を歩み憐むべき」生活をし、「カノー船にて正覚坊を取り、掌大の玉蜀黍を植え」ることによつて生計を立てているという。そして田口は「文明人の末にも此の如きものありやと怪まるゝ程なり」と感嘆している²¹⁰。

初めて南洋島民に出会った田口は、島民の「徒跣」の生活習慣、あるいは「掌大の玉蜀黍」という生計に対して、憐憫の情を示したものの、彼自身が「文明人」であるという認識も確認している。ここで田口は、南洋島民を「文明人の末」という微妙な言い方を選んだのは、南洋という場所には、当地の「土人」だけではなく、殖民地で働いている西洋人もいたのである。こうした文明優劣の序列のなかに、田口は「土人」、西洋人と彼自身を位置づけさせた。

その後、グアム島上陸の際に、田口は「健康診断書」問題をめぐつて、「文明国」である「西班牙」と交渉したが、困難を極めた。

もともと「健康診断書」は「横浜なる西班牙領事」に申込み、横浜地方に流行病がない、同船乗組員に病人がいないと証明するともらえるものであるが、田口はそれを知らなかった。殖民政府との交渉を行うために、田口は「海員雇用備入証書」、「海外旅券」、「船免状」などを提示していても、「上陸禁止」という回答を受け取った。数日後、ようやく軍医が来て、田口と同行した船員の健康を証明し、船中の貨物が検査された後、漸く田口の上陸許可は認められた²¹¹。

当島の印象について、田口は以下のように述べている。

「西班牙の此島を得し後「カソリック」教は土人に興ふるに名を以てせり。而して平生称呼する所は皆な此名なれば土人は凡て西洋人の如き名なり。姓名すら此の如し、故に家屋の建築法を初め、衣服飲

²⁰⁹ 田口卯吉「南北太平洋艦隊を組織すべし」『東京経済雑誌』第五八九号（一八九一年九月

一二日）、三三八頁。

²¹⁰ 前掲論文田口卯吉「小笠原島より」、五二二頁。

²¹¹ 田口卯吉「グラム島アプラ港より」『田口全集』第八卷、五二二―五二三頁。

食其他万般の事に至るまで土人と西班牙人の間に殆ど区別なし。唯だ貧富の差あるのみ。故に土人と西班牙人との間には折合極めて宜し

212」。

田口にとって、最も驚嘆するのは、おそらく以下の二つのことである。まずは「土人」の「建築法」、「衣服飲食」、「姓名」などは「西班牙人の間に殆ど区別なし」ということ、いわば「西洋化」、「文明化」の程度である。また、「土人」と西班牙人は貧富の差がありながら、「折合極めて宜し」ということ、つまり良好な社会関係を築いているということである。

もともと、南洋行の前の論説「殖民制」には、田口はスペインの海外殖民を失敗例として捉えた。田口によれば、「専制にして且つ中央集権の主義」のスペインは、南米の領土拡張には、金銀を開拓し、鉱業だけを重視し、産物を自国だけに輸送し、殖民地と他国との通商を禁じた。それは結局、衰廃をもたらした。それと反対に、「自由にして且つ地方分権の精神」を持つイギリスは、殖民地に自治権を与え、政治と宗教に干渉しないと決め、繁栄を促した。田口はイギリス式の殖民地運営を評価し、スペイン式には反対していた²¹³。

ところが、田口は自ら南洋のスペインの殖民地グアム島を見たら、「西班牙の制御巧みなるは感服すべきなり²¹⁴」と言えざるを得なかった。つまり田口における既存の知識と実際の経験との相違が、「南洋」という場を通して微妙に見られたと言えるだろう。

スペインの有力な統治下のグアム島の実情に比べ、当地で酋長の統治にあったパラヲ島に対する田口の記載は対照的であった。田口によれば、当島の「土人は皆な裸体にして」、「男は腰部に犢鼻褌を着するのみ」だという。その「裸体」は経済的な理由によるものではなく、当島の極めて自然な習慣であった。また、島民は嗜酒し、「終日之を飲」み、踊りを好み、「共に三十五六人程の

212 同右、五二四頁。

213 前掲論文田口卯吉、「殖民制・第四」、一〇二〜一〇六頁。ここで田口卯吉の植民地を類型化した指摘がある。つまり、「イギリス型」と「スペイン型」である。前掲論文森久男、九頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五一〜五二頁。

214 前掲論文田口卯吉、「GRAM島アプラ港より」、五二四頁。

男皆坐して歌を唄ひ手を動かす。」田口によれば、「土人の此踊を嗜むこと驚くべし。徹宵厭くを知らず」という²¹⁵。

当島の習慣、風俗、秩序を細かく記載したが、田口の着目は別のところにあった。「西班牙商に至りては一人も見当たらざる」と確認した上で、田口は筆鋒を転じ、「此島の土人は皆な懶惰にして豊饒なる土地も耕作を施さず全く天然に委す、惜しむべきなり。若し日本人を此諸島に移さば其進歩知るべし」、「必ず開発の功を全うすべし」と、ここで田口の念頭にあたったのは、スペイン人ではなく、「懶惰」、「野蛮」な「土人」と競争し、植民地を獲得することである²¹⁶。

こうした期待を抱きながら、田口はまたポネビ・ゼコイト島に向かった。しかし、当島の植民地政府の「土木官吏」は「強迫的な手段を以て」「土人」を酷使し、ついに「土人」は「土木官吏及び兵士を襲殺し反旗を翻せり」という局面に至った。そして「土人」は百人死亡し、スペイン人は死者三人、負傷者十八人だという。激戦中、「西班牙政府は我が船用の銃器弾薬は勿論日本刀の類に至るまで之を自国の軍艦に取り上げ置き、且つ我船の他港に行くを許さざるなり」と、田口は行動の自由をも失った。そのため、「直ちに帰朝する心算なり」と、田口の半年の南洋行は慌ただしく終わった²¹⁷。

後に田口自身が「自奮投身蛮民之中、以試貿易、其間失望落胆、仰天嘆息者、不一而足、而歡喜踊躍、拍手呼快者、亦頗多矣²¹⁸」と述懐するように、南洋という場所には、「失望」と「歡喜」が併存していた。いずれにせよ、当時「南洋通商の利」をよく説いたが、「其実践を欠く」という点から見れば、田口の半年にわたった南洋巡行、そして後に南洋諸島の面積、人口、物産などに詳しく記載された『南洋貿易事務報告』（一八九一年）を出版したことは、明治期における南洋経験の空白を埋めたともいえる²¹⁹。そして田口の南洋への関心は

²¹⁵ 田口卯吉「パラヲ島より」『田口全集』第八卷、五二五～五二六頁。

²¹⁶ 同右、五一九頁。

²¹⁷ 田口卯吉「ポネビ・ゼコイト湾より」『田口全集』第八卷、五三〇～五三二頁。

²¹⁸ 田口卯吉『南洋巡航記』抄』『田口全集』第八卷、五三二頁。

²¹⁹ 田口卯吉「南洋貿易事務報告」『田口全集』第四卷、三七五～三七七頁。前掲書田口親、一七〇頁。

ただ知的流行にとどまるものではなく、自ら南島商会を組織し、殖民協会を設立し、南洋殖民を本格的に進めようとした²²⁰。

そもそも、当時日本ではやっていた海外移住は、主にハワイを目的地としていた²²¹。しかし、そこでの日本人は皆「洋人の使役に従ひ、其土地を耕やし、其家事を理するものなり、独立独行のものに至りては実に少し」、「我人種の品味を高め、我国力の増殖を図り、我海運の進歩を²²²」求めるため、田口は南洋殖民を唱えている。南洋の実体験によって、南洋「土人」の野蛮・落後と、殖民地洋人の文明・先進というコントラストは田口に強い印象を残した。後述するように、田口が再び内地雑居論争や日本人種の起源などの問題を論じる際には、南洋行の影響が見られると考えられる。

第三節 日本人種起源論とその展開

(一) 日清戦争へ

田口は帰国後、南洋殖民に大きな力を注いでいたが、人々の関心は朝鮮半島問題をめぐる日清戦争の緊張により、再び「北」に戻った。そして、明治二十年代に沸いた南洋熱も、またたく間に冷却してしまった²²³。田口もまた有力なジャーナリストとして、日本と中国およびその属国朝鮮との関係を論説の中心にあてるようになった²²⁴。

急遽決まった、また期間においても短い南洋の旅とは異なり、政治的、軍事

²²⁰ 前掲書河野有理、三三頁。そして具体的な展開について、前掲書田口親、一六五―一七三頁に詳しい。

²²¹ おそらく、それは当時の海外出稼ぎを目的とする官約移民と関わっている。前掲論文森久男、二六頁。

²²² 前掲論文田口卯吉、「別に望み意中を表す」、三〇一頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五四―五五頁。

²²³ 前掲書矢野暢、五三頁。

²²⁴ 日清戦争前後の田口卯吉の言動について、本論には前掲書田口親、二〇七―二一二頁、前掲論文小峰和夫、二二九―二三〇頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）五八―五九頁、同（二〇〇四年）、一三九―一四六頁、前掲論文森久男、三七―三九頁によるものが多い。

的に、田口は以前より中国を大きな仮想敵として捉えていた。『日本開化小史』刊行後まもなく、田口は『支那開化小史』（一八八八年）を執筆した。同じ文明史を論じた系列の作品であっても、これら二冊の差異は大きい²²⁵。「進歩の意識」、「合理的因果関係」、「文明・人民への視野の拡大²²⁶」などの歴史叙述に重点が置かれた絢爛多彩な『日本開化小史』とは反対に、『支那開化小史』では以下のような結論が記述されている。

「周より以前数千年間は封建乱離の禍害に埋没したる時代なり。秦より以後二千余年は専制政治の腐敗に沈淪したる時代なり。支那国の人民は未だ嘗て此弊害を豫防するの制度を発見するに至らざりき、封建乱離の禍害耐ふべからざるに及びて之を一掃するものは専制政治是なり、専制政治の腐敗耐ふべからざるに及びて之を一掃するものは叛乱分裂是なり、支那国人民の歴史は此数事を反復したるに過ぎず²²⁷」。

以上のように、田口は「支那国の人民は常に政治上の弊害に苦しめる」と²²⁸だけを強調していた。

同時代人は既に『支那開化小史』が、「本書専論治乱之大綱、不記瑣屑之事、所異于尋常支那史、実在于此。然所記特在政治上、而不涉一般社会之事、称曰開化小史、恐名過其实、改為政綱小史、如何²²⁹」と風刺した。しかも『支那開化小史』を田口の「開化史の終焉」として捉えた意見もあつた²³⁰。西洋歴史家の影響をうけ、田口は主に歴史的観点から「停滞した」中国像を描こうとして

²²⁵ 前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一三五―一三八頁、前掲書小沢栄一、二四一―二四八頁。

²²⁶ 前掲書小沢栄一、二二三頁、前掲書河野有理、六五頁。

²²⁷ 田口卯吉『支那開化小史』『田口全集』第二卷、二八六頁。『支那開化小史』を論じたものとして、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一三六―一三七頁、前掲書河野有理、一一七―一二四頁、前掲書小沢栄一、二四二―二四八頁が挙げられている。

²²⁸ 前掲書田口卯吉、『支那開化小史』、二八六頁。

²²⁹ 前掲書田口卯吉、『支那開化小史』、二六六頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一三七頁、前掲書小沢栄一、二四三頁。

²³⁰ 前掲書河野有理、一一〇頁。

いた²³¹⁰。

しかし一方で、中国の現実的な政治と軍事力については、田口はかなり慎重な態度を示した。例えば、一八八二年の壬午事変に、朝鮮半島をめぐる宗主権問題について、日清両国の対立は深刻なものとなりつつあった。「東洋の老大朽木ヲ一撃ノ下ニ挫折センノミ²³²⁰」と、清国に対する積極的な主戦論を唱える福沢とは反対に、田口は清国が「若し力を海軍に用ひば必ず我に十余倍するの軍艦を備へん、若し力を陸軍に注がば必ず我に十余倍するの兵士を養はん」とし、「是れ豈に懼るべきにあらずや」と、武力衝突を極力回避すべき姿勢をとった²³³⁰。また、一八八三年、ベトナムの宗主権問題をめぐって、清国とフランスは対立した。それを機に、一部の論者は朝鮮に進出を唱えたのに対して、田口も同様に政府に「局外中立」を厳守すべきだと忠告した²³⁴⁰。「其人口我に十倍し、其外国貿易は我に三倍し、其土地我に十一倍せり」といったように、田口にとって、中国は脅威であった²³⁵⁰。

実際には、日清戦争まで二つの矛盾するヴィジョンが田口の念頭に併在していた。つまり、歴史上の「停滞した」中国像と現実の「恐るべき」中国像である²³⁶⁰。しかし、日清戦争が近づくにつれ、田口は明らかに主戦論に向かっ

²³¹ 田口卯吉と西洋文明史の受容について、前掲書田口親、七六〇七八頁、前掲書河野有理、六三〇七六頁、前掲書小沢栄一、二一五〇二〇頁に詳しい。一方、武藤秀太郎は「田口が再三強調した「停滞した」中国像は、決して西洋学問から受容した「文明」と「野蛮」という構図を、素朴に投影した結果ではない」と指摘した。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一四五頁。

²³² 福沢諭吉「日支韓三国の關係」『時事新報』（一八八二年八月二五日）、一頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一四〇頁。また、同時期の福沢諭吉の朝鮮観について、杵淵信雄「壬午軍乱」『福沢諭吉と朝鮮…時事新報社説を中心に』（彩流社、一九九七年）、五五〇六七頁を参考。

²³³ 田口卯吉「自由航業論・第六」『田口全集』第四卷、一三四頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一四〇頁。

²³⁴ 田口卯吉「清仏開戦に関して日本の位地如何」『田口全集』第五卷、一七五頁。清仏開戦の際、田口と福沢との対外認識は微妙に異なっている。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一四一頁を参考。

²³⁵ 田口卯吉「支那国の実力」『田口全集』第五卷、一八一頁。

²³⁶ 武藤秀太郎は「恐るべき」中国と「停滞した中国」。一八八〇年代から日清戦争に至る田

った。一八九三年、田口は日清「両国は到底一戦せざるべからず」と信じ、清国が「未だ余り強からず、又余り弱からざ」るうちに、早速開戦すべきだと勧めた²³⁷。同年朝鮮に「防穀事件」が起こり、田口は朝鮮政府との交渉が決裂すると、「唯だ干戈に訴えるの一方あるのみ」とし、清国の干渉が加えられれば、「天津にも一弾を投ずる」と、極めて強硬な外交策をとった²³⁸。また、論説「日清開戦の理由」にも、田口は朝鮮の独立、自衛の権力、内政の改良などの論点から、清国との戦争を力説した²³⁹。帝国財政の整備と軍力の拡張がゆえに、田口は対清戦争の準備は整ったと考えたのである²⁴⁰。

(二) 「日鮮同祖論」と実証史学

対清・対朝政策が強硬化していくにつれて、同時期に朝鮮半島の進出を正当化する「日鮮同祖論²⁴¹」も盛んになりつつあった。こうした論調に、田口は「余

口の中国像には、このような相矛盾する二つのヴィジョンが併在してる」と指摘する。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一四四頁。

²³⁷ 田口卯吉「末広重恭君著東亜之大勢を讀む」『東京経済雑誌』第六六三号、（一八九三年二月二十五日）、二六二頁。田口卯吉と日清戦争の開戦について、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五八頁、前掲書田口親、二〇八頁に詳しい。

²³⁸ 田口卯吉「防穀事件の処分如何」『田口全集』第四卷、四三二頁。また、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五八頁、前掲論文小峰和夫、二二九頁、前掲論文森久男、三八頁を参考。

²³⁹ 田口卯吉「日清開戦の理由」『田口全集』第五卷、三四五―三四九頁。また、前掲書田口親、二二一頁を参考。

²⁴⁰ 日清戦争前、田口卯吉は主に財政革新に力を注いだ。それについて、前掲書田口親、二〇七―二二二頁を参考。

²⁴¹ 今、日本人と朝鮮人と血縁的な祖先を有し、人種的起源を同じくする歴史論述を「日鮮同祖論」と呼んだことは、一九二九年に公刊された言語学者金沢庄三郎（一八七二―一九六七年）の著述『日鮮同祖論』以後の事である。それまでは、「日韓同城」、「同祖同源」、「日韓同祖論」などの言葉は使われていた。また、日本による植民地支配下の朝鮮において皇民化政策が強化された一九三〇年代の後半には「同根同祖」を使いし始めた。金光林「日鮮同祖論」を通してみる天皇家の起源問題『新潟産業大学人文学部紀要』第一一号、二〇〇二年の「注（一）」、四九頁、同「日本における朝鮮植民地支配と「日鮮同祖論」」『工学院大学共通課程研究論叢』（第三七巻第二号、二〇〇〇年）、七六頁の「注（一）」を参考。

は天降人種の祖先に就きては」、「単純なる朝鮮説を取るものにあらず」と、ある程度の距離を置きながらも、「若し我邦の言語、勾玉の原材、及び人種を調査せば、更に美しき同胞を海外に発見すべし²⁴²」と、日本人種起源論への関心を抱きつつあったように思われる。後述するように、確かに、該当期の「日鮮同祖論」は、研究の方法であれ目的であれ、田口の人種起源論に対して大きな影響を与えた²⁴³。

「日鮮同祖論」の源流は江戸時代の国学者たちの伝統に遡るといって指摘があるが²⁴⁴、日清戦争前後の「日鮮同祖論」は、近世の国学の系統を単純に継承しただけではなく、言語学、地理学、考古学、人類学などの新しい研究方法を重

上記以外に、本論に参考となる先行研究として、沈熙燦「明治期における近代歴史学の成立」と「日鮮同祖論」…歴史家の左手を問う』『立命館史学』（第三五号、二〇一四年）、三二～五九頁、旗田巍『日本人の朝鮮観』（勁草書房、一九六九年）の第一部「日本人の朝鮮観」、一～五〇頁、三ツ井崇「近代アカデミズム史学のなかの「日鮮同祖論」——韓国併合前後を中心に——」『朝鮮史研究会論文集』（第四二号、二〇〇四年一〇月）、四五～七六頁、工藤雅樹「日鮮同祖論」の史学史的意義—関晃教授還暦記念会編『日本古代史研究…関晃先生還暦記念』（吉川弘文館、一九八〇年）、六〇〇～六三二頁、前掲書小熊英二（一九九五年）の第五章「日鮮同祖論」、八七～一〇三頁、前掲書工藤雅樹、一三六～一五〇頁が挙げられている。

²⁴² 田口卯吉「久米君日高考について」『田口全集』第一卷、五二七～五二八頁。

²⁴³ 田口卯吉と「日鮮同祖論」の関係について、武藤秀太郎は「田口の人種論は（中略）非常に複雑な様相を呈している。特に人種起源をめぐる議論は、日鮮同祖論に代表されるように、学問的な動機とは別に、当時の時代状況が多分絡ん」ただけと指摘し、具体的な展開はなかった。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、六〇頁。

²⁴⁴ 江戸時代の朝鮮研究について、旗田巍は「（前略）それは国学者の朝鮮研究である。国学者は漢学者とちがい中国や朝鮮の学問を尊重することをやめ、記・紀その他の日本古典の優秀性を発見し、その研究を通じて神国日本の誇をうちだした。その古典の研究において、建国神話や天皇の歴史のなかにあらわれる朝鮮が当然に問題になった。そこに生まれた朝鮮史像は、太古において日本の神や天皇が朝鮮を支配し、あるいは日本の神が朝鮮の神や王になり、朝鮮の王族・貴族が日本に服従したというものであった。国学者は日本の建国の起源にさかのぼって日本の朝鮮支配を主張した。こういう意識は古くから存在し、江戸時代の漢学者も建国神話の解釈では同様のことを述べるものがあつたが、国学者は古典の研究を通じて特に強く主張した。国学は日本人の精神的発展の歴史の上で大きい役割を果たしたが、日本人の朝鮮観の形成の上でも重大な意味をもつた」と評する。旗田巍「日本における朝鮮史研究の伝統」旗田巍編『シンポジウム 日本と朝鮮』（勁草書房、一九六九年）、三頁。

視する西洋近代合理主義の実証史学が導入されたことで、『記』『紀』を絶対化して批判を許さない国学者たちとの対抗関係であるとの側面をも有している²⁴⁵。

例えば、「日鮮同祖論」の代表論者である久米邦武の論考「神道ハ祭天ノ古俗」では、日本の皇国精神を支える神道は宗教ではなく、「只天を祭り、攘災招福の祓を為す」祭祀であり、三種神器や新嘗祭なども大陸にも一般的にみられる「東洋の古俗」であると主張する。また、久米は政教合一の弊害を強調しながら、『記』『紀』を一般的な歴史資料として扱うようにした²⁴⁶。

こうした論考は、保守的な国体論者・神道家の憤撃を買い、皇室尊厳を損し、「無礼」、「不敬」なこととされ、猛烈な攻撃を受けた。結局、久米は帝国大学教授の席を追われ、掲載雑誌『史学会雑誌』が発禁処分を受けただけではなく、『大日本編年史』の編纂中断、臨時編年史編纂掛の廃止、さらには帝国大学総長加藤弘之（一八三六―一九一六年）すら更迭されるという嚴重な事態にまで発展していた。いわゆる「久米筆禍事件」である²⁴⁷。

それにもかかわらず、久米の「古俗」説を「卓見」とした田口は、彼自身が主宰する『史海』（第八巻）に該当論文を転載し、さらに「余は此の篇を読み

²⁴⁵ 「日鮮同祖論」と国学者との矛盾は紀年論争により一層明瞭になった。それについて、前掲書工藤雅樹、一三八―一三九頁、前掲論文沈熙燦、三九―四二頁、前掲論文三ツ井崇、五〇―五二頁、前掲書小熊英二（一九九五年）、八八―八九頁を参考。

²⁴⁶ 久米邦武「神道ハ祭天ノ古俗」『史学会雑誌』（第二編第二三、二四、二五号）、一八九一年一〇月一五日、十一月一五日、十二月一五日、一―一五頁、二五―四〇頁、一二―二四頁。大久保利謙編・久米邦武著『史学・史学方法論 久米邦武歴史著作集』第三卷（吉川弘文館、一九九〇年）、二七一―二九六頁。また、田口卯吉と久米邦武の「神道ハ祭天ノ古俗」の関係について、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇四年）、一三四―一三五頁、前掲書田口親、一七七―一八二頁を参考。「神道ハ祭天ノ古俗」の史学意義について、前掲論文三ツ井崇、五二頁、前掲書小熊英二（一九九五年）、八九頁を参考。

²⁴⁷ それについて、前掲論文三ツ井崇、五二―五四頁を参考。より系統的な研究として、宮地正人「久米邦武事件の政治史的考察——天皇制国家の確立と歴史学との関係によせて——」東京歴史科学研究会編『転換期の歴史学』（合同出版社、一九七九年）、一三九―一七四頁、今井修、鹿野政直「日本近代思想史のなかの久米事件」大久保利謙編『久米邦武の研究 久米邦武歴史著作集』別巻（吉川弘文館、一九九〇年）、二〇一―三一六頁を参考。

私かに吾国現今の或る神道熱信家は決して緘黙すべき場合にあらざるを思ふ。若し彼等にして尚ほ緘黙せば、余は彼等は全く閉口したるものと見做さざるべからず」という挑発的な序文を加え、国学界の憤慨を一層招いた²⁴⁸。結局、治安妨害という罪名をもつて、『史海』は発売禁止を受けた²⁴⁹。ここで田口は、学問の自由を守る姿を示したとともに、実証史学への擁護もしていることがわかる。実はこの時期こそ、田口は、久米らの実証史学の影響を受け、「文明史論」から人物中心論の史学研究へ転向した時期なのである²⁵⁰。

一八八八年、明治政府の修史事業は内閣臨時修史局から帝国大学へ移行され、文科大学臨時編年史編纂掛を設置し、重野安繹が編纂委員長に着任し、加えて久米邦武と星野恒が加入し、官学アカデミズム史学が正式に発足する²⁵¹。彼らはもともと清朝考証学に範をとる漢学者であった²⁵²。さらに彼らは御雇い外国人として帝国大学史学科に教壇に立つリース (Ludwig Riess、一八六一〜一九二八年) の文献批判を重視するドイツ流の実証史学の方法論にも影響を受け、「国史学」を創立した²⁵³。ここで、近代日本の「日鮮同祖論」が登場した²⁵⁴。例えば、国史学の出発の「記念碑²⁵⁵」とされている『本稿国史眼』の第一巻「第一紀 神人無別の世」では、『紀』『記』における「海原」を「韓国」とし、「大国主ノ命之ヲ承ケ。新羅及比常世ノ国ト交通セリ」、「吾田ノ岬ノ韓

²⁴⁸ 田口卯吉「久米氏「神道ハ祭天ノ古俗」のまへがき」『田口全集』第二巻、四七六頁。前掲論文武藤秀太郎(二〇〇四年)、一三四頁。

²⁴⁹ 『史海』(第八巻)は禁刊された。前掲書田口親、一八〇頁。田口卯吉と久米事件について、前掲論文今井修、鹿野政直、二四二〜二四六頁、前掲書嘉治隆一、九五〜一〇〇頁を参考。

²⁵⁰ 前掲書田口親、一七六〜一八〇頁、前掲書小沢栄一、五〇五〜五一七頁。

²⁵¹ 前掲論文三ツ井崇、四八頁。より詳しい研究として、宮地正人「史料編纂所の歴史とその課題」東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』(山川出版社、二〇〇三年)、一六一〜一八一頁を参考。

²⁵² 三ツ井崇によれば、この三人は「清朝考証学に依拠した漢学者」であるという。前掲論文三ツ井崇、四八頁。

²⁵³ 国史科の成立について、前掲書小沢栄一、四三〇〜四四一頁、前掲書永原慶二、三三〇〜三三九頁を参考。

²⁵⁴ 前掲書工藤雅樹、一三八頁。

²⁵⁵ 前掲書小沢栄一、四三七頁。

国ニ通スルニ便ナルヲ以テ都ヲ定メ」、「我民及ビ馬韓百濟濊人皆之ヲ市フ」、さらに「稻氷ノ命ノ新羅ニ王タリシヨリ」と、日本の起源と韓国の緊密的關係を強調する。そして、「第二紀 神人有別ノ世」では、「韓地ハ我ト唇齒ヲナシ」、「朝鮮半島の乱の際、「朝議監乘津彦ヲ遣テ鎮守トス」、「大加羅ヲ任那ト改ム。任那日本府此ニ始ル」。また、「第三紀 韓土服属ノ世」では、「氣長足姫」（神功皇后）は「対岸ノ新羅ヲ伐ント」、「韓地ノ半島ハ全ク版図ニ歸」すると明言されている²⁵⁶。

このような論旨は、後に久米と星野の個人の論考で一層明白になった。国史科の機関誌である『史学会雑誌』に掲載された久米の「日本幅員の沿革」では、「海原とは古昔朝鮮地方の総称」であるとし、「妣国」を「新羅」とし、「其王は稻氷命の子孫なり」、「日本朝鮮及常世国の連合は、上古諾冊二尊の時より己に然る」と主張する。久米によれば、「日本幅員」とは「大抵今の半島角の全部」だという²⁵⁶。また、星野の論文「本邦ノ人種言語ニ付鄙考ヲ述テ世ノ真心愛国者ニ質ス」では、日韓両国の開国神話の類似性を強調し、しかも「彼我ノ言語同一ナリシ」、「其種族モ亦必ず同一ナル」とする。したがって、日本は「上世嘗テ韓土ヲ統治シ」、「二国ハモト一域ニシテ他境ニ非ズ」。星野の結論によれば、「皇祖ノ嘗テ其地ニ主タルナリ、(一) 高貴ノ人ノ往来スルナリ、(二) 種族ノ同一ナリ、(三) 言語ノ同一ナリ、(四) 皆同国ノ觀ヲ呈スルニ非ザルハナシ」という。こうした論旨について、「版図ノ伸縮ヲ以テ意ト為スサ、ルナリ」と、星野は研究の目的を赤裸々に披露した²⁵⁸。

にもかかわらず、久米と星野は国体論者・神道家から激しい批判を浴びた²⁵⁹。

²⁵⁶ 重野安繹、久米邦武、星野恒編『稿本国史眼・一』（大成館、一八九〇年）、七、一一〜一二、一五〜一六頁。『稿本国史眼・一』における「日鮮同祖論」の具体的展開について、前掲論文沈熙燦、三一〜三二頁、前掲論文三ツ井崇、四九頁を参考。

²⁵⁷ 久米邦武「日本幅員の沿革」『史学会雑誌』（史学会論叢第一輯、一八九〇年六月一日）、一五四、一五七、一六六頁。前掲論文沈熙燦、三五〜三六頁、前掲論文三ツ井崇、四八頁、前掲書小熊英二（一九九五年）、八九〜九一頁。

²⁵⁸ 星野恒「本邦ノ人種言語ニ付鄙考ヲ述テ世ノ真心愛国者ニ質ス」『史学会雑誌』（第一一〇号、一八九〇年）、一八、三二、三五、四二頁。前掲論文沈熙燦、三六〜三八頁、前掲論文三ツ井崇、四八頁、前掲論文藤雅樹、六〇八〜六〇九頁、前掲書小熊英二（一九九五年）、九一頁。

²⁵⁹ 久米邦武と星野恒に対する批判について、前掲論文三ツ井崇、五二〜五三頁、前掲論文沈

例えば、皇典講究所の副総裁である岩下方平（一八二七―一九〇〇年）は、「天皇陛下ノ御大祖」を「海外流離ノ蕃種」とする「日鮮同祖論」に対して、「皇統ニ関シテ大不敬」であると非難する²⁶⁰。また同所の下田義天類（一八五二―一九二九年）も「我皇室ハ朝鮮人ノ分流ナリ、新羅人ノ支流ナリ」という論断は、「明カニ皇室ヲ卑賤ノ地位ニ導カン」とするという²⁶¹。さらに、柳井嘯庵（生卒不明）は「余ハ之ヲ国史ノ眼ト云ハズシテ」、「辱国史」、「否阿世史」であると強く非難した²⁶²。既に述べたように、国体論者・神道家からの糾弾のため、「久米筆禍事件」が起こり、臨時編年史編纂掛が廃止させられたことで、「日鮮同祖論」は官学から追放され、天皇の起源問題もタブー化されてしまった²⁶³。

しかし、久米らの実証史学の影響力は残っていた。官憲の弾圧に対して、田口は「日本人民は随意に古史を研究する」のは、「皇国に対して不敬に涉らざる」、「神代の諸神は靈妙なる神霊とならずして、吾人と同一なる人種即ち飯も食ひ、水も飲み、踊も踊り夢も見給へるものとなるも、決して国体を紊乱するものにあらざる」と憤慨し、「古事記の語義を尋思して研究するよりも、広く人種、風俗、言語、器物等に就いて研究する」と、実証史学の科学性をも強調した²⁶⁴。その意味では、久米をはじめとする官学と、田口をはじめとする民間史学との相互の接点を呈したともいえる²⁶⁵。

(3) 人種起源論とその展開

熙燦、四四―四五頁を参考。

²⁶⁰ 岩下方平「神道ハ祭天ノ古俗ト云フ論ヲ読テ其ノ妄ヲ弁ズ」『随在天神』（第一九六号、一八九二年三月二〇日）、六頁。前掲論文三ツ井崇、五三頁、前掲論文沈熙燦、四四頁。

²⁶¹ 下田義天類「田口卯吉氏ノ告ヲ読ミ併テ祭天論ヲ弁ズ」『随在天神』（第一九七号、一八九二年四月五日）、一二頁。前掲論文沈熙燦、四四頁。

²⁶² 柳井嘯庵「国史眼ヲ読ミテ之レガ修正ヲ望ム（続）」『随在天神』（第二〇六号、一八九三年一月五日）、二〇六号、八頁。前掲論文沈熙燦、四四―四五頁。

²⁶³ 前掲論文三ツ井崇、五三頁。

²⁶⁴ 田口卯吉「神道者諸氏に告ぐ」『田口全集』第二卷、四七二頁。

²⁶⁵ 前掲論文三ツ井崇、五三頁。

田口は久米の「日鮮同祖論」を全面的に認めたとはいえないが、自ら「日本人種起源論」を提出した。武藤秀太郎によれば、一八九三年四月十五日に行われた殖民協会主催の演説会で、田口は海外殖民の鼓吹のために、初めて「日本人種匈奴起源説」を提出したという²⁶⁶。しかし、実は同年四月一日の論説「居留地制度ト内地雑居・第一」の冒頭において、田口は「余は旧史を考究し、我日本人種は全く土爾基ホンガリー等と同族なることを發明するを得たり。其証実に巨多なり」と、すでに「匈奴起源説」を言及していた²⁶⁷。この時期、田口の人種起源論を喚起したのは、実証史学による「日鮮同祖論」のほか、南洋経験による海外殖民論と条約改正にかかわる内地雑居問題への関心があったことも見落とすべきではない。

一八八〇年代に、合理主義の文明史論と自由主義の経済論を掲げた田口は「人種の競争」よりも「利害の一致」を強調したが、日清戦争前後の内地雑居に関する田口の論説では、「人種の競争」が極めて重要な論点としてあげられた。一八九三年の稿「居留地制度と内地雑居」では、世人がペルシアとギリシア、インドとイギリスとの関係を例として、「亜細亜人種は決してアリヤン人種に及ばざる」としたのに対して、田口は「土爾基の歐洲に侵入したる」と「ホンガリー人の澳国に雑居したる」歴史を踏まえ、必ずしもそうではないと考えた。田口によれば、彼らは「独立して以てアリヤン人種と対峙せり」、「歐人の亜細亜に入るもの未だ此の如き勢力」はなかったという。ここで田口は、世界史を人種間の競争史として捉えようとした。ただし、「日本人種」と「同族」である「土爾基ホンガリー」の「歐洲に侵入」し「アリヤン人種と対峙」した歴史を裏付け、「我日本人種は技芸に於ても、學術に於ても、工業農業等に於ても、決してアリヤン人種を恐るゝ所以なし」と、日本人種は優秀な人種だと田口は主張する²⁶⁸。

しかしその一方で、ドイツ留学から帰った井上哲次郎（一八五六～一九四四

²⁶⁶ 前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五八頁。

²⁶⁷ 田口卯吉「居留地制度ト内地雑居・第一」『東京経済雑誌』第六六八号、（一八九三年四月一日）、四四八～四四九頁。田口卯吉「居留地制度ト内地雑居」『田口全集』第五卷、六一頁。

²⁶⁸ 前掲書田口卯吉『居留地制度ト内地雑居』、六〇～六一頁。前掲書小熊英二（一九九五年）、四五頁。

年)は、社会進化論に基づき、日本人は「智職に於ても、金力に於ても、体格に於ても、其他百般の事に於ても、多くは西洋人に劣る」とし、内地雑居ならば、日本は「優勝劣敗の活劇場」になり、欧米人より「二等下劣」人種である日本人種は、「競争上常に敗を取るは、必然の勢」であると考えた²⁷⁰。また、中国大陆に日本人種の起源を求める論者と異なり、井上は比較言語学の論拠により日本人種の起源を南洋諸島としていた。「蒙古朝鮮支那等大陸の人種も随分日本に入来りし」が、「南洋の人種に比すれば真に少かり」、「日本語派は全く南洋諸語に連絡せるが故に」、「日本人は寧ろ南洋諸島の人種と親近なる関係を有する」という。井上は日本人種の南洋起源論に基づき、日本人種の劣等性を証明し、内地雑居に反対するのである²⁷⁰。

身を以て南洋にいった田口は「井上哲次郎氏に質す」という論説を書き、井上の議論は「半文銭の価値も」ないと批判し、井上のいう通り日本人種が劣等人種であれば、「内地雑居にして不可」のみならず、「海外殖民の如きは最も不可なる」と、田口は人種起源問題が内地雑居・海外殖民と共に関係していることを強調した。日本人種が優越人種であるという前提の上で、内地雑居・海外殖民が可能になるのである²⁷¹。

また、かつて「利害一致」による社会統合観を持った田口は、ここでは「日本国民をして大国たらしめんには」、外国人や混血児を「日本人に同化するの工夫肝要」があると強調し、「歳月と共に此外人を吸収し、咀嚼し、消化し、遂に我同胞となすや疑なき事なり」と考えた²⁷²。この時期こそ、田口は歴史論考「坂上田村麿」を著し、日本人種の同化力の模範として彼を取り上げたので

²⁶⁹ 井上哲次郎『内地雑居論』(哲学書院、一八九一年)、一〇―一一、一五頁、同『内地雑居続論』(哲学書院、一八九一年)、五頁。

²⁷⁰ 井上哲次郎「附録第一・内地雑居論の批評を読む(国民之友に寄するの書)」『内地雑居続論』(哲学書院、一八九一年)、一〇、一二頁。前掲書小熊英二(一九九五年)、四三―四四頁。ここで、小熊英二は田口卯吉と井上哲次郎とは対照的な人物としてあげたのである。

²⁷¹ 田口卯吉「井上哲次郎氏に質す」、『東京経済雑誌』第五七三号、(一八九一年五月二三日)、七〇七、七〇九頁。前掲書小熊英二(一九九五年)、四五頁。

²⁷² 前掲書田口卯吉、『居留地制度下内地雑居』、六五、七三頁。前掲論文武藤秀太郎(二〇〇三年)、五三頁、前掲書小熊英二(一九九五年)、四六―四七頁。

ある。こうしてかつて田口の内地雑居論に存在した人種平等思想は、ここからしだいに消えつつあった²⁷³。

そのため、朝鮮人と南洋人を劣等人種としたコンテキストにおいて、日本人種の起源を朝鮮半島あるいは南洋群島に求めることは、内地雑居と海外殖民に期待される優等人種の自画像に当てはまらない。かくして歴史上優等人種であるアーリア人種と対峙してきた匈奴人種は、田口の日本人種起源説に取り込まれていったのである。

実際は、日清戦争に日本が優位に進む中で、田口の「匈奴起源説」はもう一つの機能を果していた。一八九四年九月、連合艦隊は清国の北洋水師を撃破し、朝鮮半島を完全に統制し鴨緑江を渡る際、田口は「支那は多くの償金を払ひ得べき国格にあらず」という文章を載せ、「償金」より「土地を以て」清国の「勢を止む」としたと、清国の復讐を懸念したのである²⁷⁴。十一月、清国の講和の申出は通達され、田口は論説「講和の条件」を著し、北京に入城するまで、講和会議を開いてはならないとし、また、徳富蘇峰をはじめとする台湾・遼東半島を割譲する主流意見とも異なり、吉林・盛京・直隸などの東北三省を割譲せよと力説した²⁷⁵。

これらを背景に、田口が敢えて「日本人種匈奴起源説」をとったことは、それ自体が意味深いものであったと考えなくてはならない。なぜならば、日本人種の起源を歴史上で中国東北三省に起源を持つ匈奴人種に求める田口にとつて、それは戦後の土地割譲の訴求と関わるからである²⁷⁶。

²⁷³ 武藤秀太郎は、田口卯吉の殖民協会主催の演説会をもって、「田口の人種論は元来、平等思想を有していた。だが、今回の演説では、日本人種が古代偉大な事業を成した匈奴の一種族とされ、白哲人種にも劣らない優等人種とされた」と指摘する。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五八頁。

²⁷⁴ 田口卯吉「支那は多くの償金を払ひ得べき国格にあらず」『田口全集』第六卷、三四〇頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五九頁。

²⁷⁵ 田口卯吉「講和の条件」『東京経済雑誌』第七五一号、（一八九四年一月一〇日）、六九〇頁。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五九頁、前掲書田口親、二二三頁。

²⁷⁶ 武藤秀太郎は「東北三省割譲の要求が、中国北部との連繫を説いた「日本人種論」と相重なり合う」、「対中国認識と人種論は時間的にも空間的にも、パラレルに対応している」と指摘する。前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）、五九頁。

下関条約締結後、田口は早速「日本人種論」を起草し、「日本人種匈奴起源説」を詳しく論述した。田口は「語法」、「容貌骨格」、「智力」などの方面から、日本人と中国人との人種的差異を強調したうえで、匈奴人種の優越性を強調した。「匈奴は支那の史家之を貶すと雖も、実に勇猛なる一人種にして、漢高の強大を以てするも能く之を制すること能はずして」、「其一部は去りて歐洲に入り、羅馬の頹衰に乗じて地を匈牙利に略して以て今日に至れり」、「今日奥国の武威を墜さざるは実に匈牙利人種の力なり」と、田口は歴史上匈奴人種の功績を賛美しつつ、そして「言語風俗其他に就いて観察するときは、我日本人種は匈奴人種の一族たる」と、日本と匈奴との人種的同一性を強調した。しかも「我日本人種は其最も発達開進し」、「土爾基匈牙利も亦我日本の同胞たることを思へば、我日本人種たるもの豈に相提携して世界に立つ」と、田口は日清戦争の勝利の気運に乗じて世界進出の期待を抱くようになった²⁷⁷⁰。

しかし、田口が想定しなかったのは、ドイツ、ロシア、フランスが、下関条約に基づき日本に割譲された遼東半島を清国に返還することを要求した、日本の膨張を抑制するためのいわゆる三国干渉が起こったことである。しかもドイツ皇帝ウイルヘルム二世は東アジア進出を正当化とするために、画家ヘルマン・クナックフスに『黄禍の図』を描かせて、「黄禍論」を打ち出した。「日本に対抗して、ヨーロッパの利益を守るため、ヨーロッパが連合して行動を取る」、「巨大な黄色人種の攻撃からヨーロッパを守ることが、ロシアの将来の偉大な任務である」と、ロシア皇帝宛ての書簡に書かれたように、ドイツ皇帝は明らかに日本帝国の膨張を「黄禍」と見なしていた²⁷⁷⁸⁰。

該当期のいわゆる「黄禍論」は列強の東アジア進出のために打ち出された帝国主義の政治的なスローガンとされたが、ここで注目したいのは、「黄禍」という概念自体の形成は異人種のヨーロッパ侵入の歴史的記憶に根ざしているということである²⁷⁷⁹⁰。とりわけ、「上帝の鞭」と呼ばれている匈奴や蒙古などの北方アジアの遊牧民族に対する恐怖と危惧の歴史的記憶は、ヨーロッパ人の

²⁷⁷ 田口卯吉「日本人種論」『田口全集』第二巻、四七七～四八二頁。

²⁷⁸ 前掲書飯倉章（二〇一三年）、四八頁。

²⁷⁹ 前掲書橋川文三、八～一四頁。

「黄禍」認識に大きな役割を果たしてきた²⁸⁰。かかる状況で、「他の人種来りて我匈奴人種を害せんとすれば、余は匈奴人種として戦ふべし²⁸¹」というような田口の決然たるモットーは逆に戦後に盛り上がった黄禍論に一層拍車をかけるようになった。その意味では、田口の「匈奴起源説」は時宜に適しないことといえよう。黄禍論の圧力を意識した上で、田口は日本人種起源を考え直さざるをえなかった。

一九〇四年、日露戦争を背景に白熱していた「黄禍」を解消するため、田口は『破黄禍論…一名日本人種の真相』を出版した。該当書によれば、歴史上ロシアは匈奴、韃靼、蒙古人種に征服され、なかでも韃靼人種はスラブ人種と雑婚し、「露国の華胄」のみならず、「其下層には韃靼人種の血を混入」し、「黄禍と云へる語にして韃靼人種の侵入を意味するならば、余は却て露国が満州を占領するを以て黄禍なり」という²⁸²。ここで田口も韃靼人種の侵入を「黄禍」としていた。ただし、田口はロシアと韃靼との混血関係を強調し、日本は黄禍ではなく、ロシアこそが「黄禍」であると断言する。かくして、田口は日本人種と匈奴、韃靼、蒙古人種とを区別し、比較言語学の根拠により、日本人種起源がアーリア人種であると主張するようになった²⁸³。

田口は「文法に於いてラテン、ギリキ、サンスクリットとヨウロツパ諸国との間に此の如き相違あり」とし、「アリヤン語族の根本たる以上諸国の文法

²⁸⁰ 前掲書橋川文三、八〜一四頁、前掲書ゴルヴィツァー、一二八〜一三二頁。

²⁸¹ 田口卯吉「末広重恭君に答ふる」『田口全集』第八巻、二〇八頁。

²⁸² 田口卯吉『破黄禍論…一名日本人種の真相』『田口全集』第二巻、四九七〜四九八頁。

²⁸³ 田口が「日本人アーリア人種起源説」を初めて提唱するのは、一九〇一年四月二〇日の史学大会で行われた「国語上より観察したる人種の初代」という講演である。その講演が『史学雑誌』（第二編第六号、一九〇一年六月一〇日）、一〜二八頁に掲載されるや否や、激しい批判を浴びた。その批判について、本論の第一章第一節を参考。そしてその批判に対する弁解のために書いた「人種の初代の根拠地を決するは国語に如くなし」『史学雑誌』第一二編第一〇号、一九〇一年一〇月一〇日）、一六〜三八頁がある。この二本の論文が、修正された後に『古代の研究』（経済雑誌社、一九〇二年）及び『破黄禍論…一名日本人種の真相』（経済雑誌社、一九〇四年）両書に収められた。ただし、『田口全集』第二巻のなかに、両論文は『古代の研究』だけに収められた。

も我が日本の文法に類しヨウロッパ諸国と異なるとを見るべし」と断言した²⁸⁴。しかも田口は西洋の言語学者たちが「今や自らアリヤン人種と称して、我々をチユラニヤンと称するは、我々の先祖を横取りして、我々を末家筋に貶す」とし、「之を自己の祖先と爲すに至りては其の誤謬を表白せざるべからず」と批判したうえで、「サンスクリット等の文法は日本文法々中に無疵に存生して居るを以て、我々はヨウロッパ人に比すれば本家筋に近きもの」だと、日本人種とアリア人種との近縁性を強調した²⁸⁵。故に、西洋人が日本を「黄禍」とする非難は「全く無根の流説」、「事態の真相を解せざる杞人の憂に過ぎ」ないのであったと田口は当該書の冒頭において主張する²⁸⁶。実際には、黄禍論の圧力があつたからこそ、田口は「日本人種起源説」を打ち出したのである。その意味では、田口の人種論は外交論の色を帯びていたといえよう²⁸⁷。

しかし、こうした論旨は多くの批判を浴びた。これらの批判は、学問的な論争であるが、自民族の自尊心への配慮も含まれたと考えられる。いずにせよ、田口の「日本人アリア人種起源説」は科学的根拠が弱いと広く批判された²⁸⁸。

一九〇五年二月、田口は史学会で生涯の最後の講演「日本人種の研究」を行った。この時期は、日露戦争の勝利の直前でありながら、田口の死去のわずか二か月前でもあつた²⁸⁹。「日本人アリア人種起源説」に対する「攻撃を受ける次第で一段注意」しつつ、「言語学者の非常の御立腹」したことも「恐縮しました」が、田口自身も「日本人種と云ふものはどんな人種であるか。是は逆

²⁸⁴ 前掲書田口卯吉、『破黄禍論…一名日本人種の真相』、四一六頁。

²⁸⁵ 同右、四二一～四二二頁。

²⁸⁶ 同右、四八五頁。

²⁸⁷ 酒井一臣は田口卯吉の人種論と彼の「自由主義に根ざした功利的現実論」と「対欧米協調主義」の外交観と合わせて考察した。酒井一臣「天孫人種は白人なり…田口卯吉の現実外交路線」中京大学社会科学研究所運営委員会編『アジア・太平洋地域における「ものの考え方」』（成文堂、二〇〇七年）、一九六頁。また、先行研究武藤秀太郎、橋川文三のまとめ方について、同論文一八三～一八五頁からヒントを頂いた。

²⁸⁸ また、田口卯吉の言語学の批判について、前掲書田口親、二九九頁、前掲論文武藤秀太郎（二〇〇三年）の注（七六）、六四頁、前掲書工藤雅樹、一六〇頁にも触れていた

²⁸⁹ 田口卯吉は一九〇五年四月一三日、慢性萎縮腎と中耳炎により病死。前掲書杉原四郎、岡田和喜編、「田口卯吉の生涯と著作」、四六七頁。

も一朝一夕で研究し終はれるではない」と白状した²⁹⁰。実際には、田口からすれば、日本人種の起源はすでに重要な問題ではなくなっていた。田口によれば、ヨーロッパ人は日本人を南洋諸島の野蛮人種のように見ていたが、日本は「大なる支那帝国に打勝ち」、「世界の第一等強国」である「露西亞」にも「連戦連捷し」、「矢張り南洋に居る土人と相去る遠」ったことがわかった²⁹¹。そして、元来彼らは「アリアン人種を一番エライ人種」とし、「モンゴリヤ人種」が「逆もアリアン人種には勝てるものではない」としていたが、日露戦争の中に日本が優位に進む中で、「彼等は今や黄色人種にしてはエライ」とするようになった。人種問題については、「世界から軽蔑される気遣ひがない」と、田口の圧力が戦争の勝利によって解除されたのである²⁹²。

しかし、それは田口の日本人種起源論に対する興味が失われたことと意味するのではなく、むしろ一層重視されるようになった。「我々の祖先は高天原から天降つた」と言われるが、田口は「此の高天原は実に疑問」があると考える。「高天原」をめぐる解釈について、「本居（宣長）、平田（篤胤）などは単に天である」という主張があるが、田口は日本人が「空気の中からお互人間が落ちて来やう」と、二者を風刺しながら批判した。また、「新井白石は天高原は常陸だ」と言いながら、田口は「常陸を高天原にくつ付けたけれども、常陸も信用ができない」と新井の案をも断った。他の歴史家は「高天原」が「大和」とか「朝鮮」とかという議論があるが、田口は「感服する丈けの価値ある議論はない」と述べた²⁹³。実は、田口は依然として日本人種が「匈奴起源説」であると唱えた。ただし、西洋人の言語学者のように、匈奴人種を「チュラニアン人種」とするのではなく、田口は匈奴人種も「アリアン人種」の一分族であると主張する。この「アリアン人種」は「印度、波斯、トルコスタンあたりから北方に蔓延して支那の匈奴になつたので、前漢の初に其事件が起つて日本に御渡りになる」と田口は考えた。ここで田口は「アリアン人種」と「匈奴人種」の優劣に執着するよりも、その着目点は、「私はどうしても是位の大なる国民を

²⁹⁰ 田口卯吉「日本人種の研究」『田口全集』第二巻、五〇一、五〇四頁。

²⁹¹ 同右、五〇一～五〇二頁。

²⁹² 同右、五〇一、五一四頁。

²⁹³ 同右、五〇四～五〇五頁。

作られる祖先は、其挙動は随分活潑堂々たるもので、歴史上に名を残して居る位の人種でなければならぬ」と、日露戦争の勝利に伴う新しいセルフ・アイデンティティーを求めることにあつた²⁹⁴。

日露戦争における黄色人種である日本人の勝利は、西洋列強に構築された「人種差別主義」のヒエラルキーを突き崩した。そしてそれに基づいた人種的優劣論も無効化されるようになった。よって、西洋人による「人種差別主義」の基礎となる人種的分類と起源を問い直すこともごく自然に日本人の頭に浮上してくる。その意味では、田口は早くその作業に着手した学者の一人であると考えられる²⁹⁵。

結び

本稿では、田口卯吉の生涯にわたる史論、政論、新聞記事、旅行記などの文献を通じてその人種論の形成と展開を論じてきた。従来の日本近現代史研究では、多少の差がありながら、田口は福沢とともに明治初期における文明史論の代表人物として捉えられてきた²⁹⁶。かかる延長線上に、彼の日露戦争期における「日本人アリア人種起源説」は、人種的「脱亜論」としてその文明史論の接点を結んでいた²⁹⁷。しかし、本稿が指摘したように、田口の人種論と文明史論との関係性は薄いあまり、その初期の人種論は主に内地雑居論に求めなければならなかった。そのなかで、田口は「日本多民族起源説」を唱え、内地雑居論の歴史的根拠を求める一方、他方では自由主義経済論を掲げ、文明開化と殖産興業を推し進め、人種よりも利益を重視していた。

また、従来中国・アジア大陸をめぐる「脱亜」的言説については、一面的に

²⁹⁴ 同右、五一三～五一四頁。

²⁹⁵ 日露戦争と人種主義との矛盾について、前掲書飯倉章（二〇一三年）、一〇、一三四頁を参考。田口の西洋の人種論に対する突破について、前掲書山室信一（二〇〇二年）、七〇～七一頁、前掲書橋川文三、四六頁を参考。

²⁹⁶ 張翔「文明開化のコース——福沢諭吉と田口卯吉——」『史学研究』（第一八〇号、一九八八年一月）、一一頁。

²⁹⁷ 前掲書工藤雅樹、一五七～一六一頁、前掲書小熊英二（一九九五年）、一七六頁。

中国に対する軽蔑だけが強調されてきたが、武藤秀太郎が指摘する通り、田口の念頭においては「停滞した」と「恐るべき」の二つの中国像が矛盾的に併在していた。序章の第二節にも論じたように、その矛盾的な認識は、白色人種との対抗以上に朝鮮をめぐる日清間の対立が切実な課題となり、清国人に対する同人種ゆえの脅威と恐怖の念が蔑視と差別感情に転化したものと考えられる。それまでに、「南洋」という未開地は、田口にとって日本人の人種的な優越性の確保として認識された²³⁸。

そして日清戦争前後、田口の文明史論から実証史学への傾斜は、国民国家日本から帝国日本への転向と重ねており、その間に実証史学による日鮮同祖論は対外拡張論の正当化の道具として、田口の興味を大いに掻き立てた。その上で、田口は日清戦争の前途に対して楽観的に予想しすぎており、中国の東北地区割譲を講和の条件とし、「日本人種匈奴起源論」を打ち立てた。ここで従来「脱亜」的に論じられてきた田口の日本人種論は、「アジア」的人種起源説に回収されたのである。しかし、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、世界的規模で自由競争主義から帝国主義へと移行する状況で、西洋諸国、特に新興帝国ドイツの東アジア進出を強行し、人種差別に基づいた「黄禍論」を打ち出し、帝国日本の膨張主義を抑えようとしていた。「黄禍論」という外圧の下、田口の「日本人アーリア人種起源説」は一時「脱亜的」言説に戻ってしまったかのように見えるが、その言語学的論説を冷静に見れば、「我々はヨウロツパ人に比すれば本家筋に近きもの」と、西洋を無前提的に「優越」・「文明」とみなしたとは言えない。だからこそ、日露戦争の勝利に向かうにつれて、田口は人種優劣序列の頂点における「アーリア人種」を降格させ、従来の「日本人アーリア人種起源説」も放棄するようになった。田口の人種論はそれ自らの急死のために懸案になってしまったが、その最後の講演「日本人種の研究」から見れば、日本人種の起源への探求意欲はより明白になったことが確認される。それは、単なる日本帝国の拡張・膨張主義と関わるだけではなく、日清・日露戦を経て「一等国」の栄光を確実にした上で、新しい自他認識・対外関係を求めようと

²³⁸ 明治前期における日本の文明認識と南洋との関係について、前掲論文水野守(二〇〇一年)を参考。

したと考えられる²⁹⁹⁾。

²⁹⁹⁾ 明治末期における日本の自己認識について、銭鷗「日清戦争直後における対中国観及び日本人のセルフイメージ——『太陽』第一巻を通して——」『日本研究』(第一三号、一九九六年三月)、一一八頁を参考。

第三章

高山樗牛と人種・黄禍論

——アジア主義への接近——

序論

高山樗牛は日清・日露戦争間に活躍した評論家・美学家・思想家として知られており、当時最大の総合雑誌『太陽』の主編・主筆として国民文学論や日本主義などを提唱し、「国民国家」成立期の自覚による「国民文化」の形成に大きな力を注いだ人物である³⁰⁰。彼は明治二〇年代後半から十年間に満たない文壇での批評活動をしていたが、『太陽』雑誌の「黄金時代³⁰¹」を築き、彼自身も「うたがいもなく第一級の影響力をもった思想家³⁰²」という地位を確立した。一九〇二年、わずか三十一歳の若さで結核の悪化により、命の最後を迎え、「未完成の天才³⁰³」とされていた。

しかしその一方で、樗牛の短い生涯においては、「浪漫主義」や「国家主義」や「個人主義」や「日蓮主義」などの言葉に象徴されるように、「豹変の博士」とも揶揄された³⁰⁴。吉田精一（一九〇八～一九八四年）は、「周囲の事情や時勢に動かされると」、樗牛を「極端から極端に走ることを辞せない」、「動揺する魂であり、ロマンチストの一典型³⁰⁵」として捉えた。戸川秋骨（一八七二～一九三九年）は、樗牛の「内部生命」は「この時代の要求と一致して活動」して

³⁰⁰ 前掲論文林正子（一九九八年三月）、一七頁。また、この時期の国民文化に関する研究について、鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』（思文閣出版、二〇〇一年）、前掲書渡辺公三、西川長夫編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』を参考。

³⁰¹ 鈴木正節『博文館「太陽」の研究』（アジア経済研究所、一九七九年）、一六頁。林正子『太陽』文芸欄主筆期の高山樗牛——個人主義的国家主義から絶対主義的個人主義への必然性——『日本研究』（第一七号、一九九八年二月）、三〇七頁。

³⁰² 鹿野政直「太陽」——主として明治期における——『思想』（第四五〇号、一九六一年二月）、一四二頁。前掲論文林正子（一九九八年三月）、一七頁。

³⁰³ 高須芳次郎『高山樗牛・人と文学』（偕成社、一九四三年）、二六三頁。

³⁰⁴ 亀井俊介『ナシヨナリズムの文学 明治精神の探求』（講談社、一九八八年）、一八九頁。

³⁰⁵ 吉田精一『近代文芸評論史 明治編』（至文堂、一九七五年）、五八四頁。前掲論文林正子（一九九八年二月）、三〇七～三〇八頁。

おり、「彼の精神状態は直ちに当代の精神状態³⁰⁶」であると主張する。さらに、色川大吉は民族的自己意識の覚醒という視点から、「明治三十年代の文化問題、ひいては明治文化の断層の究明には、この樗牛を媒介としてみるとたいへん有効である³⁰⁷」と指摘する。

以上のように、樗牛思想の変容が時代の情勢と不可欠な関係があると強調されてきた。かかる視座によると、樗牛の生涯については、一般的に三段論として論じられてきた³⁰⁸。

例えば、赤木桁平（一八九一～一九四九年）は樗牛の生涯を第一期「抽象的理想主義」、第二期「国家主義」、第三期「個人主義」に分けた³⁰⁹。高坂正顕（一九〇〇～一九六九年）は樗牛の生涯を第一期「浪漫主義」、第二期「日本主義」、第三期「個人主義」に分けた³¹⁰。その上で、渡辺和靖は樗牛の生涯をさらに細分化しており、第一期「浪漫主義」、第二期「日本主義」（初期の『太陽』時代、日本主義時代、美学研究時代）、第三期「個人主義」（本能主義時代、日蓮主義時代、イゴイスト時代）として捉えた³¹¹。

しかしながら、上記のような通説としての三段論の不備は目立っている。なぜならば、日清戦争後、三国干渉とともに白熱化しつつある人種・黄禍問題について、樗牛は「人種競争論」に基づき、「歴史と人種」、「人種競争として見たる極東問題」、「異人種同盟」などの一連の文章を書き、「黄色人種同盟」を

³⁰⁶ 戸川秋骨「高山樗牛氏」の評価。橋川文三「高山樗牛」瀬沼茂樹編『明治文学全集』第四〇巻（筑摩書房、一九七〇年）、三八七頁による引用。前掲論文林正子（一九九八年三月）、一八頁。

³⁰⁷ 色川大吉『新編明治精神史』（中央論社、一九七三年）、四九三頁。前掲論文林正子（一九九八年二月）、三〇七頁。

³⁰⁸ 高山樗牛の生涯に対する赤木桁平、高坂正顕、渡辺和靖の分け方について、前掲論文林正子（一九九八年二月）、三二八～三二九頁、同（一九九八年三月）、一九頁、同（一九九六年一月）、一五四頁によるもの。

³⁰⁹ 赤木桁平『人及び思想家としての高山樗牛』（新潮社、一九一八年）、一二五～一五二頁。

³¹⁰ 高坂正顕『明治思想史・高坂正顕著作集』第七卷（理想社、一九六九年）、二八三～二八四頁。

³¹¹ 渡辺和靖『明治思想史…儒教的伝統と近代認識論（増補版）』（ペリカン社、一九八五年）、二〇六～二〇七頁の「注（一）」。

唱え、いわば「アジア主義」を訴えた姿は十分に重視されていなかったからだ。樗牛思想に貫かれた人種・黄禍論による「アジア主義」的な思想的軌道は、彼の生涯における重要性が忘れ去られてきたとも言える。

もちろん、それは樗牛の人種・黄禍論を論じたことはなかったと意味するのではない。例えば、橋川文三は、三国干渉後のショック、日本軍国主義の昂揚を時代背景に、樗牛は急速に「人種競争」、「人種戦争」などの観点に傾斜し、国家主義的傾向が顕著化されたと考えた³¹²。先崎彰容は、樗牛の人種意識を国家危機との関わりを強調した上で、明治維新以来、「西洋文明と進退をともにして」脱亜論＝福沢諭吉的な方向を目指すのか、あるいは「アジアを興す」ために人種問題に取り組むことを強調するのか、という二者択一を迫られる状況に、樗牛が「アジア主義」に進んで行く後者をとったと結論づけた³¹³。そのほか、国際政治情勢を論点に置いた以上の両氏と異なり、林正子は黄禍論をめぐるドイツ留学中の姉崎正治と樗牛との往復書簡を追いながら、「樗牛・嘲風の辛辣なドイツ文明批判を通しての日本文明論から日本人への警告が展開された」とし、「国民意識が高揚し帝国主義的色彩に染まっていたと言われる当時の日本は、実際には、この時初めて、時代精神そのものを真摯に論じる近代という時代を迎え」と、樗牛は黄禍論を通して西洋文明批判を行い、新しい日本文明の自己認識を求めようとしたと解する³¹⁴。

以上のように、樗牛の人種・黄禍論はある程度注目されたが、三国干渉という外圧下に生じた一時感情的な対応策として捉えられがちであり、中国をめぐる列強との争奪あるいは東・西文明の衝突という枠組を越えなかったのである。かかる視座によると、従来樗牛の人種・黄禍論の研究は、東洋の弱小民族としての日本がいかに民族の独立を維持するのか、ということに起因し、そして「人種競争」さらに「人種戦争」までに帰着させたとされていた。しかし、このような明快的な図式のもとでの議論に終わってしまったことで、「国家主義」時

³¹² 前掲書橋川文三、五九～六一頁。

³¹³ 先崎彰容『高山樗牛・美とナショナリズム』（論創社、二〇一〇年）、一一九～一二〇頁。また、同「高山樗牛における「道義」と「文学」——物質主義批判と外交問題——」『日本思想史学』（第二七号、二〇〇五年）、二〇三～二〇四頁。

³¹⁴ 前掲論文林正子（一九九六年十二月）、一八〇頁。

期における樗牛の人種論の外部的要因のみを強調するあまり、その内在的な論理は無意識的に見過ごされてしまった。よって、人種・黄禍論が樗牛の思想史にどのように意義づけられるべきか、という問題が残っていた。

樗牛の人種・黄禍論を考察するにあたって、本稿が念頭に置いているのは、日清戦争を期と一にするナショナリズムの再編成が孕む「国家主義」研究の諸問題である³¹⁵。それは、戦前の自由民権運動に象徴されるような民利・民権と矛盾しない国民的国家主義、愛国主義として統一されていたナショナリズムから、戦後の民権と国権との共存という幻想（ナショナリズムの虚像）が破綻することで、国家主義・帝国主義と平民主義・社会主義との対立へと転換し、いわゆる「明治精神の分裂」にいたったことである³¹⁶。

このような内在的な視点に立脚した上で、本稿は、樗牛における人種・黄禍論は単なる三国干渉をはじめとする外交問題と関係するのではなく、「明治精神の分裂」という破局におけるキリスト教批判、国体論争、台湾領有による「異人種」問題、『記』『紀』神話研究における民族起源、世界文明史系列作品における自民族認識などと深く関わり、三国干渉・義和団運動・日英同盟などの外交事件に顕著化したものだと考える。本稿では樗牛の人種・黄禍論をたどることで、逆にその思想水脈における「アジア主義への接近」という思想的軌道を示す。

第一節 高山樗牛と国体論争

(一) 国体論について

明治期（一八六八～一九一一年）を振り返ると、国体をめぐる論争が何度も繰り返されていた³¹⁷。本節が扱う部分は宗教と国体との論争、とりわけ高山樗

³¹⁵ 本節の問題提起について、水野守（二〇〇一年）、八九頁からヒントを頂いた。

³¹⁶ 「明治精神の分裂」について、前掲書色川大吉、四九六頁を参考。

³¹⁷ 近代日本の国体論争について、石田雄『明治政治思想史研究』（未来社、一九五四年）、松本三之介『天皇制国家と政治思想』（未来社、一九六九年）、長尾龍一『日本法思想史研究』（創文社、一九八一年）、芳賀登『明治国家の形成・国家概念の歴史的変遷』（雄山閣、一九八七年）、

牛の人種論と国体論に関することである。

周知の通り、教育勅語発布後、当時第一高等中学校の嘱託教員・キリスト信者である内村鑑三（一八六一―一九三〇年）は、教育勅語奉読式において天皇晨筆の御名に対して、「偶像崇拜」という理由で最敬礼をおこなわなかったことによって非難された。この出来事は新聞や雑誌を通じて広く報道され、社会的規模そして長期間にわたる論争を引き起こし、とくに教育勅語の公定解説書『勅語衍義』（一八九一年）の執筆者・東京帝国大学時代高山樗牛の指導教官である井上哲次郎を介して、「教育と宗教との衝突」という重大な事件に至った³¹⁸。

この時期、樗牛はまだ仙台の第二高等学校の在學生であったが、すでにキリスト教にある程度の反感を持っていたように見える。例えば一八八八年の書簡によれば、樗牛は当地「耶蘇教盛にして、其信徒の多きこと」、「仲間に入れんとて毎日／＼説教しに來り、（中略）イヤハヤ迷惑至極なり」と悩んでいた。しかしここで樗牛は宗教を否定するのではなく、「政事思想等少しも無之、新聞と云へば基督教新聞のみ見る様なり、真に小生は見るもの聞くもの不愉快のことのみなり」というように、キリスト教に対する一種の「不愉快」の気持ちにとどまっていたのである³¹⁹。

しかし、一八九一年「不敬事件」により、樗牛のキリスト教に対する態度は質的に変わった。同年の稿「第一高等学校不敬事件」において樗牛は、「吾等は日本帝国臣民として、平生甚だ這般の事を口にするを憚るものなり、今や之に向つて佞辯利口を逞うせんとするものあるに至る、豈慨嘆に堪ふべけんや」

昆野伸幸『近代日本の国体論…「皇国史観」再考』（ペリかん社、二〇〇八年）、米原謙『国体論はなぜ生まれたか…明治国家の知の地形図』（ミネルヴァ書房、二〇一五年）などを参考。

³¹⁸ 井上哲次郎と「教育と宗教との衝突」の経緯について、市丸成人「教育と宗教の衝突」考『教育哲学研究』（第八号、一九六三年）、六七―八二頁、関川悦雄「近代日本における人間形成の問題——内村鑑三「不敬事件」を中心にして——」『教育学雑誌』（第一〇号、一九七六年）、前川理子『近代日本の宗教論と国家…宗教学の思想と国民教育の交錯』（東京大学出版会、二〇一五年）、三二―三五頁、二八―三八頁を参考。

³¹⁹ 高山樗牛「日記及消息」姉崎正治、笹川種郎編『樗牛全集 改訂註釋』第七卷（日本図書センター、一九八〇年）、一三四―一三五頁。以下『樗牛全集』と略する。また、広島一雄「高山樗牛」『国文学解釈と鑑賞』（第三七卷第一号、一九七二年一月）、一三八頁。

と、内村に対して憤慨を極めた一方、他方では「嗚呼、我が国民の道義心、將に腐敗せんとせり、今にして高尚純潔なる道義心を国民思想に感銘せしめずんば、百歳の後、鼎の輕重を問ふものあるに至るや、未だ測るべからず」と、キリスト教によつて国民精神・道徳的混乱をもたらされた現状に厳しく批判した。そして「吾等は将来の我が文学が道義上の責任の甚だ輕からざる」という結論から見ると、樗牛は国民道徳・精神的統合に力を注がなければならないという自覚を持つようになったとも考えられる³²⁰。

後の東京帝国大学時期に井上哲次郎とともに『新編倫理教科書』（一八九七年）を編集した理由は、単なる恩師からの影響があっただけではなく、「吾人の安寧幸福は其細大に論なく、凡て社会の直接、若くは間接に与ふる所の恩恵に非ざるは無し。果たして然らば、吾人は社会に対して当に尽すべきの義務なかるべからず。即ち一身一家の利益のみを凶らず、博く社会公衆の爲めに其利福を増進せんことを務めざるべからず³²¹。」という節から窺えるように、樗牛自身の二高時代に生じた「我文学者が道義上の責任」にも求められる。

以上のようなコンテキストを明らかにした上で考えるのならば、樗牛が国体をめぐるキリスト信徒との論争に巻き込まれたのは、彼自身のひとつの積極的な選択であったと考えなければならない。

（二）「神国思想」と「家族国家観」

そもそも天皇制を中心とする国体論そのものは明治維新以後、国民国家形成

³²⁰ 高山樗牛「第一高等学校不敬事件」『文学会漫評』『樗牛全集』第二卷、一〇六頁。前掲論文広島一雄、一三八頁。

³²¹ 井上哲次郎、高山樗牛『新編倫理教科書』第三卷（金港堂、一八九七年）、五頁。長尾宗典『「憧憬」の明治精神史…高山樗牛・姉崎嘲風の時代』（ペリカン社、二〇一六年）、一六二頁。

期の文化的所産である³²²。その構成内容としては時代状況や解釈者次第でありながら³²³、当該期においては主に「神国思想」と「家族国家観」という二つの方面から考えられる³²⁴。それについては、当事者としての井上哲次郎の『勅語衍義』に鮮明に反映される。例えば、教育勅語のはじまり「朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」の解説として、井上は次のように説明する。

太古ノ時ニ当リ、瓊瓊杵命、天祖天照大御神ノ詔ヲ奉ジ、降臨セラレテヨリ、列聖相承ケ、神武天皇ニ至リ、遂ニ奸ヲ討ジ逆ヲ誅シ、以テ四海ヲ統一シ、始メテ政ヲ行ヒ民ヲ治メ、以テ我ガ大日本帝国ヲ立テ給フ。因リテ我ガ邦ハ神武天皇ノ即位ヲ以テ国ノ紀元ト定ム。神武天皇ノ即位ヨリ今日ニ至ルマデ、皇統連綿、実ニ二千五百五十年ノ久シキヲ経テ、皇威益々振フ。是レ海外ニ絶エテ比類ナキコトニテ、我邦ノ超然万国ノ間ニ秀ヅル所以ナリ³²⁵。

ここで井上は天皇の統治権を「天祖天照大御神ノ詔ヲ奉ジ」という神話・神勅に根拠づけた一方で、他方では「皇統連綿、実ニ二千五百五十年ノ久シキヲ経テ、皇威益々振フ」と、神話と歴史とを区別せずその連続性を強調し、皇室が日本を永遠に統治する歴史的・法的な根拠であるとした³²⁶。

³²² 小熊英二によれば、「国体論の起源は、江戸時代にも求められる。だが、その近代における隆盛は、一八九〇年の教育勅語の発布に始まる一八九〇年代」であるとし、「江戸時代の幕府体制は、身分も地域もこえて「日本人」が一大家族であるなどという思想には、依拠していなかった」、「国体論は、そうした封建体制を打破して国民国家が形成されたのち、はじめて公認のイデオロギーたりえるものだ」という。前掲書小熊英二（一九九五年）、五〇頁。

³²³ 「国体」の曖昧さを指摘するのは、昆野伸幸「近代日本の国体論…教育勅語・『国体の本義』・平泉澄」『近代』（第一〇六号、二〇一二年三月）、三〇頁を参考。

³²⁴ 葛西裕仁「平泉澄の国体論における「単一民族観」」『多元文化』（第一〇号、二〇一〇年三月）、二六六～二六八頁。

³²⁵ 井上哲次郎『勅語衍義』上巻（井上蘇発行、一八九一年）、一～二頁。

³²⁶ 天皇の権威を建国神話に求めることについて、前掲論文昆野伸幸、三二頁、前掲論文葛西裕仁、二六六頁を参考。

そして教育勅語における「爾臣民父母ニ孝ニ」という節に、井上は「国君ノ臣民ニ於ケル、猶ホ父母ノ子孫ニ於ケルガ如シ。即チ一国ハ一家ヲ拡充セルモノニテ、一国ノ君主ノ臣民ヲ指揮命令スルハ、一家ノ父母ノ慈心ヲ以テ子孫ニ吩咐スルト、以テ相異ナルコトナシ（中略）抑々子ノ父母ニ対シテ一種特別ノ親愛ヲ感ズルハ、元ト其骨肉ノ関係ヲ有スルニ由リテ起ルモノニテ、全ク是レ自然ノ情ニ出ツ³²⁷」と説明した。

井上は「一国ハ一家ヲ拡充セルモノ」という喩えを通して、皇室を国民の本家に位置付けた。その上で、井上は「父母ニ対シテ一種特別ノ親愛ヲ感ズル」、「全ク是レ自然ノ情ニ出ツ」と、作爲的な要素を排除して、天皇と臣民との関係が西欧社会のような契約関係ではなく、自然性に徹底する親子関係であると強調した³²⁸。

このように、神話・神勅に依拠した「万世一系」の天皇制と、血縁による「家族国家論」と合わせて井上の国体論の二つの軸は形成された³²⁹。かくして神話・信仰を共有し、そして血族を通して国民を繋がらせる国体論を支える前提は、日本の単一人種の構成論しかありえない³³⁰。

例えば、一八八九年の書『内地雑居論』に井上は日本人種が欧米人種に比べると、まだ「一等下劣」人種であるとし、「競争上常に敗を取る」と、社会進化論・優勝劣敗という理由と、「種々なる人種一国に雑居し、種々なる風俗宗教言語等同時に存在するときは、大に其国の合同力を損傷し、之を統治管理するを極めて困難なり」という社会管理上での理由と合わせて内地雑居に反対する³³¹。井上によれば、「内地雑居を許可」すれば、「実に非常なる急激の変動にして、日本古来の風俗、習慣、政治、文学、宗教其の他百般の事々物々をし

³²⁷ 前掲書井上哲次郎『勅語衍義』、一〇〇―一頁。

³²⁸ 家族国家論の特徴について、前掲論文昆野伸幸、三二頁、前掲論文葛西裕仁、二六七頁を参考。

³²⁹ 国体論の「軸」について、前掲論文葛西裕仁、二六八頁を参考。井上哲次郎の国体論について、森川輝紀「大正期国民教育論に関する一考察——井上哲次郎の国体論を中心に——」『日本歴史』（第四六三号、一九八六年二月）、六〇―七八頁を参考。

³³⁰ 前掲論文小熊英二（一九九五年）、五〇―五五頁。

³³¹ 前掲書井上哲次郎『内地雑居論』、一〇〇―一、一五―一七頁。

て一時に変動せしめ、以て遂に国家の基礎を破壊するの勢力あり、「国家をして累卵の危きに陥いらしむる所以」だという。ここで特に注目すべきなのは、井上の内村鑑三・キリスト教批判が一般的に論じられてきた一八九三年の論説「教育と宗教との衝突」に始まったのではなく、一八九一年の書『内地雑居論』にすでにあつたということである。『内地雑居論』によれば、「今日内地雑居を許すは実に日本の国体を破壊するの濫觴なり」、「第一高等中学校の教員中にも内村鑑三、木村某の如きは勅語奉読式の時に我が至尊なる天子の御影を拝せず、且つ衆人に告げて曰く是れは真正なる神に非ず、故に拝せざるなり」と、即ち我が天子を侮辱せり」という。井上は「内地雑居を許せば種々様々なる異種の宗教伝播して、日本の神明を排斥し、或は皇室に不敬を加ふる等のをありて、大いに日本国民の精神をして不愉快を感じしむるは明らかなり」と、「内地雑居」すれば「異種の宗教伝播」を広げて国体を損なうと考えたのである³³²。

そして二年後の論説「教育と宗教との衝突」に井上は内村鑑三不敬事件を機にキリスト教を批判しはじめた。当該書において『教育勅語』の国家主義精神とキリストの世界主義との対立を重点に置いた。井上によれば、「勅語の主意は、一言にて之れを言へば、国家主義なり、然るに耶蘇教は甚だ国家的精神に乏し、啻に国家的精神に乏しき而已ならず、又国家的精神に反する者あり、為めに勅語の国家的主義と相容れざるに至るは、其到底免れ難き所なり、(中略)耶蘇教は実に無国家主義なり」という³³³。つまり、井上は勅語を礼拝するかどうかの問題ではなく、原理上に教育勅語とキリスト教が対立するものとして捉えたのである³³⁴。

(三) 高山樗牛の日本主義とキリスト教徒の反撃

すでに指摘された通り、樗牛は『新編倫理教科書』の編纂に協力する過程で、井上の国家主義的倫理を消化・吸収し、日本主義の倫理をおもむるに鍛え上げ

³³² 前掲書井上哲次郎『内地雑居論』、三三、五八、六三、六七頁。

³³³ 井上哲次郎「教育と宗教との衝突」『教育時論』(第二八八号)、一八九三年一月二五日、一一〇頁。

³³⁴ 前掲論文森川輝紀、六一頁

ていった³³⁵。そのため、樗牛の日本主義と井上の国体論とはある程度の継承関係を有するように見える。例えば、樗牛は日本主義を井上の国体論のように、大日本帝国憲法・教育勅語と共に並行すると位置づけた。一八九八年の論説「国民精神の統一」に樗牛は日本主義の位置づけを以下のように説明する。

今日政治上の大綱は憲法によりて統一せられたり、教育上の本領は勅語によりて明にせられたり。然れども政治、教育は国民思想の全部に非ず、寧ろ其の表面上の一現象のみ。国民的意識を根底より統一し、是の憲法と勅語とに適應するの国民精神を陶冶するは、即ち是れ日本主義の本分に非ずや。国家の發達は民心の統一を須要とす。統一は主義を予想し、主義は国体と民性とに待つ。国民精神の統一に対する日本主義の責任実³³⁶に茲に存す。

政治と教育の領域での統一はそれぞれ憲法と勅語によって完成されたが、「国民精神を陶冶する」思想はまだなかったため、樗牛は日本主義を「国民精神の統一」の主義として現れたと強調する³³⁷。ここで西洋化・近代化に伴う思想混乱に堕ち入った国民は、思想的統一をもつて混乱する時代を乗り越えよう、そして国民共同体への強い志向が反映されるという点に³³⁸、日本主義と国体論が共有されている。しかし、ここで注目すべきなのは、樗牛の日本主義は国体論者を単純に継承するのではなく、前者に比べるとより精密化・具体化へと移行させるコンテキストが置かれたということである。

例えば、論稿「日本主義を賛する」に樗牛は「熟々本邦文化の性質を考へ、宗教及び道德の歴史的關係を審にし、汎く人文展開の原理に徴し、国家の進涉

³³⁵ 前田愛「井上哲次郎と高山樗牛」『幻景の明治』『前田愛著作集』第四卷（筑摩書房、一九八九年）、一一五頁。

³³⁶ 高山樗牛「国民精神の統一」『樗牛全集』第四卷、四二七頁。

³³⁷ ここで高田瑞穂は高山樗牛の日本主義を「日清戦争後日本の現実的自負と現実的不安とに対する理想的な国家像の提示」として捉えた。高田瑞穂「明治三〇年の日本主義——その本質と背景——」『日本近代文学』（第一八号、一九七三年五月）、五五頁。

³³⁸ 前掲書長尾宗典、一六三頁。

と世界の發達とに於ける殊遍相関の理法を認め、更に本邦建国の精神と国民的性情の特質とに照鑑し、我が国家の将来の為に、吾等は茲に日本主義を唱ふ。日本主義とは何ぞや。国民的特性に本ける自主独立の精神に拠りて、建国当初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道徳的原理、即ち是れなり³³⁹」という。樗牛に対して日本主義は単なる抽象的な精神だけではなく、後述するように、民族的宗教・道徳・歴史・文学・美術といった広い意味での人文を通して體現されたものだ³⁴⁰。樗牛によれば、「日本主義は大和民族の抱負及び理想を表白せるものなり³⁴¹」という。そのため、樗牛は「一切宗教は日本国民の性情に適切ならず。日本主義は是を以て宗教を排斥す」と、「国民性情」という理由と、「宗教と国家とは其の利害を異にす。之を以て日本主義は一切の宗教を排斥す」と、「国家利害」という理由と合わせてキリスト教に反対するのである³⁴²。

しかし、ここで問題となるのは、まさにこの「国民性情」と「国家利害」による「国家主義」とは何であつたのか、ということである。樗牛の攻撃に対して、キリスト教徒も直ちに反論を加えた³⁴³。日本基督組合教会の牧師渡瀬常吉（一八六七～一九四四年）からすれば、キリスト教は国家に反するのではない。それどころか、キリスト教は国家の興隆との緊密関係を有するものである。論説「日本の歴史と基督教との連絡」（一八九七年）において渡瀬はヨーロッパの国々の歴史を引用しながら、キリスト教が西欧諸国の勃興の動力とする一方、他方では「日本帝国は実に新進の帝国なり三十年前纜を解いて海洋に出でた

³³⁹ 高山樗牛「日本主義」『樗牛全集』第四卷、三二七頁。

³⁴⁰ 「日本主義」の特徴について、長尾宗典は、(一) 政教社の「国粹保存主義」の意義と限界を指摘しつつ、「日本主義」を明治思想史の正統に位置づける視点、(二) 「科学的研究」への強い志向、(三) アーリア人種とツラン人種の衝突という人種競争の観点から「日本主義」を訴えていく視点として捉えた。前掲書長尾宗典、一六四～一六六頁。そのなかで、「科学的研究」は人文研究と緊密的な関係を持つ。

³⁴¹ 高山樗牛「日本主義」『樗牛全集』第四卷、三三五頁。

³⁴² 高山樗牛「日本主義に対する世評を慨す」『樗牛全集』第四卷、三四四頁。

³⁴³ 高山樗牛とキリスト教徒の論争の経緯について、雨田英一は優れる研究を残した。同「高山樗牛の国家教育の思想・教育と国家と宗教（一～九）」『東京女子大学紀要論集』（第五二～五七卷、二〇〇一～二〇〇七年）に詳しい。また、前掲書小熊英二（一九九五年）、五九～六四、七〇～七二頁にも触れていた。本節は上記二者の研究によるものが多い。

る、「将来の国運を開拓せしむる者」と、キリスト教と将来日本の海外開拓と緊密に係ると考えた。その上で、渡瀬は「如何にして日本の歴史と基督教との連結を成就せんかは基督教徒に取りて決して軽視すべきの問題に非ず」とし、「其の連結の成否は日本国の運命と基督教の運命とに至大の関係ある」と主張する³⁴⁴。

日清戦争の勝利に伴って、海外進出を念頭に置きながら渡瀬はキリスト教と帝国拡張における重要な役割を演じようとする期待を持ったのである。とすれば、ここで渡瀬は国体論者との論争のなかで、「国民性情」と「国家利益」などの国家内部の要因、という国体論者の論点を引き継ぎつつも、それならむしろ国体論者はいかに海外に帝国の膨張という事態に対処すべきか、という方向にシフトさせようとしたのである。

その点について、次の稿「我が国是と宗教的信念」のなかでより明白になる。そこで渡瀬は「開国進取が我が永久の国是たるべき」と、海外拡張を支持しながら、「今や我が帝国は大に膨張せんとし、異種の民草をも加へて其の民と為さんとす、此の時に於て徒らに君民同祖の旨義を主張し同胞の意義を狭隘にせんと欲するは開国進取の精神を完うする所以に非ざる」と、国体論者による「君民同祖の旨義」が海外拡張に反し、とくに台湾領有による新版図における異人種をどのように帝国の臣民に回収させるのか、という問題があると指摘する。それゆえ、渡瀬は「国祖崇拜の主義を主張する者に同ずる能はず」、「独り国祖崇拜を以て之に代へんと欲する」ことは、「立国の大本を堅うし建国の理想を実行するの障害」だと国体論を厳しく批判した³⁴⁵。

そもそも幕末から明治初期に結ばれた諸条約の改正とその実施にともなう内地雑居、そしてそれによつて出現する可能性のある「帰化人」が家族国家論

³⁴⁴ 渡瀬常吉「日本の歴史と基督教との連絡」『六合雑誌』（第一九七号）、一八九七年五月一日、二〇九、二一一頁。

³⁴⁵ 渡瀬常吉「我國是と宗教信念」『六合雑誌』（一九九号）、一八九七年七月一日、二九九〜三〇〇頁。渡瀬常吉の高山樗牛に対する論説について、前掲書小熊英二（一九九五年）、五七〜五八頁、前掲論文雨田英一「高山樗牛の国家教育の思想・教育と国家と宗教（二）、三」（第五二巻第二号、二〇〇二年三月）、一五五〜一七七頁、（第五三巻第一号、二〇〇二年九月）、一〇七〜一二九頁を参考。

のジレンマを呈していたが、ここで台湾植民地の獲得によって可視的に浮上してきた「異人種」問題があらためて国体論批判的的になってしまったのである

346o

また、ここで特に注目すべきなのは、キリスト教徒ばかりではなく、そもそも憲法制定をめぐる論争に国体論擁護論者だった伊藤博文も純血による単一人種構成論としての国体論を放棄したということである。それについて、当時台湾事務局総裁を務めた伊藤は次のように述べる。

米国の例に由ればナショナルリターの統一に最も重きを置かるゝ国民の同種族たるを要すてふことは必ずしも然りとすべからざるに似たり。

然り民族の同一なることは固より望むべきことなり、然れども民族同

一なればとて必ずしも国民を為さず又必ずしも国家を為さず^{347o}

台湾領有とそれに伴う「異人種」の帝国への編入により、伊藤は「民族の同一」を帝国の発展の確保としてはできなくなると感嘆しつつも、アメリカを例として多民族帝国構成論へと移行させる可能性があると指摘する。実は、伊藤をはじめとする中央指導部の意見は、当時台湾事務局委員・外務次官であった原敬（一八五六～一九二一年）の「内地延長主義」、つまり法制度と教育政策による「同化」方針に変わったのである^{348o}。逆説的だが、そもそも憲法制定に

³⁴⁶ 山口輝臣「なぜ国体だったのか」酒井哲哉編『外交思想 日本のお外交』第三卷（岩波書店、二〇一三年）、六三頁。

³⁴⁷ 伊藤博文「台湾会に於ける伊藤侯の演説」『大阪毎日新聞』、一八九七年四月二四日、二頁。

中川未来「内藤湖南の台湾統治論」明治中期の国粹主義思想と植民地『日本思想史学』（第四号、二〇一二年）、二一三～二四頁。

³⁴⁸ 台湾人の同化政策について、石田雄「同化」政策と創られた観念としての「日本」（下）『思想』（第八九三号、一九九八年一月）、一四一～一五〇頁、陳培豊『同化』の同床異夢…日本統治下台湾の国語教育史再考』（三元社、二〇〇一年）、五五～六〇頁、駒込武「異民族支配の〈教義〉…台湾漢族の民間信仰と近代天皇制のあいだ」大江志乃夫など編『岩波講座近代日本と植民地 統合と支配の論理』第四卷（岩波書店、一九九三年）、一三七～一五五頁、小熊英二「国民」化という支配—多民族帝国としての「日本国民」概念『歴史学研究』（第六九〇、一九九六年一〇月）、一〇一～一一〇頁、同『日本人』の境界…沖繩・アイヌ・台湾・

において伊藤は「固有ノ国体ハ憲法ニ由テ益々鞏固ナルコト³⁴⁹」と、国体論擁護論を明白に表したが、ここで植民地政策への配慮のために国体論を意図的に回避するしかなかった。

一方、国体論者内部での差異をも呈してくる³⁵⁰。例えば、「宗教と教育の衝突」事件の仕掛け人としての井上哲次郎はキリスト教徒の強い非難を浴び、結局『国民之友』に「教育時論に投稿したる「教育と宗教との衝突」は全く一時の談話を敷衍したるものにて其文も未だ完備せず且つ引例中多少不確なるもの有之候追て正誤致し一冊子として世に公にする積に有之候故君の御批評は其上にて充分被成下度候勿々不備」と、自ら「敗北状」を認めざるを得なかった³⁵¹。

また、同陣営の湯本武比古（一八五六～一九二五年）は「我が国家は、大和民族のみを以て構成せられ、次第に異民族をも包含せりと雖も、此等異民族は、皆必ず日本化したるものにして、決して異民族として、其莽倫道義を、保持するものにあらざるなり³⁵²」と、異民族を日本化することを考えはじめた。そして同陣営のもう一人である木村鷹太郎（一八七〇～一九三二年）も「其地の人民を教化して全然日本精神の人民となし、日本本土の民と同一の感情を懐く所のものとなさざる可からず」と、同化の政策を進めたのである³⁵³。

その意味では、海外膨張に伴う「異人種」問題をどのように国体論に回収させるかという問題を検証する際に、樗牛の論説「我が国体と新版図」は重要な意味を帯びてくる。樗牛によれば、「我が国体の宇内に冠絶せる」且つ「天下無双」であるという。なぜならば、「皇祖建国の初より、万世一系の天皇、億

朝鮮植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、一九九八年）の第四章「台湾領有…同化教育をめぐる葛藤」、七〇～一〇九頁に詳しい。

³⁴⁹ 伊藤博文『帝国憲法義解』（国家学会、一八八九年）、一頁。

³⁵⁰ この点について、前掲書小熊英二（一九九五年）、六二～六三頁を参考。

³⁵¹ 井上哲次郎「学者とは何ぞ」「国民之友」（第一二巻一八六号）、一八九三年四月三日、四〇頁。また、前掲論文前田愛、一二六～一二七頁。

³⁵² 湯本武比古「日本主義発刊に就きて」『日本主義』（第一号、一八九七年五月二〇日）、二二～二四頁。前掲書小熊英二（一九九五年）、六二頁。

³⁵³ 木村鷹太郎「台湾島道伝記」『日本主義』（第一号、一八九七年五月）。前掲書小熊英二（一九九五年）、六二頁。

兆に君臨しに一日も帝座の空しきこと無く」ことだからだ。そして「我金甌無缺の国体」の基盤として、樗牛は「其の国民は概ね神孫皇族の末裔」に起因するのだと主張し、それを「外邦に見る如く、数多の異人種群集し、契約若は強迫によりて君臣の関係を定め」るものと「日を同うして論ずべからざる」とする。つまり、ここで樗牛は「異人種群集」が「契約」や「強迫」なものによるのだと、「外邦」を作為的・非自然化の権力関係に帰着させる一方、他方では日本の国体を「一国と一家との比較」による喩えを借り、「皇室は宗家にして、臣民は末族なり、建国当初の家長制度は、二千五百年を経由し」と、日本の国体を無作為・自然化に徹底する親子関係に訴えたのである。一般的に論じられてきた国体論における「神国思想」と「家族国家論」は、樗牛の論説の冒頭で再確認された³⁵⁴。

しかし、すでに述べられたように、キリスト教徒の非難に対して、以上の伝統的「国体論」はむしろ無力だった。それを意識した上で、樗牛はキリスト教徒の論が「一見甚だ理あるが如し、然れども吾人を以て是を看れば、未だ事実を尽さざるの論のみ³⁵⁵」と、その説の成否を置いて、国体論を別の文脈に置いて検討することを示唆している。

では、樗牛は「異人種」と国体論とをいかにして整合的に結びつけたのだろうか。樗牛はまず「内面的」と「外面的」という二つの角度、具体的に言えば「人類共同の思想」と「国民の特性」から「国家」概念を絞って議論を進めていく。「人文の發達は一面に於て人類共同の思想を催起するに於て大なる勢力あり」と、樗牛は「人類共同の思想」を認めながら、「一面に於て人類及び国民の特性が、為に一層明白なる睽違を發展し来りたる」と、「国民の特性」をも強調する。「前者は内面的はた理想的生活に於て人類に平等性を開拓し、後者は外面的はた實際的生活に於て差別性を促進し来る」。ここで樗牛は国家の「内面」と「外面」をそれぞれ「平等性」と「差別性」から弁証的に捉えたのだが、「吾人の内面的生活の範圍を超えて、直に社会の實際的主義となり得

³⁵⁴ 高山樗牛「我が国体と新版図」『樗牛全集』第四卷、三六三～三六四頁。前掲書小熊英二

(一九九五年)、五九頁。前掲論文林正子(一九九八年二月)、三一三～三一四頁。

³⁵⁵ 前掲論文高山樗牛「我が国体と新版図」、三六五頁。

るの時あるを信ずる能はず」と、その「内面的生活範囲」における「共同的理想」或いは「平等性」は「社会の实际的主義」の領域に論じられるべきではないと主張する³⁶⁶。ここで樗牛が批判したかったのは、まさに世界主義・平等主義を掲げるキリスト教徒らは、国家の「内面」と「外面」を渾淆したということである。

樗牛によれば、「国家は実権の上に立つ、実権の強弱は即ち勢力の範囲を規定す。苟も一国家を結成する所以の約束は、実際上是の実権に存す。故に国家と国民との関係は、即ち實際上全く権力関係に外ならず。是の如き関係は、人種、歴史等、種々の事情によりて親疎一ならずと雖も、要は主権を離れて団結無し³⁵⁷」という。同論説の冒頭で樗牛は「金甌無缺の国体」を「一国と一家と」の関係として述べられていたが、ここでその逆面に転換させ、国家の結成が「実権」によるものだと考えた³⁶⁶。よって、「家族国家論」に代わり、「一国が其の新版図に対し、其の属邦たるの実益を収めむと欲せば、主として権力関係を以て是れに臨まざるべからず³⁶⁸」と、樗牛は「実権」を通して「新版図」を収容するほかないと主張する。しかし、樗牛は「実権」と「国体」を矛盾的に捉えるのではなく、その二者はむしろ互いに影響を与え、その内実を深める関係である。「君民同祖、忠孝一致の国体は、其の強盛なる祖国觀念に於て何物か是れに比肩し得べき。国勢拡張の前途に於て、権力関係上、所謂の幹部若しくは主脳となりて外力の抵抗を排除し、若しくは既に征服したるものを統率するに於て、何物の力か能く之に匹敵し得べき」と、樗牛は国体論が対内的統合をもつて対外拡張する権力を生み出すものであると考えた³⁶⁶。その意味では、樗牛は国体が「基督教徒の杞憂するが如き、国勢の拡張に不利ならざるのみならず、

³⁶⁶ 同右、三六五～三六六頁。

³⁶⁷ 同右。

³⁶⁸ 小熊英二によれば、ここでこそ「親子の情という美名で権力支配を隠蔽する国体論が、新領土には延長できないことを露呈」し、「国民の慈父という天皇の仮面がはぎとられ、むきだしの権力関係があらわれてしまう」。前掲書小熊英二（一九九五年）、六〇～六一頁。

³⁶⁹ 前掲論文高山樗牛「我が国体と新版図」、三六七頁。

³⁶⁶ 前掲論文高山樗牛「我が国体と新版図」、三六七頁。前掲書小熊英二（一九九五年）、六〇頁。

実に其の最大至要の条件」と、国体論と海外拡張との一致性を訴えた。³⁶⁰

(四) 「単一人種構成論」と「多人種構成論」

樗牛の「我国体と新版図」が公刊され次第、『日本主義』では「耶蘇教一派の論者高山氏の所論を熟読せば、その謬見を破るに余りあらむ³⁶²。」と高く評価されたが、国体論者とキリスト教徒との論争の勝敗について、決してそれほど明瞭な形で語られない。樗牛自身の論理的帰結としての稿「明治思想の変遷」(一八九八年)を冷静に見るのならば、キリスト教徒の論を全面的に否定したのではない。そこで樗牛は、「基督教徒にもそれ〴〵道理の取るべきあり」、「何れを全勝、何れを全敗とは決し難かりし」と、キリスト教徒にある程度の評価を与えたように見える。³⁶³

では、なぜそうだったのか。

「人種」問題について、一見すれば国体論者とキリスト教徒は大きな衝突が起こったかのように見えるが、磯前順一が論証したように、実に二つの側は全く排他的な関係にあるのではなく、むしろ共有される思考の構造が存在する。なぜならば、それは国民国家日本から帝国日本へと移行する間、帝国のあり方をめぐる論争であり、帝国そのものに疑問を抱かなかったからである。そもそも台湾割譲や韓国合併の日本が帝国という国家制度をとる以前から、自民族の優越性を前提とする「単一人種構成論」と侵略性を帯びる「多人種構成論」が併存していたという歴史的言説があった。この二つの理論はお互いに対抗しながらも、日本の知識人と政治家の中で相補い合いながら共存していた言説なのである。台湾割譲や韓国合併など、日本が海外植民地を獲得する帝国主義体制に乗り出す前から、帝国主義を正当化する国体論のような言説がすでに登場し

³⁶¹ 前掲論文高山樗牛「我が国体と新版図」、三六九頁。前掲書小熊英二(一九九五年)、六〇頁。

³⁶² 著者不詳「我国体と新版図」「時評」『日本主義』第七号(一八九七年一月二〇日)、九五頁。小熊英二(一九九五年)、六〇頁。

³⁶³ 高山樗牛「明治思想の変遷」『樗牛全集』第四卷、二九五頁。

ていた事実は、近代西洋的な国民国家制度の性質を考える上で示唆に富む³⁶⁴⁾。しかしその一方で、「人種」的異質な要素を徹底的に排除するという形で「日本国民」を作るのは、帝国の膨張という事態に対処できなかった³⁶⁵⁾。そのため、「多人種構成論」も最初から様々な理由によって唱えられてきたのである。例えば、明治初期に自由主義経済学者である田口卯吉は、文明開化と殖産興業を推し進めるために、「内地雑居論」を唱えていた。そしてその歴史的根拠づけたのは、古来日本は「支那」、「三韓」などの異民族を含んだ「多人種構成論」であった。また、台湾領有を機にキリスト教徒は「血族」擁護論である国体論者に攻撃した時に、「海外膨張」という「国是」を楯に「多人種構成論」を出したのである。同時期の帝国大学の系統も新学術の開拓に伴い、「混合人種構成論」を唱えた。例えば坪井正五郎（一八六三―一九一三年）をはじめとする最初の人類学者たちは「アイヌ」と「琉球人」を対象とする辺境調査、そして国史科に朝鮮半島進出を背景に歴史家や言語学者に提唱される「日鮮同祖論」もそうである³⁶⁶⁾。したがって、キリスト教徒の論法は樗牛に攻撃されたような「非国民的」なものとして当時の日本社会から弾圧されたわけではなかった³⁶⁷⁾。事実、一九一〇年代に海老名弾正と渡瀬常吉はともに朝鮮総督府に頼まれた宣

³⁶⁴⁾ 日本帝国の「単一人種構成論」と「多人種構成論」の言説論理について、磯前順一「近代日本の植民地主義と国民国家論——津田左右吉の国民史をめぐる言説布置——」『思想』(一〇九五号、二〇一五年七月)、一〇九頁を参考。

³⁶⁵⁾ 前掲論文小熊英二、一〇三頁。

³⁶⁶⁾ 田口卯吉の「内地雑居論」について、本論の第二章第一節を参考。キリスト教の「日本人多人種構成論」について、前掲書小熊英二（一九九五年）の第三章「国体論とキリスト教」、四九―七二頁を参考。人類学者の辺境調査について、前掲論文富山一郎を参考。「日鮮同祖論」について、本論の第二章第三節にも触れていたが、より系統的研究として、前掲論文三ツ井崇、前掲論文沈熙燦を参考。

³⁶⁷⁾ 実は、「多民族構成論」を持つ久米邦武も同様な歴史経験があった。前掲論文磯前順一、一一〇―一一二頁。

教を推進し、帝国政府側から高く評価を受けた³⁶⁸。

以上のように、国体論を含んだ「単一人種論」とキリスト教徒を含んだ「混合人種論」は長期にわたって併存してきた³⁶⁹。それは近代国民国家建設の模索の様子を反映する一方、他方では転換期における帝国日本の不安定性をも呈してくる。しかし、このような局面は日韓合併（一九一〇年）までしか維持されてこなかった³⁷⁰。なぜならば、それまでの北海道開拓・琉球征服・台湾領有などに対して、「区区たる新版図³⁷¹」を人数上の少量として捉えてきたと反対に、朝鮮合併による帝国総人口三割以上に占めており、一千万以上異人種を帝国版図に吸収させた上で、「単一人種構成論」を堅持するのは無理だからだ³⁷²。その象徴的な人物として、井上哲次郎があげられる。日韓合併後、一九一二年の『国民道德概論』に彼は以下のように述べた。

兎に角今日の処では、朝鮮人を始め幾多の異民族が領土内にあつて、風俗、言語、思想、其他種々の点に於て違つた処がある。併ながら彼らは日本国民といふ点からいふと、皆無勢力であります。即ち彼等は皆戦敗者である。（中略）是等は皆、教育に因りて、日本民族の風に同化せられて了ふべきものである。是れは日本国民の統一の必要から起るべき事³⁷³。

ここで井上は帝国範囲内における異人種の事実を認めた上で、「単一人種構成論」をやめ、「異人種」を排除するのではなく、教育上での同化政策を出し

³⁶⁸ 海老名弾正と渡瀬常吉の朝鮮布教について、韓哲曦『日本の朝鮮支配と宗教政策』（未来社、一九八八年）の第二章「日本キリスト教の朝鮮布教」、八四～一五五頁に詳しい。海老名弾正におけるキリスト教精神と帝国意識について、吉馴明子『海老名弾正の政治思想』（東京大学出版会、一九八二年）、一九二～二〇〇頁を参考。

³⁶⁹ 前掲論文磯前順一、一一一～一一五頁。

³⁷⁰ 前掲論文小熊英二、一〇三頁。

³⁷¹ 前掲論文高山樗牛「我が国体と新版図」、三六八頁。

³⁷² 小熊英二（一九九五年）、七二頁。

³⁷³ 井上哲次郎『国民道德概論』（三省堂、一九一二年）、七三頁。前掲論文磯前順一、一一二頁。

たのである。事実、樗牛もまさに日清戦争後の「大日本帝国膨張」を見越して「基督教徒にもそれ／＼道理の取るべきあり」と考えたのである。それどころか、人文研究に重点を置かれた日本主義には、樗牛は井上より早く「単一人種構成論」を改めて神話と歴史の研究を海外拡張・帝国膨張の「国是」に相応させようとした。

第二節 「神話」研究と南洋進出

(一) 「神話」による人種への着目

国体論争における人種問題と海外膨張との矛盾を意識した上で、樗牛は日本の神話研究を借りて解決策を求めようとした。その主な内容は一八九九年の二つの論説「古事記神代巻の神話及歴史」と「植民的国民としての日本人」に集中されているが、日清戦争以来、樗牛の歴史的・比較的方法論に基づいた人文研究の提唱をも視野に収めなければならない。

例えば、一八九五年の稿「東西二文明の衝突」で樗牛は、「東西二文明の接触が漸く政治社会を去りて、文学美術の境域に移りつつあるは、吾れ人の大に注意すべき」と呼びかけ、その関心が「政治社会」のような現実的領域から「文学美術」のような精神的な領域へと転換したことを看破できる。その上で、樗牛は「文学美術の境域」に「適當の準備を懈らざること」が「吾人」の「当然の責務」であると主張する³⁷⁴。ただし、ここで樗牛があげた分野、例えば「演劇」、「美術」、「文学」（その中に細分化された「文体、国字、語法」も含まれる）、「倫理」、「宗教」、「教育」からすれば、この「文学美術の境域」は今日でいう「文学」と「美術」だけではなくて、広い意味での「人文」を指すのである³⁷⁵。

この時期、樗牛の人文研究への注目は、その時代背景と緊密に関係する。長

³⁷⁴ 高山樗牛「東西二文明の衝突」『樗牛全集』第四卷、一三六。前掲書長尾宗典、一八頁。

同「高山樗牛の「日本主義」思想——日清戦後期における「国家」と「美学」——」『日本歴史』(第六六七号、二〇〇三年十二月)、五三頁。

³⁷⁵ 前掲論文高山樗牛「東西二文明の衝突」、一三六―一三七頁。

尾宗典が指摘したように、明治中・後期の時代が、明治初期から形成されてきた国民主義的な思想構造と昭和前期における超国家主義的な思想構造とを架橋する、近代日本のナショナリズムの転機であるからだ。官僚閥と政党との提携による「明治憲法体制」の形成、重工業を中心とする資本主義の成立、不平等条約の改正等々の様々な要因が含まれていることは論を俟たないが、一方で、思想の第一次的な生産と消費に最も敏感に関わっていったと考えられる知識青年の間で、ネーションの中核を構成する民族意識に関わる諸価値——言語、宗教、伝統、美術——への関心も、かつてないほど高まっていた³⁷⁶。樗牛にいわせると、「国運の隆盛と共に、吾人は世界の一大国民として自己を認識し、同時に世界人類に対する関係的位置を知らむを望む。我が民族特性論の今日に喧しきは敢て怪むに足らざる也³⁷⁷」という。

かかる状況で、樗牛は「凡て民族の特性は、其の民族の原的状态に於て最も明白に顕はる」と考え、その注目を記紀神話に注ぐのが、当然の成り行きである³⁷⁸。

「従来我邦の国学者は、是の書載する所を以て神聖犯すべからずとなし、吾人に向つて其の神話的伝説をも文字通りに信憑すべしと訓へたりと雖も、是の如きは我が神聖なる国体に関する誤謬の思想に本けるもの也。吾人の眼より見れば、是の如き浅薄なる根拠の上に、我が神聖なる国体を説かむとするものこそ、却て大に不敬なりと云ふべけれ³⁷⁹」と、樗牛は彼自身が代弁する国体論の陣営から離れて、記紀神話研究の自由を求めようとした。ただし、朝鮮半島進出を目的とする「日鮮同祖論」と異なり、樗牛は日本民族「南洋起源説」を唱えた。

一八九九年三月『中央公論』に掲載された「古事記神代卷の神話及歴史」は「概論」、「神代卷の神話」、「日本民族の起源及遷徒」の三節からなり、それぞれ

³⁷⁶ 前掲書長尾宗典、一八頁。

³⁷⁷ 高山樗牛「日本民族の特性と文学美術」『樗牛全集』第二卷、三四頁。

³⁷⁸ 同右、三五頁。高山樗牛と神話研究について、本節に参考となる先行研究として、前掲論文広島一雄、平藤喜久子「日本における神話学の発生と高山樗牛——日本主義との関わりを中心に——」『国学院大学紀要』（第四三号、二〇〇五年）、一四一—一五六頁が挙げられる。

³⁷⁹ 前掲論文高山樗牛「古事記神代卷の神話及び歴史」、四三七頁。

れ研究方法、研究内容、研究結論という順に展開させた。従来、樗牛の「古事記神代巻の神話及歴史」は日本主義との関連で論じられてきたが³⁸⁰、樗牛はその論説の本論に入る前、「茲に一言を要する事あり。人種問題を規定するの預件は、予が本論に於て関はれるもの以外にも是れあり³⁸¹」と提示したように、神話が人種を規定した手段として強調した。

一方、久米筆禍事件以来、封印された神話研究は樗牛の論説により再開し、神話研究をめぐる歴史観と方法論についての大論争が行われ、「日本神話学發生の年」とされた³⁸²。樗牛の親友姉崎正治をはじめとする数多くの論者がこの論争に巻き込まれが、樗牛は終始一言の反論をしたこともなく、逆に神話論争と距離を置き、「植民的国民としての日本人」を書き、海外植民を進めた。それは、神話研究そのものと、神話研究をいかに海外膨張の国是と対応させようとするものとの二者の着目点が異なっていたことにはかならない³⁸³。よって、樗牛の神話研究は、日本主義より、国体論争における台湾問題、そしてそれによる異人種問題という文脈に置いて検討しなければならない。以下、樗牛の「神話」論述を辿りながら、それによる日本人種の起源と変遷を解明していく。

(二) 「日本民族南洋起源説」とその展開

樗牛はまず「神話歴史両者の混淆なり」、「如何なる方法によりて混淆せるか」と言ふに、初めは純然たる神話に起り、漸次純然たる歴史に轉移せるものと見

³⁸⁰ 前掲論文広島一雄、前掲論文平藤喜久子は代表的なものである。しかし、本論では高山樗牛の神話研究は、日本主義より、人種論との関係が強いと主張する。なぜならば、神話研究の「日本人多人種構成論」と日本主義の「日本人単一人種構成論」とは明らかな矛盾があったからだ。

³⁸¹ 高山樗牛「古事記神代巻の神話及び歴史」『樗牛全集』第三卷、四二七頁。

³⁸² 高木敏雄「日本神話学の歴史的概観」『帝国文学』（第八卷第五号）、一九〇二年五月一日、一六頁。当時、高山樗牛神話研究をめぐる論争について、前掲書平藤喜久子、一四一〜一四七頁を参考。

³⁸³ 高山樗牛の神話研究と海外殖民との関係について、小熊英二（一九九五年）、六四頁、前掲論文平藤喜久子、一五一〜一五二頁を参考。

む」と、神話と歴史との関係を論じていた³⁸⁴。そもそも国体論は、記紀の神話と歴史を区別せずに万世一系の天皇制と根拠づけられてきたが、「科学的研究」という名義の下、橿牛は国体論者との違いを強調しながら、「須佐之男命の出雲行まで、即ち旧事本記の区劃に隨えば、神祇本紀の終りまでは、神話の分量、歴史よりも多く、其れより以下は逐次歴史の分量多きを占め、遂に神武天皇に至りて純然たる歴史に遷れる」と、須佐之男命の神話を境として、神話と歴史とを分けた³⁸⁵。その上で、橿牛は記紀神話が「アリアン諸民族に見る如き天地開闢説に連なれる太陽神話」であるとした。従来、天皇制の神性の確保として理解されてきた記紀神話を、橿牛は一般的に見られる世界諸民族とともに共有されるものすぎないと降格させた。橿牛によれば、「多くの民族に所謂神話の生起せる所以にして、我が諾冊二神及び其の三貴子に関する伝説も、畢竟是の神話に外ならざる也」という³⁸⁶。世界各民族の神話伝説を視野に収めながら、橿牛は「比較研究」という方法論を以って、記紀神話の論述を展開させていく。

橿牛によれば、伊弉諾尊と伊邪那美はそれぞれ天神と地神であり、それは「希臘の神話に於て是を見る。即ちウラノス (Uranos) は天の神也、而して同時にガイア (Gaia) は地の神也。是の二神の結婚によりて自餘の神を生ずるは、正に諾冊二尊ありて後、日、月、嵐の諸神の生れたると其の経行を等しうす³⁸⁷」という。

橿牛は記紀神話とギリシア神話とを平行的に論じており、伊弉諾尊と伊邪那美はギリシア神話のウラノスとガイアのような天神と地神であり、二者の結婚により誕生した天照 (アマテラス)、月読命 (ツクヨミ)、須佐之男命 (スサノヲ) 三神は、それぞれ太陽、月、嵐の神であると主張し、いずれも自然化された神として捉えたのである³⁸⁸。橿牛によれば、「太古の民族が擬人法によりて自然現象を説明せむとするに当り、先づ天地より日月及び暴風雨に及びて、幾

³⁸⁴ 前掲論文高山樗牛「古事記神代卷の神話及び歴史」、四二五～四二六頁。

³⁸⁵ 同右、四二六。前掲論文平藤喜久子、一四三頁。

³⁸⁶ 前掲論文高山樗牛「古事記神代卷の神話及び歴史」、四二六、四三二頁。

³⁸⁷ 同右、四二八頁。

³⁸⁸ 前掲論文平藤喜久子、一四三頁。

多の自然的神を想像するは、蓋し人性の本然に出づ³⁸⁹」という。

すでに指摘のあることであるが、樗牛の神話研究は、当時ヨーロッパにおいて神話学を牽引していたマックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 一八二三―一九〇〇年) の影響が色濃く見られる。ミュラーの研究方法の特徴としては、神名の比較による語源探求を重視したこと、日の出や日没といった太陽の動きを中心とする自然現象を表現していた言葉の本来の意味が次第に忘れられ、誤解されたことによって神話が発生したと考えたことを挙げることができる³⁹⁰。しかし、方法論より、樗牛は「日本民族の太古史に於ける最も重要な問題」が「出雲民族及び天孫民族の故郷は何処なる乎³⁹¹」と設定した。

樗牛まず「出雲民族も天孫民族も、共に其の起源を海洋中に有する」と考えた。なぜならば、「古事記の神話は、淤能基呂島の成立と云ひ、伊弉諾尊の御滌と云ひ、菟と和邇の話と云ひ、海に関するもの甚だ多し。其の神の名にも海に縁あるもの少からず」からだ³⁹²。つまり、樗牛は語源に着目し、海に関するものが多いと、神の名も海との縁があるという理由によって日本民族の海洋起源説を唱えたのである。その上で、樗牛はさらに「最初の故郷は南太平洋」だと主張する。その理由について、以下の四点を挙げた³⁹³。

まずは潮流である。樗牛によれば、「日本民族の遷徙」は「潮流を利用せり」、「南方より日本に向かへ」、「其の起点はフィリピン群島の北部に発し、台湾、琉球群島の東部を経て北流」したという。

次は「神代巻に北方の自然現象少なき事」である。樗牛は日本人種が西方また北方の人種ならば、その神話には「必ず北方の自然現象を其中に包含」されたと考える。しかし、「和邇、海霧の南方の物象多し」ものの、北方のものは「沫雪」の一語しかなかった。

そして、「ポリネシア神話及び伝説と古事記と類似多き事」である。樗牛はポリネシアの神話に「天神タンゴラ、天より絲を垂れて海底の地を釣る、然れ

³⁸⁹ 前掲論文高山樗牛「古事記神代巻の神話及び歴史」、四三二頁。

³⁹⁰ 前掲論文平藤喜久子、一四四頁。

³⁹¹ 前掲論文高山樗牛「古事記神代巻の神話及び歴史」、四三七頁。

³⁹² 同右。

³⁹³ 同右、四三八―四四三頁。また、前掲論文平藤喜久子、一四三―一四四頁。

ども絲、常に半ばにして切断す。故にポリネシア群島成れり」という記述があり、「前者は天の瓊矛の滴りによりて成れる淤能基呂島の伝説に似、後者は隠岐風土記にある本島と隠岐との接絲断絶せりとの話に似たらずや」と考えた。よつて、「南太平洋の古民族は日本民族との間に、多少の因縁ある」と、樗牛は主張した。

最後は、「印度吠陀の神話と、古事記の神話との類似」である。ただし、樗牛は二者が「神話上に於て同一系統を有」するが、ポリネシア人種を「第三者」として介して吠陀神話を撰取したと考えた。樗牛がインド人種と日本人種との直接的関係性を避けたのは、後述するように、インドに起源するアーリア人種と対抗するアジア主義政策をとったからである。よつて、樗牛は日本人種を「東南亜細亜のチュラニアン人種一派は、印度多島海を経て是れに移り、是を中心として全ポリネシアより北方に遷移せるもの」³⁹⁴とした。

以上は、樗牛の神話研究とそれによる日本人種南洋起源説である。樗牛の神話研究が発表されるやいなや、大きな波紋を呼んだ。例えば、言語学者である高橋龍雄（一八六八―一九四六年）は、樗牛の日本民族南洋起源説について、日本語の解釈が不明であると指摘しつつも、「歴史」と「神話」を区別にした神話研究そのものが「科学研究」として評価を与えた³⁹⁴。また、『帝国文学』の編集委員である高木敏雄（一八七六―一九二二年）は樗牛の研究の発表の「明治三十二年は、日本神話学発生年として、神話学史上記憶す可き年紀なり」とし、「神代史の自由研究は、公許せられしものと認めて」、「満腔の歓喜の情を以て」祝すると、樗牛の神話研究の意義を高く評価した³⁹⁵。一方、樗牛の親友である姉崎正治は、「ミユラー等の説明は、ドグメントに忠実ならざる牽強なり」と批判し、「日本宗教の祭儀を重んじ清浄を尊ぶ俗ある事実の反映にして、天然神話といふよりは、寧ろ人事神話にあらずや」と、樗牛の自然神話の

³⁹⁴ 高橋龍雄「高山林次郎氏の「古事記神代卷の神話及び歴史」を読む」『日本主義』（第四卷第二三号、一八九九年五月）、一四―三〇頁。前掲論文平藤喜久子、一四四頁。

³⁹⁵ 前掲論文高木敏雄「日本神話歴史学の歴史的概観」、一六頁。同「文界の新現象」『帝国文学』（第五卷第四号）、一八九九年四月九日、一〇八―一〇九頁。前掲論文平藤喜久子、一四二頁。

解釈体系に真つ向から反対し、「人事神話」を唱えた³⁹⁶。

褒美であれ批判であれ、樗牛の神話研究が多くの関心を集めたものの、彼自身は神話研究の内容や方法を絞って議論を一步より深く進めさせていなかった。それに代わり、樗牛は「植民的国民としての日本人」を書き、神話による日本人種南洋起源を借り、日本人の海外植民を鼓吹するようになった。

一八九九年三月に『太陽』に掲載された「植民的国民としての日本人」に、樗牛は冒頭で「今や日本人は、植民的国民として自己の天職を試むべき機運に到着せり」と、海外植民を「自己の天職」とした一方、他方では「吾人の祖先が植民的民族として歴史上最も顕著なる成功を留めたるの事跡を緬思する、必ずしも閑事業に非ざる」と、神話研究の意義が海外植民にあるのだと解した³⁹⁷。樗牛は神話研究の成果を引用しながら、「日本民族の幹部たる天孫人種と出雲民族とは、遠洋より来りて是の土に植民したる」とし、そもそも「雄心鬱勃たる冒険的民族」であり、その後の「神武東征」、「三韓の討伐」などの事件からみれば、「爾來歴世の帝王、事に臨みて遠征を辞せず」、「征服的国民の意気尚ほ蔚然として盛なりしを見る」と賛称した³⁹⁸。

しかしその一方で、樗牛は「天智以来、朝鮮一帯に於ける我が海上の権力は殆ど全く失墜したるより」、「海外進取の開闢なる政略を断念し」、「遂に絶対的鎖国主義を取るに至たれり」と批判し、さらに「膨張的精神の衰退を以て、日本歴史上の最大恨事となす」と感嘆した。「然れども人種の根本的性質なるものは、何物の力も得て雍塞する能はざる」と、樗牛は日本近世の海賊と貿易の事例を引用しながら、「海洋国民の冒険的先天的精神は、最早や国家の力を假らず」、「日本民族は由来植民的征服的はた航海的民族なり」と、樗牛は日本人の海外植民の力をその「人種の根本的性質」に求めた。そして、明治維新以来、「三百年來久屈の反動として、海外的精神の勃然として国民の間に興起し」、「植民的事業は日本国民の先天的特性なることを自覚するは、事業の成功を期待する上に於て、国民の最も須要とする所ならずむばあらず」と、樗牛は明治

³⁹⁶ 姉崎正治「素戔嗚尊の神話伝説」『帝国文学』（第五卷八号）、一八八九年八月九日、四、

二二頁。また、前掲論文平藤喜久子、一四五頁。

³⁹⁷ 高山樗牛「植民的国民としての日本人」『樗牛全集』第四卷、四二八頁。

³⁹⁸ 同右、四二九～四三〇頁。

以来の海外進出を記紀神話に表現された「民族特性」に帰着させたのである³⁶⁹⁾。

従来、日本人種を劣等人種とする裏づけとしての南洋起源説が語られてきたが³⁷⁰⁾、樗牛はそれを以て「膨張的」、「植民的」、「征服的」な優等人種へと逆転させた。事実、「南洋」を普遍的「野蛮」と「未開」とされた認識状況で³⁷¹⁾、樗牛が敢えて「日本人種南洋起源説」を唱えたのは、当時の時局のなかに確認しなければならぬ。一方では、日本は国運を賭けて日清戦争の勝利を収め、ようやく極東の大国の地位を確立した。他方では、ドイツ、ロシア、フランスが、下関条約に基づき日本に割譲された遼東半島を清国に返還することを要求し、「三国干渉」が起こり、西洋列強側が強く日本の膨張を警戒した。それらを背景に、樗牛の「日本人種南洋起源説」は、朝鮮半島を中心とする「北進」政略が大きな挫折を経てから生じたものにほかならない。

そして戦後「台湾経営」というスローガンの下、明治二〇年代に生じた「南進論」が明治三〇年代に台湾領有のためにいつそう議論を引き起こしつつあった³⁷²⁾。「我国は今日に当たり、北守南進の国策を確定し、(中略)南方経営の実を挙げ、以て国家百年の大計を講ぜざる可からず」と、当時の元老松方正義(一八三五―一九二四年)が言ったように、対露調和・対英対決を柱とする「北守南進」論は明治政府の最高指導部の主流意見となっていた³⁷³⁾。こうした機運に乗せて、「故郷への回帰」という形で語られた樗牛の「古事記神代卷の神話及歴史」と「植民的国民としての日本人」はそれぞれ「南進」の論理と実践とし

³⁶⁹⁾ 同右、四三一―四三三頁。高山樗牛における神話研究と殖民論との関係について、前掲論文平藤喜久子、一五〇―一五三頁を参考。氏によれば、「樗牛の「植民的国民」という日本人論を展開する上で両輪の役割を果たしており、いずれも彼の日本主義における中核的な主張が反映されている」という。しかし、それと異なり、本論は樗牛の「単一人種構成論」を主張する日本主義と彼の人種論とは深刻な矛盾があるとする。

³⁷⁰⁾ 明治期における日本人種南洋起源説について、河西晃祐「日本の南方起源「言説」と南進論」『上智史学』(第四六号、二〇〇一年一月)、一三一―一四六頁に詳しい。

³⁷¹⁾ 明治期の南洋認識について、前掲論文水野守(二〇〇一年)を参考。

³⁷²⁾ 前掲書矢野暢、一〇九頁。

³⁷³⁾ 徳富蘇峰(猪一郎)編述、『公爵松方正義伝』坤卷、(公爵松方正義伝記発行所、一九三五年)、五四六頁。朴羊信『陸羯南…政治認識と対外論』(岩波書店、二〇〇八年)、七九頁。三国干渉後の「北守南進」論の形成について、同書、七三―八二頁を参考。

て登場していたのである。

「北守南進」では、「南」の海洋に積極的に進出を唱えながらも、「北」の大陸から消極的に退出すると意味するのではない。戦後の流行語「臥薪嘗胆」に象徴されるように、日本帝国は、むしろ復讐するために一時的に耐えることを選択したといえよう。実は、神話研究に基づいた「南進」を呼びかけていると同時に、樗牛は世界的規模な「人種闘争」を「北守」の歴史的根拠として模索している。以下、「北守」をめぐる樗牛の語りに絞って議論を進めていく。

第三節 アジア主義と黄禍論

(一) 『世界文明史』から見た人種闘争

そもそも樗牛は「世界人類に対する関係的位置を知らむ⁴⁰⁴」という期待を念頭に置きながら、文学、美術、神話などの人文研究を行ってきたが、一八九八年、『世界文明史』の発表により、日本をどのように「世界」という舞台に位置付けるべきか、という問題を世界史研究に置いて考察しようとした。当該書の論述の範囲は史前文明から啓蒙運動・宗教改革までにわたり、「亜刺比亞」、「ビザンツ帝国」などの非西洋文明にも特に重視されてきた。そして翌年、『世界文明史』の続編という形で西洋工業革命以後の歴史を単著『十九世紀総論』として出版し、「仏蘭西革命」から「当今の問題」までの歴史を詳しく論じており、世界史という視点から三国干渉以後の日本が置かれた国際状況を分析した。

神話研究による人種論と同じく、歴史研究といえながら、樗牛の関心の所在は歴史そのものにあるのではなく、「人種の研究豈史学当眼の急務にあらずや⁴⁰⁵」というように、「歴史」を研究する目的は、「人種的活動」を明らかにすることである。そして「歴史」といえども、「西羅馬の滅亡」や「十字軍の遠征」といった歴史事件が含まれるのみならず、「今日希土の戦争」、「新大陸の移民

⁴⁰⁴ 前掲論文高山樗牛「日本民族の特性と文学美術」、三四頁。

⁴⁰⁵ 高山樗牛「歴史と人種」『文明史雑論』『樗牛全集』第五卷、三三八頁。

排斥」などの時局問題も取り組まなければならない。樗牛によれば、「如何なるか是れ歴史の光明に照らされたる国家究竟の目的なるか。是等は人種と関連して歴史哲学上極めて趣味ある」という⁴⁰⁶。つまり、「人種」は単なる歴史的意義があるのだけではなく、歴史的意義を明らかにした上で、「国家究竟の目的」と繋がっていくと、樗牛は主張するのである。かかる視点に立脚した上で、樗牛は文明史を展開させた。

「今日の文明史は又昔日の文明史に非ざるなり」と、樗牛はまず明治初期における福沢諭吉の文明史を区別した上で、「地質学、比較言語学、及び人種学、比較神話学、人類学等の最近の研究の上に確乎たる科学的基礎を有する」と、「今日の文明史」における「科学」の内実を強調した⁴⁰⁷。樗牛によれば、「今日の文明史」は「猶ほ自然科学の純理哲学に於けるが如し」、「物理学は物質運動の法則を、植物学は植物の分類生理を、天文学は天体運行の系統を研究」するようなものであるという。「人類活動の主脳を把へて」、「精神的及び物質的全範囲に亘りて、社会発達の真相を究明せむことを企つる統一的歴史なり」と、樗牛は文明史を科学として捉え、一般的な事実に対する記述より、その「法則」や「系統」に対する総合的研究を特に重視するようになった⁴⁰⁸。

一方、「人種に関する知識は歴史の根本問題なり⁴⁰⁹」と書いたように、樗牛は「人種」を歴史研究の核心問題とし、各人種を各文明と対応させながら説明を加えた。しかしここで注意すべきなのは、明治初期の文明史論に人種と文明との緊密な関係が既に強調されていたということである。例えば、福沢諭吉は『掌中万国一覽』（一八六九年）において「白哲人種すなわち欧羅巴人種、黄色人種すなわち亞細亞人種、赤色人種すなわち亞米利加人種、黒色人種すなわち亞弗利加人種、茶色人種すなわち諸島人種」と、肌色によって人種を五つに分けており、「(一) 白哲人種——その精気は聡明にして、文明の極度に達すべきの性あり。これを人種の最とす。(二) 黄色人種——その人の性情よく難苦に堪へ、勉強事をなすといえども、その才力狭くして、事物の進歩はなはだ

⁴⁰⁶ 同右。

⁴⁰⁷ 高山樗牛『世界文明史』『樗牛全集』第五卷、六頁。

⁴⁰⁸ 同右、四、七頁。

⁴⁰⁹ 高山樗牛『世界文明史例言』『樗牛全集』第五卷、四頁。

遅し。(三) 赤色人種——性情陰くして闘を好み、復讐の念、常に絶ることなし。(四) 黒色人種——性質懶惰にして開化進歩の味を知らず。(五) 茶色人種——性情猛烈、復讐の念はなはだ盛ん」と、人種の差異を文明の優劣として解釈した⁴¹⁰。

しかしながら、樗牛のいわゆる「人種」は前者と大きく異なっている。まず、肌色をはじめとする生理的な特徴に代わり、樗牛の「人種」は言語、宗教などの文化・精神的な特徴によるものである。そして人種と文明の優劣とを直接的な対応関係として捉えた福沢と異なり、樗牛は、いわゆる人種間には競争関係があるが、文明はある人種の特選的なものではないと考えた。例えば、「世界歴史を人種競争として見る時は、畢竟アールヤ人種と非アールヤ人種の勢力消長史に外ならず」と考えた樗牛は、世界史を以下の三期に分けた⁴¹¹。

第一期、アールヤ人種第一期隆盛期。——三七五

第二期、非アールヤ人種隆盛期。三七五——一四五三

第三期、アールヤ人種第二期隆盛期。一四五三——？

人種間には競争的關係があるが、非アールヤ人種は必ず劣等人種であるとは言えない。樗牛によれば、三七五年に「ツラン人種一派なる突厥民族」、「一挙して東帝国を陥れたり」という事件は「ツラン及びセム人種」などの「非アールヤ人種の全盛時代」を象徴するが、一四五三年の「コンスタンチノポリの陥落は、アールヤ人種にとりて恰も出陣の曉鐘に均しかりき」という。ここで樗牛は歴史上非アールヤ人種の全盛時代の栄光を強調した一方、当時「西力漸く東してより、土耳其起らず、埃及亡び、安南仆れ、印度、緬甸、(中略)暹羅、僅に奄々たる氣息を停むと雖も、亦能く為すに足らず」と、現実のアールヤ人種の巨大な脅威をも強調した。さらに、「支那の境界線また漸く変じ、分割の声、歐洲に響く」と、「支那分割」を危惧した上で、樗牛は「アールヤ人種の勢力は、今や其の五百年來直下の勢を以て極東の海涯に逼らむとす」と、

⁴¹⁰ 前掲書山室信一(二〇〇一年)、五六頁。

⁴¹¹ 高山樗牛「二十世紀に於ける非アールヤ国民の運命」『樗牛全集』第五卷、三五五頁。

支那分割後の日本の自立を懸念した⁴¹²。

実は、西洋列強側による「支那分割案」の提出は、ドイツをはじめとする新興帝国の東アジア進出と深く関わっているが、日本人と中国人との連合を以てヨーロッパへの侵入をも懸念したこともあったのである。例えば、「黄色人種の連合は危険である」と、当時のドイツ外相は直接的にロシアの外交官に警告し、「日本人はすでに中国人の目には、大いなる威信を得てしまった。彼らが中国に保護領を設けることに成功するならば、ヨーロッパ列強の利害に敵対し、黄色人種すべてにとっては共通の利害の一致を見る結果がもたらされる」と、日本が主導する潜在的な黄色人種同盟を懸念した。しかもドイツ皇帝ウイヘルム二世は黄色人種同盟を「黄禍論」へと発展させ、「日本に対抗して、ヨーロッパの利益を守るため、ヨーロッパが連合して行動を取る」と呼びかけていた⁴¹³。

このような人種差別そして西洋優越論に象徴される言葉「黄禍」はまもなく日本にも伝えられ、大きな議論を巻き起こした。第一章第一節にも確認されたように、「黄禍論」をめぐる、民間の「アジア主義論」と政府側の「文明開化派」という二つの対立的な主張があった。前者は「黄人種団結」を強調し、白人と対抗することを選んだが、後者は西洋文明をさらに吸収し、列強への刺激を避けて友好関係を築こうとした。「南進論」について、樗牛は政府側と同じ姿勢を保ちながら、中国大陆の局勢をめぐる政府側とある程度の距離を置いた。日清戦争中に政府はできる限り清国との「同人種」的な言説を抑制し「文明」という普遍的イデオロギーによる戦争の正当化を行ったが、三国干渉は白人種と黄色人種との対立図式を刺激し、「人種」を軸とするアジア主義を台頭させたのである⁴¹⁴。かかる情勢下、政府は資金調達や条約改正などの外交的難題に迫られて対外調和の姿勢を示したが、より遠い将来に列強との衝突を予想

⁴¹² 同右、三五五―三五六、三六一頁。

⁴¹³ 前掲書飯倉章（二〇一三年）、四六頁、四八頁。また、「支那分割案」の提出とドイツをはじめとする新興帝国の東アジア進出との関係について、前掲書ゴルヴィツァーの第五章「黄禍論をめぐるドイツでの議論」、一七二―二三六頁を参考。

⁴¹⁴ 山室信一「アジア認識の基軸」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』（緑蔭書房、一九九六年）、一五―一六頁。前掲論文與那覇潤、九〇頁。

した樗牛は、アジア主義の道を選んだ。そして同人種と見なされた日清戦争の再評価も樗牛の世界史の新課題となった。その論説「人種競争として見たる極東問題」に、樗牛は以下のように述べた。

翻つて日清戦争の顛末を沈思すれば、吾人は撫然として長大息するを禁ずる能はざる也。(中略)吾人は是の義戦を闘はむが為に支那帝国を再び起つ能はざるべく打撃したるに非ずや、吾人実には是を悲むなり。支那は吾人と同人種に属する唯一の帝国にあらずや。ツラン人種の国家は、極東以外に於て全くアールヤ人種の為に皆滅せられたり。吾人の日本と支那帝国とは、世界に於ける最後のツラン人種の国家として、相抱擁し、相提携して其の運命を共にすべきことを誓ふべきに非ずや。支那は吾人の唯一の同胞なり。(中略)嗚呼、支那を半死せしめたる吾人は、自ら其の一手を断ちたるものに非ざる乎。思うて茲に至れば、吾人の誇とする所の日清戦争は、畢竟極東の奇禍、ツラン人種の一大不幸に非ずや⁴¹⁵。

文明と野蛮との対決の「義戦」として捉えられてきた日清戦争であったが、樗牛は「極東の奇禍」、「ツラン人種の一大不幸」とし、逆に「唯一の同胞」である「支那帝国」と「相抱擁し、相提携して其の運命を共にすべき」と唱えた。なぜならば、「世界の大事の、道理によりて為されず、人道によりて為されず。一に利害の為に為さるゝこと是れ也。人種競争は利害の最も大なる競争なり⁴¹⁶」というように、樗牛は人種闘争を国家の最大な課題として挙げたからだ。かかる視点によれば、樗牛は「国民よ、異人種の同盟の永続し難き⁴¹⁷」と、政府側が主導する日英同盟を反対する一方、他方では「大スラヴ主義の偉大なる運動

⁴¹⁵ 高山樗牛「人種競争として見たる極東問題」『樗牛全集』第五卷、三四九～三五〇頁。また、同論文を論じたものとして、前掲書橋川文三、六〇～六一頁。前掲書先崎彰容『高山樗牛…美とナショナリズム』、一一九～一二〇、一二六頁、同『個人主義から「自分らしき」へ…福

沢論吉・高山樗牛・和辻哲郎の「近代」体験』(東北大学出版会、二〇一〇年)、八九～九〇頁。

⁴¹⁶ 同右、三五二頁。

⁴¹⁷ 高山樗牛「異人種同盟」『樗牛全集』第四卷、四五二頁。

に注目せよ、(中略) 幾多の土地風土民族を包括して、茲に至強至盛なる人種的感情の磅礴」に対して、「大斯拉ヴ主義」の連合に対する羨望の情を表わした⁴¹⁸。そして「日本が世界歴史中の一国として目覚めたる時は、即ちチュラニアン人種は欧亜衝突に於ける其の代表者として彼を要したる時なり⁴¹⁹。」と、樗牛は日本人が「チュラニアン人種」のリーダーとしての自覚を持たせようとした。ここでこそ、従来「我レハ心ニ於テ亜細亜東方ノ悪友ヲ謝絶スルモノナリ⁴²⁰」という福沢諭吉の「脱亜論」と行き別れ、樗牛は「唯一の同胞」である「支那帝国」と連合するアジア主義へ傾斜し、西洋列強と対抗する道を選んだのである⁴²¹。そして「脱亜論」の基礎となった西洋文明そのものに対して、樗牛も批判の矛先を投じた。

(二) 黄禍論をめぐる往復書簡

一九〇〇年、京都帝国大学文科大学美学担当教授の内定を得、樗牛はドイツに三年間留学する予定であったが、出発直前、肺結核の悪化により咯血し、留学を断念せざるを得なかった⁴²²。近年の高山樗牛研究の到達点とも言える長尾宗典は、樗牛の美術研究を文明批評と合わせて考察し、「国家主義的な美術史像と決別し、アジアに向かって開かれた「東洋美術」と、個人の感情を慰謝す

⁴¹⁸ 高山樗牛「大斯拉ヴ主義」『樗牛全集』第四卷、四五二頁。

⁴¹⁹ 高山樗牛『十九世紀総論』『樗牛全集』第五卷、三二五頁。

⁴²⁰ 福沢諭吉「脱亜論」『時事新報』、一八八五年三月一六日、一頁。

⁴²¹ 高山樗牛とアジア主義との関係について、前掲書先崎彰容『高山樗牛…美とナシヨナリズム』、一一二～一二七頁、同『個人主義から「自分らしさ」へ…福沢諭吉・高山樗牛・和辻哲郎の「近代」体験』、七九～九二頁、前掲書橋川文三、六一～六二頁にも触れていた。

⁴²² 前掲論文林正子(一九九六年二月)、一五六頁。また、姉崎正治と高山樗牛の往復書簡を論じた先行研究として、前掲書平川祐弘(一九七一年)、九六～一〇七頁、前掲論文林正子(一九九六年)、一七四～一七七頁、同(一九九八年)、二四～三三頁、前掲書先崎彰容『個人主義から「自分らしさ」へ…福沢諭吉・高山樗牛・和辻哲郎の「近代」体験』、九九～一一〇頁、同『高山樗牛…美とナシヨナリズム』、一五四～一七七頁、磯前順一、深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教…姉崎正治の軌跡』(東京堂出版、二〇〇二年)、二〇七～二〇九頁が挙げられる。本節は上記の諸研究によるものは多い。

るものとしての「美術」という二つの「美術」観へと展開していく」と結論づけた⁴²³。長尾の研究では、樗牛の「美術」認識を照射しながら、その晩年樗牛思想転換の具体像を明らかにしたが、世界文明史に鍵概念となった「人種」をどのように彼の「個人主義」への転回に意義づけられるべきか、という問題は見落とされていた。よって、人種によるアジア主義への接近という樗牛像は、長尾の研究ではほとんど触れなかった。以下、それを絞って議論を進めていく。

嘲風兄足下、今の本邦の学界に於て其の最も不備なるものを挙げれば、日本美術史の如きは慥かに其一也。足下よ、予が敗残の生を以て斯学に致す、可ならむ乎⁴²⁴。

と、洋行中の姉崎宛ての公開状に書いたように、樗牛は最晩年には美術を余生の志業とした。しかし、「予は本邦美術に関して、今の学界の注意を喚起するところの寧ろ足らざらむを憂ふ」と、樗牛は実に美術研究に悲観しなく、逆に「乞ふ、更に数言を費さしめむ乎⁴²⁵」と、美術史に触れる前に、ある前提を設定した。

今の世、アリアン民族以外に国するもの少からずと雖も、厳然として独立国の体面と実力とを保有し、世界の一大勢力として二十世紀以後の競争場裡に馳騁し得るの望あるものは、独り我が日本あるのみ。是を人種競争の歴史上より観察すれば、近世の大事は、主としてアリアン、チュラニアン二民族の勢力の消長に外ならず。而して是の競争史上の敗者たるチュラニアン民族の力漸く支へざるや、競争の部位次第に西より東に移り、今や世界の勢力は極東の分野に奔注し来りたり。是の時に当りてチュラニアン民族の文明を代表して是の競争場裡に立

⁴²³ 長尾宗典「日本美術史」の試み——高山樗牛における「国民美術」と「ロマンチズム」——『季刊日本思想史』（第六七号、二〇〇五年）、八七〜八八頁。

⁴²⁴ 高山樗牛「姉崎嘲風に与ふる書」『樗牛全集』第二卷、七二三頁。前掲論文長尾宗典（二〇〇五年）、七三頁。

⁴²⁵ 前掲論文高山樗牛「姉崎嘲風に与ふる書」、七一七頁。

てるものは、言ふまでもなく我が日本也。凡そ権力競争の裏面には必ず文明の競争あらざるを得ず。見れば、印度以東、南洋以北の東半球の文明を、二千年の歴史中に総合し来りたるチュラニアン民族の最後の代表者は、実に人類の史上に於て最も重大なる地位を保てりと謂ふべき也。¹²⁶

ここで樗牛は『世界文明史』のなかでの人種闘争論を継承しつつ、世界情勢を「アリアン民族」と「チュラニアン民族」との闘争として把握した。そして「チュラニアン民族の代表」が「言ふまでもなく我が日本」とした上で、「権力の競争の裏面には必ず文明の競争」と、文明が権力の競争の手段だと樗牛は考えた。「世界に於ける各個の民族は其の到達すべき文明に関して各、特異の理想を有すべし。(中略) 日本美術史の研究は、是の点より見て更に重大なる意味を有し来れるを見る。世界の文明を二分して其の一を保てる日本国民が、将来人道に寄興する所のもの、素より一にして足らざらむも、而かも美術は如何なる場合に於ても、其の最も貴重なるものの一たるを失はざるべし」と、日本美術が将来の人種競争の好材料であると予想したのである。¹²⁷

その一方、「君は日本美術史の研究に身を委するの決心愈固しとや、是れ君の夙に志せし処、余は君の健康の旧に復して今後の大成を見る日を待つや切なり」と、姉崎は病床に伏した樗牛の美術研究を激励した。そして「僕が未だ歐洲を見ず典籍に依りて其文明を遠望せしに当りては、窃に其文明の美を嘆仰したが、「十九世紀の後半ドイツ思想界は、恰も万葉凋落の時に当れり。(中略) 国家の統一と国運の隆昌とは却て人々の根本的修養に遠からしめ、外面の愛国自負のみ増進したる時なり」と、姉崎は渡欧以前の憧憬とその実体感とのコントラストを強調した。さらに「見よ今のドイツの執権者が如何に神エホバを己の専有の如く吹聴し、之に反する異教徒を剪滅すべしとの思想を鼓吹しつゝあるかを」と、姉崎は当初の目的であったドイツ文明を紹介することより、狂熱的なナショナリズムの事実を強調した。「君よドイツの今の盟主たるプロイセ

¹²⁶ 同右、七一七～七一八頁。

¹²⁷ 同右、七一九～七二〇頁。

ンほどモナルキスチックの国はなかるべし、カイゼルが一度演説して支那をうちこらし、千年の後までも其の痛みを感じしめよといへば、万民忽に之に和し、文明の皮を脱して蛮行を演じ、下走卒児童に至るまで支那人黄色人種を悪み、路行く我等に対してまでも石を投げ罵詈雑言を放つ」というように、姉崎自身はドイツで深刻的な人種差別の体験をした⁴²⁸。

実は、そもそも三国干渉における黄禍論の張本人ヴィルヘルム二世であったが、一九〇〇年に北京で起こった北清事変を機に、さらに狂熱な人種主義を鼓吹し、東アジアの進出を求めた。キール軍港で行われたヴィルヘルム二世の有名な「匈奴演説」に「異教の文化は、どんなに立派で優れていようと、全て滅びるのだ。そこに偉大な使命が歩み寄るとき」という言葉に象徴されるように、ヴィルヘルム二世は異文明を全てドイツの敵とした⁴²⁹。

当時、ちょうどキール大学で宗教学を専攻した姉崎はそれを聞いて、「東洋人はドイツ人にあらざるが故に人にあらず、黄人は白色ならざるが故に排斥すべし、此の如き思想は今のドイツ思想の大風潮なり、君よ余り小事には似たれど一二の事例を挙ぐるを許せ、「人類には——有色人種にても亦」(Der Mensch und die gefarnten Rassen auch)と、此語実に一解剖学者——冷静の研究をたるべき——が其書に記せし言なり、君よ、嗚呼総ての同胞よ、我等有色人種はドイツ人の眼には人にあらざるなり⁴³⁰」と、日本人の全同胞に陳情し、「君主政治、自負愛国と之に伴ふ個人価値の滅却、功名營利の勢力と之に反比例する思想修練理想努力の退却」、「其外形結果の進歩は即其裏面中心に一歩々々解体を進めつ々ある」と、ドイツの人種差別の刺激を受けた上でその文明の現状を辛辣な批判を展開した⁴³¹。

姉崎の誠実な体感と鮮明的な記述は、樗牛にとって感情移入しやすいものに

⁴²⁸ 姉崎正治「高山樗牛に答ふるの書」『太陽』(第八卷第二号)、一九〇二年二月五日、二二二—二六頁。

⁴²⁹ 川島隆『カフカの「中国」と同時代言説…黄禍・ユダヤ人・男性同盟』(彩流社、二〇一〇年)、三二頁。

⁴³⁰ 前掲論文姉崎正治「高山樗牛に答ふるの書」、二七頁。

⁴³¹ 前掲論文姉崎正治「高山樗牛に答ふるの書」、二四頁。姉崎正治「高山樗牛に答ふるの書(承前)」『太陽』(第八卷第三号)、一九〇二年三月五日、三〇頁。

間違いない。「足下先に送り来れる伯林時報によりて、予はキールに於ける独逸帝の演説を詳知するを得たり。其の主意の存する所は人種競争の目的を赤裸々に現示したるに外ならず」と述べているように、樗牛は姉崎の書簡にあるドイツの人種差別の体験に強く注目しており、「異教徒の文明は、其の程度種類の如何を問はず、遂に滅亡せざるべからず、是の目的を達するは基督教国民の天職也」と、人種の衝突を宗教・文明の衝突とした⁴³²。そもそも世界の情勢を「アリアン人と非アリアン人の争ひ也。白人種と黄人種、欧羅巴人と亜細亜人、基督教国と非基督教国との争ひ也」とした樗牛に対して、人種概念とは言語や宗教や地政学などの様々な要因が乱反射を引き起こす多面体のようなものである。よって、姉崎に美術を論じる際に、「足下よ、是の如く観来れば、日本の美術史は取りも直さずチュラニアン民族の具体的文明史なり。而して政治上の日本が、チュラニアン民族最後の勢力を代表するが如く、日本の美術史は、欧州美術史と対峙して、人類の美的活動の二大発展を表示すものと謂ふべし。足下よ、日本美術史の意義、また決して浅少ならざる也」と、樗牛は政治上日本民族を「チュラニアン民族」の代表としたように、日本の美術史をも「チュラニアン民族の文明」の代表とした。その意味では、樗牛は美術||文明と人種との接点を結んでおり、「日本の美術」を「チュラニアン民族文明の代表」として「欧州美術」と「対峙」しようとした。

かくして、樗牛は日本美術史を構想する時、人種という概念は大きな役割を果たしていた。しかし、病魔に取りつかれ、樗牛の命がけの美術史構想は「未定稿」という形で終わってしまった。その冒頭で「印度以西の諸邦国の美術がアリアン文明の強大なる求心力に牽引せられて、今日欧羅巴の美術を大成したる事実に対比せらるべきものにして、本邦美術が歴史上、世界に重きを為す主要なる一事項なりとす⁴³³」と、日本美術史と「欧羅巴の美術」との対照関係を論じたが、樗牛は美術史を推古時代から平安時代の中期までしか進めなかったため、その美術史構想の全体像、特に近代東西交流史のなかにどのような意義

⁴³² 前掲論文高山樗牛「姉崎嘲風に与ふる書」、七一八〜七一九頁。

⁴³³ 高山樗牛「新しき日本」『樗牛全集』第四卷、四三六頁。

⁴³⁴ 前掲論文高山樗牛「姉崎嘲風に与ふる書」、七一八頁。

⁴³⁵ 高山樗牛『日本美術史未定稿』『樗牛全集』第一卷、五三七〜五三八頁。

をみつけたのかは捉えにくい。しかし、人種闘争を没後世界の主題と想定した上で、樗牛の美術史構想に人種Ⅱ文明の競争という形が反映されたのは、自然の成り行きだと考えられる。

結び

本稿は、高山樗牛の生涯にわたる人種認識を、それをめぐる同時代の論争と対照しながら論じてきた。従来の国家主義研究やナショナリズム研究では、樗牛の人種論を日本対外認識の一環として強調されてきたが、本稿が明らかにしたように、樗牛の人種論はまず「国体」をめぐるキリスト教徒との論争のなかに展開した。その国体論争の最初は、教育、宗教などの領域にとどまっていたが、日清戦争後の台湾領有とそれに伴う日本の国民国家が帝国日本へと移行する状況で、日本帝国の海外膨張という国是は取り込まれていた。よって、植民地における多くの異人種をどのように帝国日本に回収させるのか、という問題は漸次的に国体論争の核心的問題となっていた。

そもそも日本主義を掲げる樗牛は国体観念に生じた権力意識を以て台湾という新領土を支配しようとしたが、明治政府はそれ以上の新領土の獲得を予想しており、樗牛と反対に教育と司法における同化政策を採用した。つまり、国体論は「万世一系」の天皇制の権威として強調されているが、その「単一人種構成論」はほぼ放置されていた。

そして三国干渉という厳しい外交難局に、「北守南進」論は再び明治政府の指導部に優位に傾くようになった。そもそも血統の純潔性を強調する「日本人種単一構成論」と海外拡張主義に応じた「日本人種混合構成論」との間に激しく動揺していた樗牛は、政府との歩調を合わせて、「故郷への帰還」という形で日本人種南洋起源説を唱えはじめた。樗牛の記紀研究は日本神話研究史における斬新的な一ページを開いたが、樗牛自身はより深い議論を展開しなかった。それに代わり、樗牛は世界文明史の研究に着手しており、人種闘争を軸として世界史と国際情勢と照らしながら、「同人種同盟論」によるアジア主義へと急速に接近した。

しかし、従来のアジア主義研究史では、樗牛は十分に重視されてなかったように見る。それは、おそらく近衛篤磨をはじめとする対華政策の面で重点が置かれたアジア主義者と異なり、樗牛は主に人文研究の面でアジア主義を展開させようとしたことと関わっている。『美術史未定稿』のなかで樗牛は美術―文明―人種という順で人種闘争を想定したが、彼自身の急死のためにそのアジア主義の実像は懸案になってしまった。しかし、本稿が確認したのは、樗牛の思想には今まで論じられてきた「国家主義」から「個人主義」への転換に収斂させない部分があることであった。それは、日本の未来像について、国家という形で日本に西欧諸国から耐えきれない圧力がかけられていたことである。まさにその意味で樗牛のアジア主義への接近の姿が指摘できる。

竹沢泰子によると、英語の Race という概念は「小文字の race」、「大文字の Race」、「抵抗の人種 (Race as Resistance)」という三つの位相によって一つの球をなすように成立する。「小文字の race」とは、近代化や欧米からの人種分類論の受容などによる影響とは無関係に、それぞれのローカル社会において右のように定義した特性が見られる人種である。「大文字の Race」とは、世界中の人々のマッピングと分類を意識して高知された科学的概念として流通する人種である。また「抵抗の人種 (Race as Resistance)」とはマイノリティを動員することにより生成・強化される人種である⁴³⁶。竹沢の理解に従えば、黄禍論に表象される黄色人種は「抵抗の人種」として理解されるほかならない。なぜならば、黄禍論をめぐる攻防のなかで、マイノリティへの動員効果が最も重視されたからだ。

明治日本の場合に即して言えば、人種差別そして西洋優越論に表象された黄禍論は日本にも伝えられ次第、大きな議論を巻き起こした。大別して言えば、黄禍論をめぐる、民間の「アジア主義論」と政府側の「文明開化派」という二つの対立的な主張があった。前者は「黄人種団結」を強調し、白人と対抗することを選んだが、後者は西洋文明をさらに吸収し、列強への刺激を避けて友好関係を築こうとした。そのほか、黄禍論に対して日本人が白人だという異色の対応案「日本人種アーリア起源説」を田口卯吉も唱えたのである。

従来の近代日本の思想史研究では、西洋・白人と対抗することで、アジアの自由や有色人種の解放といった反人種主義は重要な課題として扱われてきたことは周知の事実である。特に第一次世界大戦後、パリ講和会議の国際連盟委員会が日本が人種差別的撤廃提案の最初の提出者として重要な意義を持つていた。よって、三国干渉以来、黄色人種への差別に最も集約された言葉「黄禍」については、有色人種解放・人種差別撤廃物語の原型として語られてきた⁴³⁷。

⁴³⁶ 竹沢泰子「人種概念の包括的理解に向けて」竹内泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』（岩波書店、二〇〇九年）、六―七頁に詳しい。

⁴³⁷ 前掲書橋川文三、一二二―一三八頁、前掲書飯倉章（二〇一三年）、一七七―二二二頁、前掲書廣部泉、六二―九二頁を参考。

かかる視点によれば、従来の黄禍論研究では、三国干渉という外交危機に焦点をあてて、人種差別主義と反人種主義との二元論として論じられてきた。しかしその一方で、本研究が明らかにしたように、日本黄禍論批判をめぐる言説には、日本は人種主義そのものを批判対象としたのではなく、逆にそれを借用して帝国秩序を構築しようとした。

例えば、第一部で対象とした文学者森鷗外は日露戦争期に『黄禍論梗概』と『人種哲学梗概』を行い、日本に置かれた国際情勢を鋭く観察し、「吾人は嫌でも白人と反対に立つ運命」を持つと結論づけた一方、三十年にわたった日本の文明開化の努力が、すでに西洋人に劣らない成就を得、その点が西洋人と人種的差異によって否定できない事実だと考えた。上述の鷗外の二篇人種・黄禍「梗概」によつて、ここまで「反人種差別主義」の鷗外像は形成されていたが、『衛生新篇』の論説「種族」において、鷗外は敢えて白人種と黄人種を「優勝分族」としたのは、黄人種として「種族衛生学」に隠された人種差別に対する危機感を示したとともに、「人種優劣論」という前提を認めたとと言える。実は、衛生学者としての鷗外は、生理・衛生学の論拠によりつつ、白人種と黄色人種が同様な文明的な人種と主張する一方、黒人に対する差別を保留していた。そのため、鷗外の人種・黄禍論については、黄色人種を代表する日本の人種間平等への訴求も反映されていたとともに、彼が衛生学者の思想に固執した人種差別主義も確認できると考えられる。

そして第二章で従来の文明史論そしてそれによる「脱亜論」の代表人物として捉えられてきた田口卯吉の生涯にわたる人種論の形成と展開を追いながら、彼の内地雑居論、南進論、「日鮮同祖論」、「日本人種匈奴起源説」、「日本人アリア人種起源説」などの課題を論じた。実は、明治初期に自由主義経済論を唱えた田口は「日本多民族起源説」を支持し、文明開化と殖産興業を推し進め、人種よりも利益を重視していた一方、「南進論」をめぐる諸言説に、未開地における「土人」との競争をも強調し、海外植民・開拓をも呼びかけていた。そして日清戦争前後、東京帝国大学の国史科の日鮮同祖論からの示唆を受けて、田口は彼なりの人種論を考え始めた。この時期こそ、田口は中国の東北地区割

譲を講和の条件とし、「日本人種匈奴起源論」を打ち立てた。しかし「黄禍論」という外圧の下、「他の人種来りて我匈奴人種を害せんとすれば、余は匈奴人種として戦ふべし」というような田口の決然たるモットーは逆に戦後に盛り上がったいた黄禍論に一層拍車をかけるようになった。田口は「匈奴起源説」は時宜に適しないことを意識した上で、前者をあらためて「日本人アリア人種起源説」を唱えはじめた。しかし、ここで注意すべきなのは、「我々はヨウロッパ人に比すれば本家筋に近きもの」というように、田口は西洋より日本は血統的に「文明の源」のアリア人種に近いと主張したことである。田口は西洋の人種論からの圧力を意識した一方、それを借用して「日本人種優越論」へと転化させることも確認される。日露戦争の勝利の際、田口は『記』『紀』神話を深く研究し、日本人種の起源への探求意欲はより明白になった。それは日清・日露戦を経て「一等国」の栄光を確実にした上で、新しい自他認識・対外関係を求めようとしたと関わる一方、新興の日本帝国の秩序の再構築をも意味するのである。

また、第三章では高山樗牛のアジア主義思想を論じたものであるが、その生涯にわたる人種論を各時代背景に置かれて考察することも重視される。例えば、樗牛の人種論はまず「国体」をめぐるキリスト教徒との論争のなかに展開しており、台湾領有とそれに伴う植民地における多くの異人種をどのように帝国日本に回収させるのか、ということ論じはじめた。そもそも日本主義を掲げる樗牛は国体観念に生じた権力意識を以て台湾という新領土を支配しようとしたが、それ以上の新領土の獲得を予想し、くわえて明治政府の指導部の「北守南進」論との歩調を合わせるために、「故郷への帰還」という形で日本人種南洋起源説を唱えはじめた。そのため、血統の純潔性を強調する「日本人種単一構成論」はほぼ放置されていた。一方、三国干渉とそれに伴う黄禍論の刺激を受け、樗牛は世界文明史の研究に着手しており、人種闘争を軸として世界史と国際情勢と照らしながら、「同人種同盟論」によるアジア主義へと急速に接近した。

以上から見てきたように、明治末期における黄禍論批判をめぐる諸言説には、西洋留学体験をした「文明開化」の代表人物森鷗外であれ、同人種同盟を訴え

た大アジア主義の高山樗牛であれ、そして当時の言論界に異色の存在であった「日本人種アーリア起源説」の田口卯吉という三者、一見すれば大きく異なっていたが、人種主義はそれらの認識の根底になされている。それは、おそらく日本が国民国家から帝国主義へと移行する文脈で検討しなければならない。つまり、黄禍論に反照された以上の差異は、帝国のあり方をめぐる差異であり、帝国そのものに疑問を抱かなかったのである。よつて、明治末期における黄禍論への対応には、黄白人種衝突という視点から見れば、「人種主義」と「反人種主義」という二元対立論の虚像を捉えられるが、明治日本の人種論の受容史に置かれて考察すると、帝国日本が人種主義を借用しその周辺国に転嫁させることも確認される。それについて、近代日本の国民国家建設の模索の様子を反映する一方、他方では転換期における帝国日本の不安定性をも呈してきたとも考えられる。

「付記」

原則として漢字は新体字に改め、ビルは省略した。引用は基本的に原文に忠実するが、読みやすさを考慮して、適宜、句読点を補い、表記を改めた場合がある。省略する箇所は（中略）で示す。論文の中で同一の文章を再度引用した、またはそこに基づく議論を再度行った場合は、出典の記載を省いたこともある。また、「支那」、「満州」、「蝦夷」、「土人」などの称呼などについては、それ自体が問題を含む場合が多いが、本稿では原文を引用する際、あくまでも歴史的名辞としてこれらを捉えて、敢えて訂正を加えなかった。なお、第一章「森鷗外と人種・黄禍論——戦争・文明・衛生学という視点から——」「阪神近代文学研究」（第一八号、二〇一七年五月）、一―一四頁と第二章「田口卯吉における人種論の展開——内地雑居論から黄禍論まで——」「史学研究」（第二九七号、二〇一七年九月）、四七―七二頁はすでに公表されたものであり、博士論文にまとめる時、適切な訂正と補足（本論、引用、参考文献をも含む）を行った。

參考文獻

洋文資料

- Arif Dirlik, *Chinese History and the Question of Orientalism*, in *History and Theory* 35 (4), 1996
- Arthur de Gobineau, translated by Adrian Collins, *The inequality of human races*(London : W. Heinemann, 1915)
- Edward W. Said. *Orientalism* (1978), New York: Georges Borchardt
- Gregory Blue, Gobineau on China: Race Theory, the "Yellow Peril," and the Critique of Modernity. *Journal of World History* Vol. 10, No. 1 (Spring, 1999)
- “China and Western Social Thought in the Modern Period,” in edited by Timothy Brook, *China and Historical Capitalism : Genealogies of Sinological Knowledge*, Cambridge University Press, 2002
- Hannah Arendt, *The origins of totalitarianism*, New York : Meridian Books , 1958
- Heinz Gollwitzer, *Die gelbe Gefahr : Geschichte eines Schlagworts, Studien zum imperialistischen Denken* Vandenhoeck & Ruprecht 1962
- John Kuo Wei Techen and Dyljan, *Yellow peril: an archive of anti-Asian fear* Yeats Verso, 2014
- Jonathan Spence, *To change China : Western advisers in China, 1620-1960*, Penguin Books, 1980.
- Paul A. Fortier, Gobineau and German Racism, *Comparative Literature* Vol. 19, No. 4 (Autumn, 1967)
- Raymond Dawson, *The Chinese chameleon : an analysis of European conceptions of Chinese civilization*, Oxford University Press, 1967.
- Richard Austin Thompson, *The yellow peril, 1890-1924* , The Asian experience in North America : Chinese and Japanese, Arno Press, 1978.
- Richard John Bowring , *Mori Ogai and the modernization of Japanese culture*, New York: Cambridge University Press , 1979
- Rutledge M. Dennis, Social Darwinism, Scientific Racism, and the Metaphysics of Race, *The Journal of Negro Education*(Vol. 64, No. 3), Myths and Realities: African Americans and the Measurement of Human Abilities (Summer, 1995)
- Victor Kiernan, *The Lords of Human Kind: European Attitudes to Other Cultures in the Imperial Age*, London : Serif, 1995

中國語資料

- 格力高利·布魯「中國」与近代西方社会思想」卜正民編集『中国与歷史資本主義·漢学知識的系譜学』(台湾国立編訳館訳、新星出版社、二〇〇五年)
- 海因茨·哥尔維策尔『黄禍論』(訳者不明、商務印書館、一九六四年)
- 雷蒙·道森『中国変色龍：對於欧洲中国文明觀的分析』(常紹民、明毅訳、中華書局、二〇〇六年)
- 羅福惠『黄禍論：東西文明的对立与對話』(立緒文化出版社、二〇〇七年)
- 呂浦·張振鷗『黄禍論歷史資料選輯』(中国社会科学出版社、一九七九年)
- 沈松橋「我以我血薦軒轅：黄帝神話与晚清的国族建構」『台湾社会研季刊』(第二八号、一九九七年一月)
- 孫隆基「清季民族主義与黄帝崇拜的發明」『歷史学家的経緯』(広西師範大学出版社、二〇〇四年)
- 維克多·基尔南『人類的主人』(陳正国訳、商務印書館、二〇〇六年)

伍碧雯「古比諾『人種不平等之探源』——十九世紀末德国種族理論——」『成大西洋史集刊』(第一二号、二〇〇四年六月)、
楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅——西方」視野的中国形像与近代中国国族論述』(政治大学出版社、二〇一〇年)

同「尔有黄禍之先兆、尔有種族之勢力——黄禍」与近代中国国族共同体想像」『国立政治大学歴史学報』(第二六号、二〇〇六年一月)
周寧『天朝遙遠——西方的中国形像研究』(北京大学、二〇〇六年)

日本語全集

森鷗外『鷗外全集』全三八卷(岩波書店、一九七一年)

田口卯吉『鼎軒田口卯吉全集』全八卷(復刻版、鼎軒田口卯吉全集刊行会編輯
吉川弘文館、一九〇〇年)

高山樗牛『樗牛全集』改訂註釋』全七卷(姉崎正治、笹川種郎、復刻版、編
日本図書センター、一九八〇年)

『新版・世界大百科事典』(平凡社、二〇〇七年改訂)

外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『新版・日本外交史辞典』(山
川出版社、一九九二年)

日本国語大辞典第二版編纂委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞
典・第二版』(小学館、二〇〇一年)

日本語専門書

赤木桁平『人及び思想家としての高山樗牛』(新潮社、一九一八年)

アルベール・メンミ『人種差別』(菊地昌夷、白井成雄訳、法政大学出版社、
一九九六年)

飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」——』の逆説』(二
〇〇四年)

同『黄禍論と日本人——欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』(中央公論新社、
二〇一三年)

家坂和子『日本人の人種観』(弘文堂、一九八〇年)

家永三郎『近代精神とその限界』(角川選書、一九五〇年)

石田雄『明治政治思想史研究』(未來社、一九五四年)

板谷敏彦『日露戦争、資金調達の戦い——高橋是清と欧米バンカーたち』(新潮
社、二〇一二年)

伊藤博文『帝国憲法義解』(国家学会、一八八九年)

石原俊『近代日本と小笠原諸島——移動民の島々と帝国』(平凡社、二〇〇七年)

磯貝英夫『森鷗外——明治二十年代を中心に』(明治書院、一九七九年)

磯前順一、深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教——姉崎正治の軌跡』
(東京堂出版、二〇〇二年)

井上章一『法隆寺への精神史』(弘文堂、一九九四年)

井上哲次郎『内地雑居論』(哲学書院、一八九一年)
同『内地雑居続論』(哲学書院、一八九一年)
同『勅語衍義』上卷(井上蘇發行、一八九一年)
同『国民道德概論』(三省堂、一九一二年)

- 井上哲次郎、高山樗牛『新編倫理教科書』第三卷（金港堂、一八九七年）
- 色川大吉『新編明治精神史』（央公論社、一九七三年）
- エドワード・サイード『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、平凡社、一九八六年）
- 大島清、加藤俊彦、大内力著『明治のイデオログ（人物・日本資本主義（四））』（東京大学出版会、一九八三年）
- 大島清『高橋是清…政治家の数奇な生涯』（中公新書、一九九九年）
- 大隈重信「東亜の平和を論ずる」『大隈伯演説集』（早稲田大学出版部、一九〇七年）
- 大谷正『日清戦争…近代日本初の対外戦争の実像』（中央公論、二〇一四年）
- 外務省編『日本外交年表並主要文書・上』（原書房、一九五五年）
- 嘉治隆一『明治以後の五大記者 兆民・鼎軒・雪嶺・如是閑・竹虎』（朝日新聞社、一九七三年）
- 亀井俊介『ナショナリズムの文学 明治精神の探求』（講談社、一九八八年）
- 川島隆『カフカの「中国」と同時代言説…黄禍・ユダヤ人・男性同盟』（彩流社、二〇一〇年）
- 杵淵信雄『福沢諭吉と朝鮮…時事新報社説を中心に』（彩流社、一九九七年）
- 工藤雅樹『日本人種論』（吉川弘文館、一九七九年）
- 久米邦武著・大久保利謙編『史学・史学方法論 久米邦武歴史著作集』第三卷（吉川弘文館、一九九〇年）
- 河野有理『田口卯吉の夢』（慶應義塾大学出版会、二〇一三年）
- 小熊英二『単一民族神話の起源…「日本人」の自画像の系譜』（新曜社、一九九五年）
- 同『「日本人」の境界…沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、一九九八年）
- 小沢栄一『近代日本史学史の研究…一九世紀日本啓蒙史学の研究』（吉川弘文館、一九六八年）
- 小寺謙吉『大亜細亜主義』（東京宝文館、一九一六年）
- 米原謙『国体論はなぜ生まれたか…明治国家の知の地形図』（ミネルヴァ書房、二〇一五年）
- 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会（一九六九年）
- 同『森鷗外…日本はまだ普請中だ』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）
- 小林一夫『森鷗外論…現象と精神』（星雲社、二〇〇九年）
- 小林一美『義和団戦争と明治国家』（増補）（汲古書院、二〇〇八年）
- 昆野伸幸『近代日本の国体論…「皇国史観」再考』（ぺりかん社、二〇〇八年）
- 坂野徹『帝国日本と人類学者…一八八四～一九五二年』（勁草書房、二〇〇五年）
- 坂元ひろ子『中国民族主義の神話…人種・身体・ジェンダー』（岩波書店、二〇〇四年）
- ジェームズ・M・シーザー『反米の系譜学…近代思想の中のアメリカ』（村田晃嗣など訳、ミネルヴァ書房、二〇一〇年）
- 志賀重昂『南洋時事』『志賀重昂田口全集』第三卷（志賀重昂田口全集刊行会、一九二七年）

- 重野安釋、久米邦武、星野恒編『稿本国史眼・一』（大成館、一八九〇年）
 ジョナサン・スペンス『中国を変えた西洋人顧問』（三石善吉訳、一九七五年、講談社）
- 新村出『新村出全集』第一卷（筑摩書房、一九七一年）
 末延芳晴『鷗外と日清・日露戦争』（平凡社、二〇〇八年）
 杉原四郎、岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』（日本経済評論社、一九九五年）
- 鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』（思文閣出版、二〇〇一年）
 鈴木善次『日本の優生学…その思想と運動の軌跡』（三共出版、一九八三年）
 鈴木正節『博文館『太陽』の研究』（アジア経済研究所、一九七九年）
 先崎彰容『高山樗牛…美とナショナリズム』（論創社、二〇一〇年）
 同『個人主義から「自分らしさ」へ…福沢諭吉・高山樗牛・和辻哲郎の「近代」体験』（東北大学出版会、二〇一〇年）
- 高坂正顕『明治思想史・高坂正顕著作集』第七卷（理想社、一九六九年）
 高須芳次郎『高山樗牛…人と文学』（偕成社、一九四三年）
 高橋義雄『日本人種改良論』（出版者：石川半次郎、一八八四年）
 田口親『田口卯吉』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
 武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』（思文閣出版、二〇一四年）
 伊達一男『医師としての森鷗外』（績文堂出版、一九八一年）
 同『続医師としての森鷗外』（績文堂出版、一九八九年）
 陳培豊『「同化」の同床異夢…日本統治下台湾の国語教育史再考』（三元社、二〇〇一年）
- 寺田和夫『人種とは何か』（岩波書店、一九六七年）
 同『日本の人類学』（思索社、一九七五年）
 トク・ベルツ『ベルツ日記・下』（菅沼竜太郎訳、岩波書店、一九七四年）
 徳富蘇峰（猪一郎）編述、『公爵松方正義伝』坤巻、（公爵松方正義伝記発行所、一九三五年）
- 中江兆民『一年有半 続一年有半』（岩波書店、一九五五年）
 長尾龍一『日本法思想史研究』（創文社、一九八一年）
 長尾宗典『憧憬』の明治精神史…高山樗牛・姉崎嘲風の時代』（ぺりかん社、二〇一六年）
- 永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』『永原慶二著作選集』第九卷（吉川弘文館、二〇〇八年）
 西川長夫『国境の越え方…比較文化論序説』（平凡社、二〇〇一年）
 同『国民国家論の射程…あるいは「国民」という怪物について』（増補版、柏書房、二〇一二年）
 ハインツ・ゴルヴィツァー『黄禍論とは何か』（瀬野文教訳、草思社、一九九九年）
- 芳賀登『明治国家の形成・国家概念の歴史の変遷』（雄山閣、一九八七年）
 橋川文三『黄禍物語』（筑摩書房、一九七六年）
 朴羊信『陸羯南…政治認識と対外論』（岩波書店、二〇〇八年）
 旗田巍『日本人の朝鮮観』（勁草書房、一九六九年）
 馬場優子『人種主義と人種的偏見』人類学講座編纂委員会編『人類学講座・第七卷』（雄山閣出版、一九七七年）

- 韓哲曦『日本の朝鮮支配と宗教政策』（未来社、一九八八年）
- 平川祐弘『和魂洋才の系譜…内と外からの明治日本』（河出書房新社、一九七一年）
- 廣部泉『人種戦争という寓話…黄禍論とアジア主義』（名古屋大学出版会、二〇一七年）
- 福田徳三『福田徳三著作集』第一九卷（信山社、二〇一七年）
- 前川理子『近代日本の宗教論と国家…宗教学の思想と国民教育の交錯』（東京大学出版会、二〇一五年）
- 松野尾裕『田口卯吉と経済学協会…啓蒙時代の経済学』（日本経済評論社、一九九六年）
- 松村正義『日露戦争と金子堅太郎…広報外交の研究』（新有堂、一九八〇年）、同『ポーツマスへの道…黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』（原書房、一九八七年）
- 同『新版・国際交流史…近現代日本の広報文化外交と民間交流』（地人館、二〇〇二年）
- 丸山博『森鷗外と衛生学』（勁草書房、一九八四年）
- 武藤秀太郎『近代日本の社会科学と東アジア』（藤原書店、二〇〇九年）
- 三谷太一郎編『言論は日本を動かす（一）』（講談社、一九八六年）
- 矢野暢『「南進」の系譜…日本の南洋史観』（千倉書房、二〇〇九年）
- 山崎國紀『評伝森鷗外』（大修館書店、二〇〇七年）
- 山室信一『思想課題としてのアジア…基軸・連鎖・投企』（岩波書店、二〇〇一年）
- 同『日露戦争の世紀——連鎖視点から見る日本と世界——』（岩波新書、二〇〇五年）
- 吉岡郁夫『日本人種論争の幕あけ…モースと大森貝塚』（共立出版、一九八七年）
- 吉田精一『近代文芸評論史 明治編』（至文堂、一九七五年）
- 吉馴明子『海老名弾正の政治思想』（東京大学出版会、一九八二年）
- 渡辺和靖『明治思想史…儒教的伝統と近代認識論（増補版）』（ペリかん社、一九八五年）
- 日本語第一次資料
- 姉崎正治「素戔嗚尊の神話伝説」『帝国文学』（第五卷八号）、一八八九年八月九日
- 同「高山樗牛に答ふるの書」『太陽』（第八卷第二号）、一九〇二年二月五日
- 同「高山樗牛に答ふるの書（承前）」『太陽』（第八卷第三号）、一九〇二年三月五日
- 伊藤博文「台湾会に置ける伊藤侯の演説」『大阪毎日新聞』、一八九七年四月二十四日
- 井上哲次郎「教育と宗教との衝突」『教育時論』（第二八八号）、一八九三年一月二五日
- 同「学者とは何ぞ」「国民之友」（第一二卷一八六号）、一八九三年四月三日

- 岩下方平「神道ハ祭天ノ古俗ト云フ論ヲ読テ其ノ妄ヲ弁ズ」『随在天神』(第一九六号)、一八九二年二月二〇日
- 木村鷹太郎「台湾島道伝記」『日本主義』(第一号)、一八九七年五月
- 久米邦武「日本幅員の沿革」『史学会雑誌』(史学会論叢第一輯)、一八九〇年六月一日
- 同「神道ハ祭天ノ古俗」『史学会雑誌』(第二編第二三、二四号、二五号)、一八九一年一〇月一日、十一月一日、十二月一日
- 近衛篤磨「同人種同盟・附支那問題の研究の必要」『太陽』(第四卷第一号)、一八九八年一月
- 下田義天類「田口卯吉氏ノ告ヲ読ミ併テ祭天論ヲ弁ズ」『随在天神』(第一九七号)、一八九二年四月五日
- 新村出「田口博士の言語に関する所論を読む」『言語学雑誌』(第二卷第四号)、一九〇一年七月
- 高木敏雄「文界の新現象」『帝国文学』(第五卷第四号)、一八九九年四月九日
- 同「日本神話歴史学の歴史的概観」『帝国文学』(第八卷第五号)、一九〇二年五月一〇日
- 高橋龍雄「高山林次郎氏の古事記神代卷の神話及び歴史を読む」『日本主義』(第四卷第二三号)、一八九九年五月
- 田口卯吉「内地雑居を論ずる・第二」『東京経済雑誌』(第二〇五号)、一八八四年三月一日
- 同「内地雑居の杞憂」『東京経済雑誌』(第四七八号)、一八八九年七月一日
- 同「井上哲次郎氏に質す」、『東京経済雑誌』(第五七三号)、一八九一年五月二三日
- 同「南北太平洋艦隊を組織すべし」『東京経済雑誌』(第五八九号)、一八九一年九月一二日
- 同「末広重恭君著東亜之大勢を読む」『東京経済雑誌』(第六六三号)、一八九三年二月二五日
- 同「居留地制度ト内地雑居・第二」『東京経済雑誌』(第六六八号)、一八九三年四月一日
- 同「講和の条件」『東京経済雑誌』(第七五一号)、一八九四年一月一日
- 日
- 同「国語上より観察したる人種の初代」『史学雑誌』(第一二編第六号)、一九〇一年四月
- 同「人種の初代の根據地を決するは国語に如くなし」『史学雑誌』(第一二編第一〇号)、一九〇一年一〇月
- 柳井嘯庵「国史眼ヲ読ミテ之レガ修正ヲ望ム(続)」『随在天神』(第二〇六号)、一八九三年一月五日
- 福沢諭吉「日支韓三国の關係」『時事新報』、一八八二年八月二五日
- 同「脱亜論」『時事新報』、一八八五年三月一六日
- 星野恒「本邦ノ人種言語ニ付鄙考ヲ述テ世ノ真心愛国者ニ質ス」『史学会雑誌』(第一一〇号)、一八九〇年
- 湯本武比古「日本主義」発刊に就きて」『日本主義』(第一号)、一八九七年五月

渡瀬常吉「日本の歴史と基督教との連絡」『六合雑誌』（第一九七号）、一八九七年五月一日

同日「我国是と宗教信念」『六合雑誌』（第一九九号）、一八九七年七月一日

日本語論文

雨田英一「福沢諭吉の「丸裸の競争」と「人種改良」の思想」『東洋文化研究』（第二号、二〇〇〇年三月）

同「高山樗牛の国家教育の思想…教育と国家と宗教（一、二、三、四、五、六、七、八、九）」『東京女子大学紀要論集』（第五二～五七巻、二〇〇一～二〇〇七年）

市丸成人「教育と宗教の衝突」考『教育哲学研究』（第八号、一九六三年）
石田雄「同化」政策と創られた観念としての「日本」（下）『思想』（第八九三号、一九九八年一月）

石田頼房「森鷗外の都市計画論…衛生新篇の都市、家屋の章について」『総合都市研究』（第六三号、一九九七年九月）

磯前順一「近代日本の植民地主義と国民国家論——津田左右吉の国民史をめぐる言説布置——」『思想』（二〇九五号、二〇一五年七月）

伊藤彌彦「田口卯吉の政治思想・上」『同志社法学』（第二六巻第二号、一九七四年九月）

井上琢智「添田寿一と日清・日露戦争：Economic Journal 宛公開書簡等に見る外債募集と黄禍論」『甲南会計研究』（第九号、二〇一五年三月）

今井修、鹿野政直「日本近代思想史のなかの久米事件」大久保利謙編『久米邦武の研究 久米邦武歴史著作集』別巻（吉川弘文館、一九九〇年）

岩井忠熊「日本近代史学の形成」『岩波講座 日本歴史・二二別巻一』（岩波書店、一九六三年）

大久保利謙「明治史学成立の過程」『大久保利謙歴史著作集・七・日本近代史学の成立』（吉川弘文館、一九八八年）

葛西裕仁「平泉澄の国体論における「単一民族観」『多元文化』（第一〇号、二〇一〇年三月）

堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルトと黄禍論」『上智史学』（第五七号、二〇一二年一月）

桂島宣弘「一国思想史学の成立——帝国日本の形成と日本思想史の「発見」——」渡辺公三、西川長夫編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』（柏書房、一九九九年）

金森誠也「カイザー・ヴィルヘルム二世の反日黄禍論」『国際文化表現研究』（第八号、二〇一二年）

鹿野政直「太陽」——主として明治期における——『思想』（第四五〇号、一九六一年二月）

川崎勝「田口卯吉の「私利心」——最初の著作『自由交易日本経済論』と『日本開化小史』を中心に——」『社会と倫理』（第二五号、二〇一一年）

川越修「世紀転換期ドイツの社会衛生学——A・グロートヤーンの言説を手がかりに——」『歴史学研究』（七〇三号、一九九七年一〇月）

河西晃祐「日本の南方起源「言説」と南進論」『上智史学』（第四六号、二〇〇〇

一年十一月)

川村湊「近代日本における帝国意識」北川勝彦、平田雅博編『帝国意識の解剖学』(世界思想社、一九九九年)

金光林「日鮮同祖論」を通してみる天皇家の起源問題』『新潟産業大学人文学部紀要』(第一号、二〇〇二年)

同「日本における朝鮮植民地支配と「日鮮同祖論」』『工学院大学共通課程研究論叢』(第二七卷第二号、二〇〇〇年)

工藤雅樹「日鮮同祖論」の史学史的意義」関晃教授還暦記念会編『日本古代史研究』関晃先生還暦記念』(吉川弘文館、一九八〇年)

小熊英二「国民」化という支配—多民族帝国としての「日本国民」概念』『歴史学研究』(第六九〇、一九九六年一〇月)

駒込武「異民族支配の(教義)・台湾漢族の民間信仰と近代天皇制のあいだ」大江志乃夫など編『岩波講座近代日本と植民地 統合と支配の論理』第四卷(岩波書店、一九九三年)

小峰和夫「田口卯吉の描いた開放経済国家日本の進路」杉原四郎、岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』(日本経済評論社、一九九五年)

昆野伸幸「近代日本の国体論」教育勅語・『国体の本義』・平泉澄『近代』(第一〇六号、二〇一二年三月)

酒井一臣「天孫人種は白人なり」田口卯吉の現実外交路線」中京大学社会科学研究所運営委員会編『アジア・太平洋地域における「ものの考え方」』(成文堂、二〇〇七年)

ジップル・リチャード「ヴィルヘルム二世の対東アジア外交におけるヨーロッパ観についての一考察」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』(第七号、二〇〇一年)

沈熙燦「明治期における近代歴史学の成立と「日鮮同祖論」——歴史家の左手を問う——」『立命館史学』(第三五号、二〇一四年)

ジャン・ピエール・レーマン「ヨーロッパ人の近代アジア観——日露戦争と黄禍論——」祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』(創文社、一九七七年)

シーラ・フェイト・フェイス「ドイツにおける「民族衛生学」運動——1904-1945年——」マーク・B・アダムズ編著『比較「優生学」史』独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開』(佐藤雅彦訳、現代書館、一九九八年)

新村出「田口博士の言語に関する所論を読む」『新村出全集』第一卷(筑摩書房、一九七一年)

関川悦雄「近代日本における人間形成の問題——内村鑑三「不敬事件」を中心にして——」『教育学雑誌』(第一〇号、一九七六年)

銭鷗「日清戦争直後における対中国観及び日本人のセルフイメージ——『太陽』第一巻を通して——」『日本研究』(第一三三号、一九九六年三月)

先崎彰容「高山樗牛における「道義」と「文学」——物質主義批判と外交問題——」『日本思想史学』(第三七号、二〇〇五年)

高田瑞穂「明治三〇年の日本主義——その本質と背景——」『日本近代文学』(第一八号、一九七三年五月)

丹野勲「明治日本の海外移民、移住・殖民政策と南進論」南洋、南方アジアを中心として』『国際経営フォーラム』(第二六号、二〇一五年十二月)

- 張翔「文明開化のコース…福沢諭吉と田口卯吉」『史学研究』（第一八〇号、一九八八年一月）
- 塚谷晃弘「田口卯吉」永原慶二、鹿野政直編『日本の歴史家』（日本評論社、一九七六年）
- 富山一郎「国民の誕生と「日本人種」（近代の文法）」「思想」（第八四五号、一九九四年四月）
- 長尾宗典「高山樗牛の「日本主義」思想——日清戦後期における「国家」と「美学」——」『日本歴史』（第六六七号、二〇〇三年十二月）
- 同「『日本美術史』の試み——高山樗牛における「国民美術」と「ロマンチズム」——」『季刊日本思想史』（第六七号、二〇〇五年）
- 中川未来「内藤湖南の台湾統治論…明治中期の国粹主義思想と植民地」『日本思想史学』（第四四号、二〇一二年）
- 中村尚美「日本帝国主義と黄禍論」『社会科学討究』（第四一巻第三号、一九九六年三月）
- 野村幸一郎「アジアへのまなざし——鷗外・天心の黄禍論批判——」『文学』（第八巻第二号、二〇〇七年三月）
- 橋川文三「高山樗牛」瀬沼茂樹編『明治文学全集』第四〇巻
- 長谷川一年「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学（一）…『人種不平等論』を中心に」『同志社法學』（第五二巻第四号、二〇〇〇年一月）
- 旗田巍「日本における朝鮮史研究の伝統」旗田巍編『シンポジウム 日本と朝鮮』（勁草書房、一九六九年）
- 馬場啓之助「田口卯吉論」『一橋論叢』（第五七巻第四号、一九六七年四月）
- 林正子「日清・日露両戦役間の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面——総合雑誌『太陽』掲載の樗牛・嘲風・鷗外の言説を中心に——」『日本研究』（第一五号、一九九六年十二月）
- 同「『太陽』文芸欄主筆期の高山樗牛——個人主義的国家主義から絶対主義的個人主義への必然性——」『日本研究』（第一七号、一九九八年二月）
- 同「総合雑誌『太陽』掲載の高山樗牛と姉崎嘲風の文明評論——二十世紀初年の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面とその意義——」『岐阜大学国語国文学』（第二五号、一九九八年三月）
- 平藤喜久子「日本における神話学の発生と高山樗牛——日本主義との関わりを中心に——」『国学院大学紀要』（第四三号、二〇〇五年）
- 平川祐弘「ロシヤにこだました「黄禍論」——独帝ウイリーから露帝ニツキーへあてた書簡について——」『西欧の衝撃と日本 人類文化史・六』（講談社、一九七四年）
- 平塚健太郎「陸羯南と南アフリカ戦争——反「帝国主義」からの転換の契機として——」『現代史研究』（第四八号、二〇〇二年）
- 広島一雄「高山樗牛」『国文学解釈と鑑賞』（第三七巻第一号、一九七二年一月）
- 前田愛「井上哲次郎と高山樗牛」『幻景の明治』『前田愛著作集』第四巻（筑摩書房、一九八九年）
- 松村正義「黄禍論と日露戦争」『国際政治…日本外交の思想』（第七一号、一九八二年）
- 同「日清戦争と黄禍論」東アジア近代史学会編集『日清戦争と東アジア世界の変容・下巻』（まゆに書房、一九九七年）

御厨貴「田口卯吉」三谷太一郎編『言論は日本を動かす(一)』(講談社、一九八六年)

水野守「志賀重昂」「南洋」巡航と『南洋時事』のあいだ——世紀転換期日本の「帝国意識」——『大阪大学日本学報』(第二〇号、二〇〇一年三月)

同「越境」と明治ナショナリズム——一八八九年条約改正問題における政教社の思想——『大阪大学日本学報』(第二二号、二〇〇三年三月)

同「政教社」「国粹主義」の展開——「人種主義」との関わりについて——『移民研究年報』(第一二号、二〇〇六年三月)

同「長沢別天の人種競争論」——一八九一〜九三年の在米経験を手がかりに——『歴史評論』(第七一七号、二〇一〇年一月)

三ツ井崇「近代アカデミズム史学のなかの「日鮮同祖論」——韓国併合前後を中心に——」『朝鮮史研究会論文集』(第四二号、二〇〇四年一〇月)

宮地正人「久米邦武事件の政治史的考察」——天皇制国家の確立と歴史学との関係によせて——『東京歴史科学研究会編『転換期の歴史学』(合同出版社、一九七九年)

同「史料編纂所の歴史とその課題」『東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』(山川出版社、二〇〇三年)

武藤秀太郎「田口卯吉の日本人種起源論」——その変遷と中国認識——『日本経済思想史研究』(第三号、二〇〇三年三月)

同「田口卯吉における文明史論の転回と「中国の衝撃」——日本的オリエンタリズム再考——」『社会思想史研究』(第二八号、二〇〇四年)

森川輝紀「大正期国民教育論に関する一考察」——井上哲次郎の国体論を中心に——『日本歴史』(第四六三号、一九八六年一二月)

森久男「田口卯吉の植民論」小島麗逸編『日本帝国主義と東アジア』(アジア経済研究所、一九七九年)

山口輝臣「なぜ国体だったのか」酒井哲哉編『外交思想 日本の外交』第三卷(岩波書店、二〇一三年)

山室信一「アジア認識の基軸」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』(緑蔭書房、一九九六年)

山辺春彦「陸羯南の交際論と政治像(上・下)」『東京都立大学法学会雑誌』(第四三卷第二号、二〇〇三年一月)

與那覇潤「近代日本における「人種」概念の変容——坪井正五郎の「人類学」との関わりを中心に——」『民族学研究』(第六八卷第一号、二〇〇三年)

廖育卿「明治期の〈黄禍論〉言説に見た森鷗外——講演「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」を中心に——」『熊本大学社会文化研究』(第七号、二〇〇九年三月)